

384  
236



始



贈呈

小林淡吉

384-236

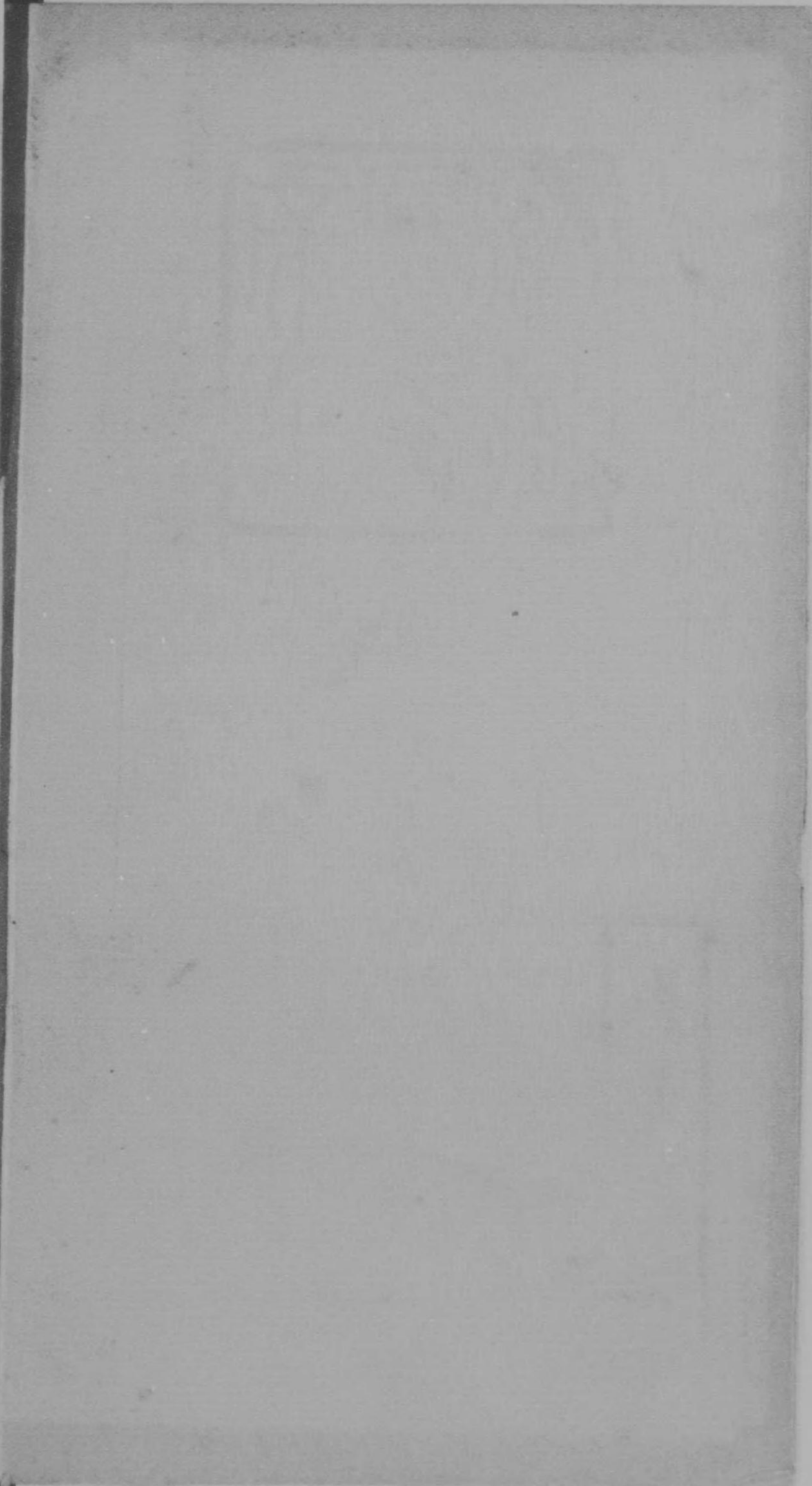
小林淺吉著

比律賓紀行

東京東方時論社

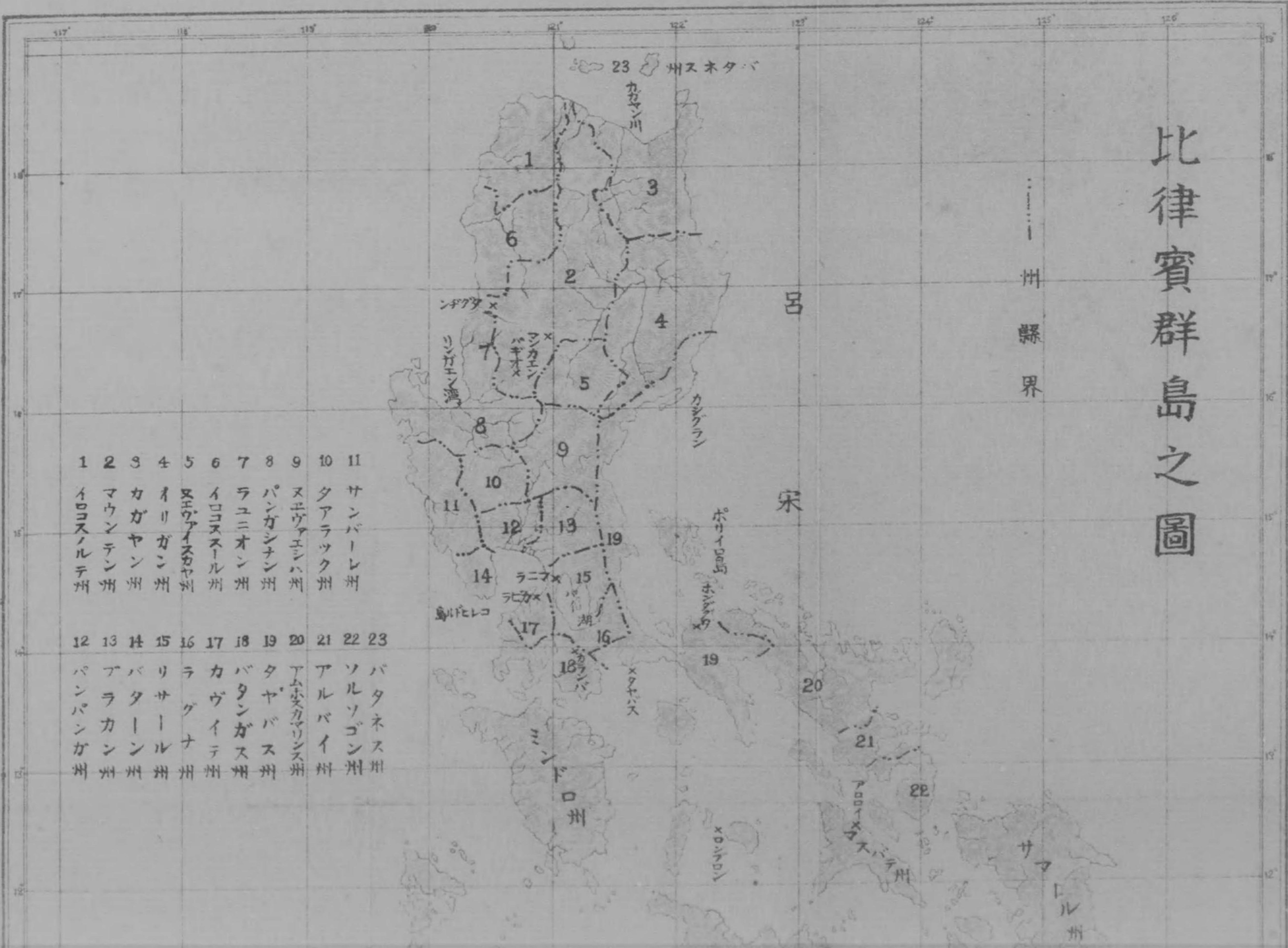
著者寄贈本

大正  
9 8 17  
寄贈

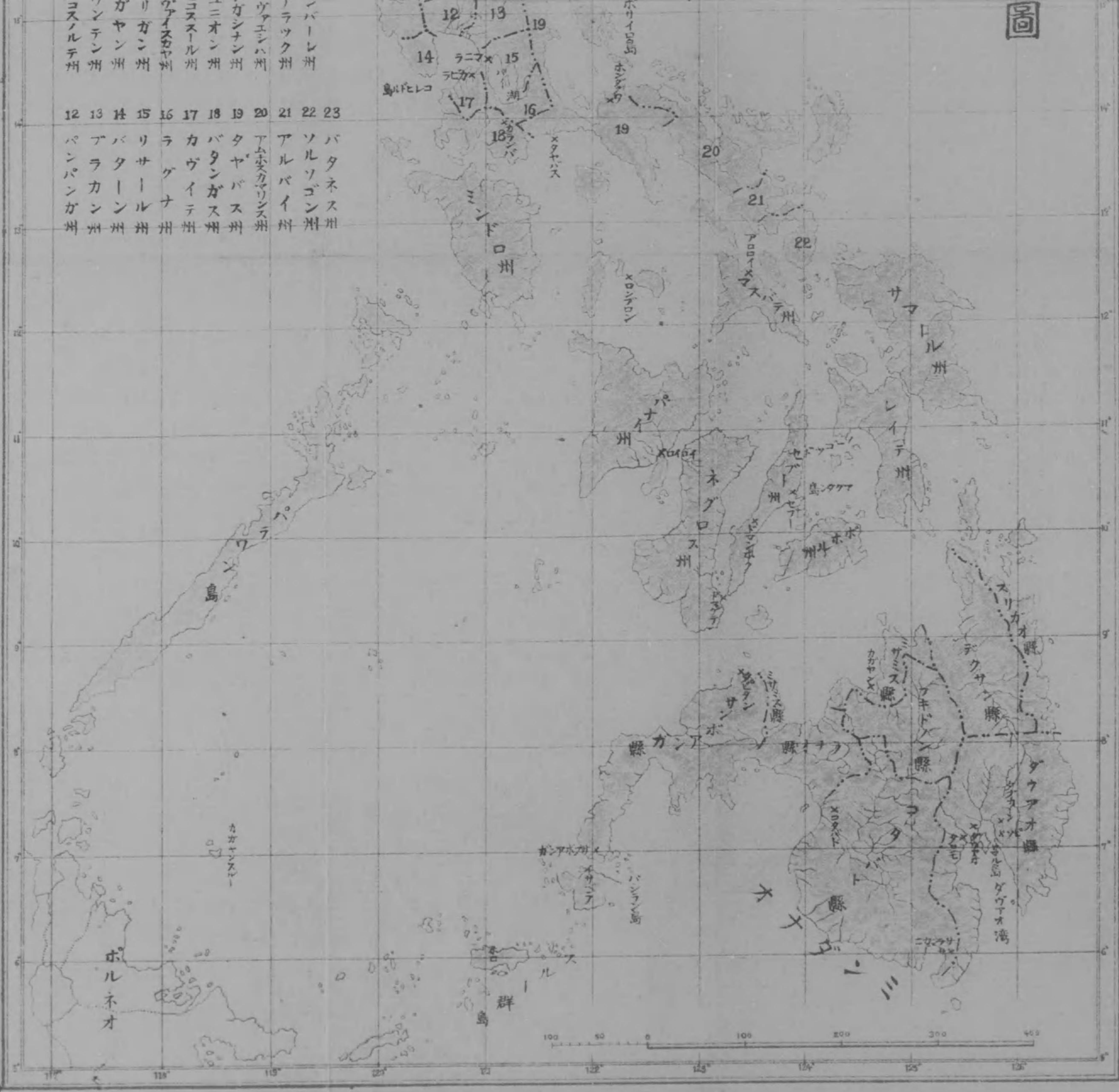


# 比律賓群島之圖

..... 州 縣 界



- |          |        |       |       |           |          |        |         |          |        |        |       |
|----------|--------|-------|-------|-----------|----------|--------|---------|----------|--------|--------|-------|
| 1        | 2      | 3     | 4     | 5         | 6        | 7      | 8       | 9        | 10     | 11     |       |
| イロコスノルテ州 | マウンテン州 | カガヤン州 | イリガン州 | ヌエヴァイスカヤ州 | イロコスノール州 | ラユニオン州 | パンガシナン州 | ヌエヴァエニハ州 | タアラック州 | サンパレー州 |       |
| 12       | 13     | 14    | 15    | 16        | 17       | 18     | 19      | 20       | 21     | 22     | 23    |
| パンパンガ州   | アラカン州  | バタール州 | リサール州 | ラグナ州      | カヴィンテ州   | バタンガス州 | タヤバス州   | アモタガリン州  | アルバイ州  | ソルソゴン州 | バタネス州 |



12 コスノルテ州  
 13 ソンテン州  
 14 ガヤン州  
 15 ガン州  
 16 アイヌヤ州  
 17 コスノルテ州  
 18 ニオン州  
 19 ガン州  
 20 ヲアエシ州  
 21 ラック州  
 22 パール州  
 23

12 パン州  
 13 プラカン州  
 14 バタール州  
 15 リサール州  
 16 ラグナ州  
 17 カヴィテ州  
 18 バタガス州  
 19 タヤバ州  
 20 アムボカ州  
 21 アルバイ州  
 22 ソルソゴン州  
 23 バタネス州

ホルネオ



## 序

小林朝陽君は操觚の士なり。滿洲に在つて筆を新聞に執ること數年、其後志す所有り、去つて麻尼刺に遊び、留まること一年、其の多方面の知識と透徹せる頭腦と奇警なる見識とを以て、此間比律賓群島各地の風土形勢より、政治商務及風俗習慣其他各般の事に至るまで、盡く其の狀況を將つて、極めて確實に、極めて精密に、之を調査し、之を視察して、大に融會する所有り。而して平易簡明に之を叙述して一書を著し、之を比律賓紀行と命じ、此次之を世に公にせむとす。君の言に曰く、從來此地觀察に付きて記述するもの、其真相に遠ざかり、鹵莽誇張に失するもの、往々これあり、從つて實地に在

りて差誤を認むるもの少からず。故に余は一事一物の微と雖も、務めて實に據つて記せんことを期せり。寧ろ平凡の誦を受くるも、敢て奇矯の言を弄し、讀者を誤ることを爲さずと、余聽いて以爲らく、是れ著述家の徳義にして最も貴ぶべきなり。従つて此書の價值推知すべしと。然らば則ち此書一度出でて、彼地の情形を知らんとする政治商務實業各界の士に便することや多大にして、且又觀風好奇臥遊の人を娛ましむること亦少からざるべし。喜ぶべきかな書成りて序文を徴せらる。是に於て乎言ふ。

## 國澤新兵衛

### 自序

平和會議の稱へられ、國際聯盟の起りて既に久しく、而かも國際比肩の事實は日に日にその理想に遠かりつゝあるの觀がある。弱少を庇護する筈の法規は存しても、之が解釋運用は強者の欲するがまゝに或は糊塗され或は粉飾され、強者たるの權利の前に一切の正義公道を蹂躪して顧みない。斯くて力の抑制を手段としたる人類平和の大道は、今や力の拮抗によるに非ざれば到底之を實現するに由なきことを、益々痛切に、寧ろ痛快な位ゐに實證しつゝある。其の矛盾を云々するを休めよ、是れ人類創成以來の歴史が最も明白に説明する所の動かす可らざる一時代劇である。此に於てか現代に平和を叫ばんとする者は先づ平和を提唱して公義の前に凡ての非倫を匡すべく、その前提



として一の資格を具ふるを要する。力の所有者たることがそれである。

吾人が現代に最も要求する所のものは力である、道義に基く偉大なる力である。我等は之を國家に要求し、國家は之を我等に要求する。個人と國家とが、各自に又た全體として此の力を有する時、之を有する者にとりて正義の宣傳及實行は決して至難事でない。而して内容ある文化の普達、組織的な經濟産業の興隆、整頓せる軍備國防の完成等は、實に此の力の脚燈フットライトであり、此等の各般に度つて灼熱せらるべき民族的發展の氣力は、實にその頭燈ヘッドライトであらねばならぬ。

我等は力の所有者たるべき日本民族の海外發展を説くに當つて、所謂北進乎南進乎を繰り返すを須ひない。オホツクの寒流に漁り勘察加の氷地に鑛る

のも男兒の事業であれば、南海の環礁を拓き翁鬱たる護謨林に獲るのも男兒の事業である。鬱勃たる心身の活力素の動く處、南も北も以て男兒の羈足を伸すに足るではないか。

予の比律賓行きは、實に斯の如き雄心やみ難くして行はれた。冴え渡る月かげをタヤバスの森の夕に仰ぎ、鏡を研いたやうな海峽の朝霧に眠むる間も、予の想は常に故國に馳せて、我民族的發展を愈々興隆せしむべき希望に満身の血を躍らせた。たゞ不幸にして四圍の事情は永く比律賓に留るを許さず、幾干もなくして南を去るの餘儀なきに至つた。唯だ予の去るは獨り予の去るに留まるが、此の好個の日本民族の發展地が、その全般を通じて未だ我國民の間に知られて居ないことは、獨り予の憂のみに留まらぬ。即ち曾遊の

歷程を辿り調査の材料を擧げて之を公にする所以である。我民族の南方經營史中の僅少な部分にでも與り得れば著者の本懐である。

終りに苳み予の比律賓行き及本書の刊行に關して深甚なる御援助を給はりし恩師金子雪齋先生、前滿鐵副總裁國澤新兵衛閣下、大谷光瑞師、宮尾舜治閣下に對して篤き感謝を捧げる。

大正九年六月

大連市役所樓上に於て

小林 淺 吉 識

目 次

一、南へ、比律賓へ、……………一

二、大連から馬尼刺へ……………六

三、馬尼刺市……………一三

    (一) 馬尼刺市鳥瞰……………一三

    (二) 市中見物……………一八

        ——馬車の四時間——トンドの市場——共同墓地——植物園と水族館

        ——競馬と闘鶏

    (三) 郊外週遊……………四九

— アンチボロ行 — マラボンの平和郷

#### 四、タヤバス紀行

..... 七

— ホンダクワまで — マウバンの町 — 椰子山見物 — マウバンの

麻山 — 土人の音楽

#### 五、歸航の記

..... 一六

— ユエンサン號 — 香港の夜泊 — 久しぶりき大連

#### 六、比律賓概観

..... 一三三

(一) 史外史観

..... 一三三

(二) 天然力

..... 一四〇

(三) 政治組織

..... 一四七

(四) 土地問題

..... 一五二

(五) 産業一斑

..... 一五三

(イ) 農業

..... 一五三

— 米作 — 玉蜀黍 — マニラ麻 — 椰子 — 砂糖 — 煙草 — マゲ

— 家畜

(ロ) 農業以外の産業

..... 一六五

— 林業 — 鑛業 — 水産 — 工業

(六) 外國貿易

..... 一七〇

— 最近五個年實數 — 重要貿易品表 — 對手國 — 日比貿易

(七) 商權を握る支那人

..... 一七九

(八) 比律賓土人……………一八六

— 種族別 — 生活狀態 — 家族制度 — 教育 — 音樂と諸式 — 嗜好と習慣 — 能力如何

七、比律賓に於ける日本人……………二二五

(一) 馬尼刺の邦人……………二二五

— 職業 — 日本人商工會 — 日本人小學校 — ミタナヲ俱樂部

(二) ダヴァオの邦人……………二二七

(三) 其他の邦人……………二三一

(四) 邦人の産業的勢力……………二二六

— マニラ麻とアバカ — 事業家と労働者との關係 — 各種移民の收

入

(五) 移民の覺醒と善導……………二五二

(六) 如何にして發展すべきか……………二五八

八、滯比雜記……………二六六

— 果物と野菜 — 日本芝居 — 土人芝居 — 惡魔拂ひの行列 — 島の正月

附 録

渡航者の心得

(一) 旅券の手續 (二) 旅費 (三) 携帶品 (四) 語學

目次  
寫眞版

マニラ市エスコルタ通……………一五  
舟に埋るゝバシツク河……………一五  
ルネタ公園のリサール像……………四一  
水族館及びマニラホテル……………四一  
マニラ市トンド區の土人家屋……………四七  
闘鶏の稽古……………四七  
タヤバスの農家……………九三  
椰子並木の道……………九三  
火山マヨン(呂宋富士)……………一九  
比律賓土人の田植……………一五五  
甘蔗畑に働く土人……………一五五  
マニラ麻園の土人……………一六七

目次

椰子の實を運ぶ村夫……………一六七  
洗濯する女……………一八九  
ニツバ家屋……………一八九

# 比律賓紀行

小林 淺吉 著

## 一、南へ——比律賓へ

人口の繁殖と民族の發展とは、互ひに因果の關係を有して居る興國の二大要件である。而して内に人口が繁殖するに従ひ、民族は勢ひ外に發展せざるを得ない。是に於て發展を企望する國家の腐心するは植民問題にあり、今や國家政策の中樞は、實に此の植民問題にありとまで絶叫せらるゝに至つた。即ち多年モンロー主義を持ち、全米を以て勢力圏とす

るに甘じてゐた米國すら、布哇を併せ比律賓を領有するに至つた事は、國際政局の變に基いたとは云へ、又以てその傾向と見るべきである。

翻つて我國を觀れば、人口は年々著しき増加率を示し、國土は極めて狭小なるに係らず人口の密度は實に世界の第三位を占め、各階級を通じて、就職難生活難の聲を聞く事喧しく、引いて食料の缺乏と騰貴とを見、食料問題は職業問題と共に、我國民の生活に對する偉大なる一脅威となるに至つたのである。

然らば之に對する救濟策は如何。工業の發達、農業の改良、耕地の整理等を初め、種々の方策もあるが、然も自ら限度があり到底永く之を以て解決し得たりとすべきものではない。此の救濟策として、結局現在既に過剩の域に在る國民と、今後更に増加すべき國民とは、之を海外に移住せしめねばならぬ。實に我國民の海外發展は、生存上、其必要を迫られてゐるものである。

然らば我國民は將來如何なる方面に移住し、如何なる地方に發展すべきか。由來、日本國民の天性は寒熱何れの地方に對しても發展し得べき素質を有してゐる。西伯利亞、滿洲、樺太の如き氷雪深き地方に於て活動し得ると共に、赤道直下の熱帶地方に於ても發展するに困難を感じない。従つて如何なる地方でも、以て我國民を容るゝに足るものあれば、直ちに之に赴いて活躍の歩を暢し得るのであるが、我國民と雖も、固より健康状態、其能力、四圍の状態等により、自ら幾許かの寒熱に對する適不適を免れぬ。されば滿韓移民集中論が旺んに叫道されたにも拘らず、我移住民は未だ三十萬を出でず、北海道と樺太とは、當局の獎勵あるに拘らず、移民の渡航は臺灣に比して遅々たるものがある。之等の地方、元より我國民の生活に適應せぬのではないが、國民は自己の利益の最も大なる方面を選んで進む結果、より以上に經濟的價値に富む地方に赴くを利としたからである。斯くして我國民は却て布哇、合衆國及び加奈陀に向つて滔々として移住し、其後移民渡航禁止の實施に會

つてからは、國民の眼は自ら南方に注がる、に至つたのである。

斯くて猖獗の地として忌まれてゐた南洋、南米も、我國民の移住する者が増加するに従つて、漸く生活上の樂園として紹介され、南洋發展論は識者の口を齊しくする處となつた。然も我邦人の南洋發展は、決して事新しい問題ではなく、其の源は既に三百年の昔に發してゐるのである。即ち御朱印船の發展は、比律賓、瓜哇、スマトラ、暹羅、印度に及び、隨所に日本人町を築いたものである。不幸にして徳川幕府の執つた鎖國政策は、折角の南方發展を根本より覆し、其の經營を水泡に歸せしめ、近年婦人及び之に寄食する男子に依つて、其素地を造らるゝに至つたのは甚だ遺憾な次第であると謂はねばならぬ。

今や南洋は其地理的關係より、又其富源の豐沃なるにより海外發展を志す者の焦點となり、特に比律賓に至つては、大正六年度に於て一千三百七十四名、大正七年度に於て三千七百八十九名の移住者を出し、其在留邦人の數は一萬四千人を超過するに至り、今後の發展は更に著しきものあるべきを豫想されてゐる。之を瓜哇、スマトラ、セレベス、印度、暹羅、馬來半島の全部を合したる在留邦人の漸く二千名内外なるに比すれば實に天地霄壤の差ありと云ふべく、南洋特に比律賓群島が如何に我邦人の移住に適せるかは、事實が之を證明して餘りあるのである。

由來比律賓の地たる、其廣表は我國に匹敵するも、其人口に至つては漸く七百五十萬人に過ぎず、文物は進み産物は豊富に氣候甚しく暑からず、其距離亦遠からず、加ふるに、邦人の移住を歓迎するの風潮あり、實に絶好の海外發展地とするを憚らぬ。移住者にして其方策を誤るなくんば、將來之に十萬廿萬の移住民を送るに至る事は、必ずしも難事ではないのである。



## 二、大連からマニラへ

大正七年六月八日、大連汽船株式會社荷物船興順丸に便乗して比律賓へ向ふ。同船は速力十浬、荷物船としては船足の速い方で八日間程で馬尼刺港に到着する。大連から長崎を経て馬尼刺へ行くのにくらぶれば、日數に於て、費用に於て、よほど便利である。午後一時、船は徐々に纜を解いて、大連港外の波をけつて一路南方に針路を向けた。大連よ、さらば。

芝罘沖に達した頃、機關の響と舷側を叩く浪の音を殘して、靜かに暗の幕は下された。此の船中の無聊を慰するものは、マドロスどもがかすくのロマンスである。

九日、寢床を離れて上甲板に上る。雲のきれ間に星がチロ／＼と瞬いて、霧を帯びた海風がジメ／＼と肌を薄ら寒い。やがて東の方の綿雲に電光のやうな紅味がさし始めたとも

ると、それが次第に濃くなつて、纏て黒雲の千切目から、朱盆のやうな半圓形の太陽が現はれた。二等運轉手が「日蝕だ日蝕だ」と叫ぶ。成程三日月の形をしたのが次第に大きく圓くなつて行く。

午後、船は丈餘の荒波に甲板を洗はせながら、青島沖を通過した。そして十一日の正午には上海沖をすぎた。右舷はるかかの波路に黒山島が見える。左の方には舟山列島の波間に揺曳するを見る。十二日は終日雨風強く、波浪は甲板を侵し、十浬の基本速力もやつと六浬しか出ない。白い波頭と黒い波の谷とが入り亂れ飛びちり、海上に黒白の縞を折つて舳に亂れ散る。空には鉛色の雲が低かつた。

翌くる十三日は風も些か夙いで雨も止み、波も餘程穏かになつた。聞けば昨夜は船員一同一睡もとらずに波浪と戦つたと云ふ。船は既に臺灣沖にある。日こそ照らぬが著しく暑熱が加はつた。合ひ服でも凌ぎ難いので、一皆な白服に着換へた。午後左に新高山嶺きの諸

峻嶺、右に澎湖列島を見て、數日間の單調を慰めたが、同時に風と共に多數の蚊や蠅がふえて一方ならず船上の快を削ぐ。山東角邊から船に飛び込んだ五六羽の小鳥は、澎湖島へ飛び去つたが姿を見せぬやうになつたが、其代り變つた小鳥が二羽、奇聲を放つて船中の無聊を慰さめて呉れる。船に恐れて飛び上る無数の飛魚も、洋上に於ける奇觀の一つである。此の夜から餘り蚊が多くなつたので、蚊帳を吊つて呉れた。

十四日夜、船は臺灣の南端を過ぎ、十五日夕には早くも呂宋島の沖に懸つた。東方遙に呂宋島の山が見える。十六日朝は船が岸近く沿うて行くので、呂宋島の山々は手に取るやうに見える、山は高きも低きも一面樹木が生ひ茂つて、斧鉞を加えた跡も見えぬ。海岸には所々に椰子林を見る外、海中に生ずるマングローブ樹が密生し、見渡す限り青々緑々、海水の蒼色と相映發し、山容亦た、數奇を凝らして得も云はれぬ景色である。臺灣からの小鳥も、鳥かけの深縁を慕うて飛び去り、蚊も大部分少くなつた。蠅は尙多少居るが、う

るさいと云ふ程でもない。波は油を流した如うに穏かで暑さも臺灣沖より幾分薄らいだ。此日驟雨三回、一回二十分位にして止む。驟雨の後の涼しさは又格別で、身の熱帶地帯にあるを忘れる。夜八時馬尼刺灣外に着いたが、米國參戰以來、夜中の入港を絶対に禁止し、犯すものあれば用捨なく大砲を見舞ふ事になつてゐるので、止むなく近海を周航して天明を待つ。前方三個の燈臺からは、絶えず探照燈の光りを投げ掛けて警戒といふ物々し十七日午前四時半、東雲の空明けて消えのこる星かけをついて船は徐々と灣内へ入る。探照燈の光りも消えて、東方山岳の上から、朝日が晃々と照り輝いた時、船は米國船五隻を先導に、同三隻を護衛にして灣口の峽を通過した。右手の島上には燈臺、數十棟の兵舎が朝風を受けて涼しさうに立つて居り、更に進むとキャピテの軍港が見える。軍艦三隻、巡洋艦らしいのが碇泊してゐた。警備の嚴しいのとは反對に、此の邊のながめは甚だ優麗である。九時半港外着、米兵式の帽を被り、カーキー色の服を着けた年の若い土人

の検査醫が、検査船から上つて来て、船長に病人は無いかと尋ねる。それが甲板に齊列した船員一同を見渡した丈でサツサと引揚けると、入代りに米人の水先案内が二十四五貫もあるらしい偉大な體軀をヨチヨチと大儀さうに運んで来た。十時港内に入つて、遠く棧橋離れて錨を下した。

マニラ港は西班牙時代には簡単な木造棧橋があつた丈で、ランチの外、大船は皆沖繋りの状態であつたのを、二米領に歸してから工費二千萬圓を投じて改修したものである。先づバシツグの南岸、舊マニラ城の西方に廣大な埋立地を作つて、其處に六百五十尺と六百尺の鐵棧橋を築造し、外面に長さ二哩の防波堤を造つた。棧橋の上には亞米利加式の上屋が造つてあり、其中には電氣クレインが据付けてある。棧橋附近の水深は三十呎で、客船は何れも此棧橋に横付けになる。之を東洋一の良港を以て知られてゐる大連港に比べては、物の數にも入らないが、港としての設備は充分に出來てゐる。但し興順丸の如き貨物船は

依然沖繋りの状態で、棧橋に繋留する事を許されぬ。

此港のすぐれた點は、バシツグ川を浚渫して吃水十八呎以下の船をエスコルタの横手まで溯江し、河の兩岸に繋船し得るやうにしてある事で、小汽船は全部此處に繋船する。市の中央部尤も殷賑を極むる商業中心地區に近いので商人の受くる便宜は非常なものである。比律賓群島の貿易輸入約二億ベソ輸出約二億七千萬比(大正七年)の四分の三は、マニラ港で行はれるので、港内には常に大船船が繋留して居り、日本船も日本郵船、東洋汽船、大阪商船、大連汽船等の船が常に往來しつゝ、ある。日本との貿易は、殆ど全部マニラに於て行はれるので、支那米國の貿易の如きも他港で行ふのは殆ど輸出品のみに限られてゐる。他港とはイロイロ、セブ、ホロ、サンボアンガ、バラバツクの四港で此内サンボアンガには濠洲行き日本船が着く。

船が錨を下すと間もなく、二名の税關吏が遣つて来て、諸般の手續きに取懸る。余も手

荷物委託、旅行免状の提出等の手續を済まして、一服喫つてゐる處へ、今村君が税關のボートに便乗して出迎に來た。税關棧橋から上陸し、手荷物の検査を待つて、午後一時カルテラ(馬車)に乗り、同君の住居を指して車を急がせた。馬車はインタラモース(舊城内)に這入り、學校、寺院、比律賓群島政府の上下兩院の前を通過して、城内を突抜け、バシツグ河に架した鐵橋を渡つて、エスコルタ街に出で、ロサリオ、アスカラガ街を通過し、棧橋から小一里足らずのトンド區フランコ街に余等を下した。此邊は日本人の漁師の住んでゐる地域で、數丁行くと海岸に幾多の日本漁船が繫留してある。

今村君の宅は瀟洒な木造西洋家屋二階には露臺の設けもあつて、其前には音樂臺があり、横手前には大きな活動寫眞館がある。露臺に面した通りは中央に遊歩地が設けてあつて、芝草の中には椰子、檳榔樹、芭蕉、アカシヤ其他數十種の熱帶植物が植ゑてある、半町足らずの先は海岸で、泥砂遠く連なり、海岸にはバンカ(獨木舟)や日本漁船が砂の上に引上げてある。家屋は土人町の事故、洋式木造家屋とニツバ家屋とが相半し、餘程美觀を殺いで居る。

## 三、馬尼刺市

### 一、馬尼刺市鳥瞰

馬尼刺市は、支那人が之を小呂宋と呼ぶが如く、實に呂宋島の要樞であり、且つ比律賓群島の眼目である。餘程以前から開けたもので、西班牙人渡來期即ち、三百年以前に於て既に人口三萬を算してゐた。此邊の住民は、北島二大民族中のタガログ人で、當時はボルネオから移住したモロの酋長の支配下に在つた。當時の文明程度は、他の東洋諸國民と大差なく、甘蔗、椰子、藍、甘藷、其他の球根類、バナ、檳榔子、ランソム、タマリンド菜などを耕作し、又たアバカから布を織り、棉の木から棉を取り、礦物を精鍊して器物及び兵器を作り、小なる大砲を鑄造する位までに進んでゐた。宗教は南方モロ人の感化を受

けて、回教を奉じてゐた。支那との貿易は、尤も古く、西歴千二百年代、既に陶磁器、金  
 屬器、硝子器、鐵針、眞珠、絹布、藤製籠の類を取引してゐたと云ふに察しても、當時の  
 マニラが、決して蠻人の蠢動する僻地でなかつた事を知る事が得る。

マニラの市街は、バイ湖からマニラ灣に注ぐ、バシツグ川の南岸に濫觴し、三百餘年前  
 は、川沿に椰子材を積んだ障壁が設けられ、其上に大砲が載せられて、後方の市街が掩護  
 されてゐた。家は所謂ニツバ家屋で、木や竹の柱にニツバ椰子を編み込んだ家根、壁も竹  
 かニツバ椰子を編んだもので出来てゐた。西班牙人は初め南方のセブ島を攻取り、次に  
 パナイに移り、六年目にマニラに攻入つて難なく之を略奪した。其總大將は有名なるレガ  
 スピで、マニラを攻落したのは、其係のサルセドと云ふ、當時二十一歳の青年と、ゴイチ  
 と云ふ老武者とであつた、丁度西歴千五百七十一年で、爾來西班牙は太守を此地に置き、  
 比律賓の首府としたのであるが、其貿易は墨西哥のアカプルコに限り、年々兩地の間を往



通タルコスエ市ラニマ



河グツシマるるも埋に舟

復する一隻の商船で、貨物を輸出入して居たので、昔時盛大に赴きつ、あつた商業は、一時に衰頹すること、なつた。其後千七百八十九年（百三十年以前）宇内の大勢に伴れて、西班牙の施政方針も變り、千八百三十七年（今より八十年前）マニラを外國貿易に開放すること、なり、支那との貿易が非常に殷賑を極むるやうになつた。但し、當時のマニラは猶不潔な市街、不便な船舶の寄港地として知られてゐたのみで、日本領事館の如きも、一旦置いて引揚けたやうな状態であつたが、米人領有後頼に面目を一新するに至つたのである。

現在のマニラ市も、矢張り此歴史の舊形の上に存在する。即ちバシツグの南岸には、昔時の障壁に代つた西班牙の古城がある。其城の郭内は、舊市街であつて、重なる官衙、寺院學校等が存在し商店、住宅等も多數存在してゐる。之は米人領有前のマニラを語るもので、住宅商店等何れも西班牙式の木造二階家である。商業區域は此城と川を隔つる北岸に

あつて、サンタクロス、エスコルタ、ロサリオ街等を中心に、其附近を圍繞してゐる。マニラの人口は約三十萬人、市内の廣さは横濱、神戸に比すべく全市を若干の行政區に別けてゐる。

新マニラは島人が誇稱して、東洋の眞珠市と云ふが如く、比律賓に此町あるかと思ふ程立派な町である。水道の設備は元より、電燈、電車、街路等も完全に整つてゐる。其のバグンバヤンの遊歩地、ルネタ公園、タフトアベニューの大通り、マニラホテル前の大廣場等は、純然たる米國式を發揮し、特に下水の完備は鋭意努力した丈けあつて、河溝の不潔なるに似ず、立派に行届き、木造洋式家屋には、必ず水浴室と洗滌式便所の設備がある等思ひ切つた遣方で、衛生の設備は遺憾なく整つてゐる。交通機關は前記電車の市の内外を縦横に網を張つてゐる外、自動車四千臺、ガルテラ、カロマタ（共に馬車にして上等をカ、ルテラと云ひ、下等の重に郊外に使用するものをカロマタと云ふ）が約四千臺あつて、其

賃金も物價の高値なるに似ず、廉價である。

馬尼刺市の人口三十萬人を分類すれば、最も多いのがタガロク人(土人)で其數約二十五萬、支那人が約四萬(一説に十萬人とも云ふ)米國人西班牙人が約一萬で、日本人は約三千、此外英國人印度人等がある。

## 二、市中見物

**馬車の四時間** マニラに来て忙しい数日が過ぎると、最早仕事らしい仕事を持たぬ身の氣樂さ。渡來以來三年になる今村君が、今日は一日遊んでも宜いといふのを好い機會に、先づ學校や諸官衙のあるマラテ、インタラモース方面へと足を向ける。六月二十三日午前八時、遅い家では未だ朝飯の時刻だが、炙り付ける様な陽は面も向けられぬ。氣温は華氏の九十度、折悪しく風がないので餘計に暑い。街頭に立つてシツと犬を叱る様な合圖

をみると、馬車が心得てやつて来る。飛び乗ると勢ひよく他の車を追越して走つて行く。

一體マニラではよく短距離な場所か手ブラの場合でなければ歩かない。十分も十五分も歩かねばならぬ處であれば、労働者や下級社會の者で無い限り、電車を利用するか、馬車を利用するかする。といふのは歩けば汗の爲めに訪問などの場合は具合が悪いのと、會社其他一般家庭にしても、訪問時間は午前八時頃から十一時頃迄、午後の二時頃から四時頃までと、殆ど不文律の様に定つてゐるから、人を訪問する際などに、ノコノコ歩いてゐる餘裕がない。僅か三十萬人のマニラ市中に、自動車の數が四千臺、馬車の數が五千臺もあつて、それが殆ど休む隙なく走つてゐるのを見ても、如何に多數の人が車を利用するかが分る、併しそれは決して贅澤と許りは言へないのである。従つて馬車自動車は如何なる町々をも絶えず疾驅してゐるので、車道などウカウカ歩いては居られない。

馬車はビノンドの寺院を左りに、ロサリオ街を通つて行く。

ピノンドの寺院は、石造の素晴らしい大きなもので、トンドの寺院よりは少し小さい位に見える。トンドの寺院は航海圖に、左方に當りて大なる圓塔屋あり、附近をトンド區と稱すとか何とか書いてあつた如く、港外からそれと判る程大きなもので、附近には小瀟洒した遊歩地があり、芝草の中に數十種の南洋特有の植物が栽ゑてある、音楽堂の設けもあつて、毎木曜日の午後四時から六時迄は軍樂隊の演奏がある。此のピノンドの寺院の前にも斯んな廣庭があつて、南洋アカシヤの大木に圍まれ、二基の噴水塔からは、滾々と清水が逆しつて居る。樹の下には、靴磨きの子供が十數人陣取つて、通りすがりの人をよびこむ何れも貧民の子で、裸足で頭髮も蓬々と生やしてゐるのが多く、何處の町角にも二人三人位陣取つて、歩行の際など馬車自動車の往復と共に、マニラに於ける煩さいもの、一つである。靴磨きと共に此下に陣取つてゐるものは、花環賣の一團である。これは女丈けに服裝も清々しく、山と積んだ黄、紅、白、紫、色取り々の花を、椰子の樹の葉やマンダロー

ブの木の葉などの、圓く束ねたものに挿して、附近一帶に飾り付けてゐる。誠に美しいもので、最初の間は此前を通る度に、我知らず足を止めるのであつた。

話はもとにかへる。此のロサリオの町は、支那人町の中で最も賑かな町であり、マニラの町でもエスコルタの洋人町と共に、最も立派な商店町である。支那人はトンド區内に廣大な支那人町を造つてゐるが、此處は支那人の中心地で、附近十數町の間は、東西南北支那人許り、大小の商舖が楡比して居る。比律賓に於ける商工界の全權を握つて居る彼等の勢力が如何にも窺はれる。此邊は一帶に大商店の集合地で、大厦高樓軒を並べ、窓前や店内の米國式の品物の飾り様は、用の無い者をすら惹付ける。此通りをバシツグ河に近く右に曲れば、瀟洒な芝原が設けてあつて、其中には噴水塔があり、多數の銀行會社が軒を並べてゐる。我横濱正金銀行出張所、東洋汽船會社出張所、三井物産會社出張所などあつて、堂々と英米人經營の諸會社銀行と拮抗してゐる。日本人が通つて尤も氣持の好



い處である。ロサリオ街とエスコルタ街との曲り路に、日本バザーがある。日本の勸商場的に日本商品を美々しく飾り立て、土人の客を引いて居る。馬車は西班牙橋を渡つて、右に河岸を通り、城内に入る。此處には法王派の大本山、其他の派の大本山がある。千五百九十九年頃から千八百年頃迄の建築に係り、何れも石造の廣大な建築である。今村君があれが學務局、あれが上院と馬車の上から一々説明して呉れる。

マニラの舊城は、日本の十萬石位の大名城。廓にも匹敵しようか。其構造は西班牙式であるが、支那の城に最もよく似てゐる。平地の四方を四角に石壁を設けたもので、只支那の城と異つてゐる點は、支那の土瓦壁が石と異なる丈けのもので、壁の厚さは下部の方で五間許り、城壁の上部には大砲を据ゑる設備と人が三四人並んで通れる丈けの道があり、そして四方に樓臺が設けてある。朝鮮の城も之に酷似で、日本の城とは稍異つてゐるが、日本の城の始まりとして知られてゐる織田信長の安土城、松永久秀の志貴山のそれなどは

何れも葡萄牙や西班牙の形式を學んだものだといふ丈けに、大體似寄つたものである。昔は城の廻りは深い濠になつてゐたさうであるが、今は全部之を埋めて、遊歩場に當てゐる。

城内の町を通つて、城を突抜けると、レアル門の出口には水族館がある。城壁を活用した面白い建物である。城の北西角にフォートサンチアゴと云ふ小さい城がある。これは此城の根元で、昔のマニラ村の遺跡であると云ふ。是れを過ぎて愈々タルネタ公園内に入ると右に棧橋、港内の船舶等が見え、マニラホテルの廣大な建物が、四邊を睥睨してゐる。此島人は之を稱して東洋一のホテルだと誇稱してゐるが、上海のアストル・ハウスや香港の香港ホテルの方が美しく見える。

ルネタ公園の中央には、比島人が神の如くに畏敬する愛國者ホーセ、リサール博士の立像がある。如何にも學者らしい顔付で、豪傑風の處は見られないが、一管の筆に依つて比

島人を蹴起せしめた博士の意氣は、その眉目の間に遺かにそれと窺はれる。バゲンバヤンの舊刑場は、公園の中に取り入れられて、樹木が生ひ茂つてゐる。リサール博士を初め、愛國の志士の多くが、千斛の怨を呑んで此處で殺されたのかと思ふと、美しく咲誇つてゐる眞紅のフアイヤー、ツリーにも、彼等の流血の滴に今に染められてゐるかの様に思はれ惆悵去るに俛びない。

これから有名なタフト、アペーの大通りを車を走らせる。中央病院、馬尼刺大學、師範學校、中央小學校、女學生寄宿舎、市役所、印刷局等、何れも鐵筋コンクリートの宏大な建物である。此の間馬車を走らすこと約一時間半。此の邊りの様子も大體頭に這入つたので、後で悠然又見物し直すこと、して、再びタフト、アペーの通りをエスコルタの方角へ引返す。

一體比律賓城の周圍は全部を公園と稱して宜い。西班牙橋際からルネタに掛けての一帶

は、縦横に道路が貫通して、電車も數線通つてゐるが、道の兩側は何れも一面の青々たる芝生でフアイヤー、ツリー、檳榔樹、ニツバ椰子其他數十種の樹木が配置よく植ゑてある。西班牙橋に近く、製氷會社と郵便局との前には植物園があつて、鳥獸の檻も數多あり、園内は縦横に道が仕切つてあつて、ベンチ、音樂堂、四阿屋の設備もあり、馬車は今此の植物園の方へと驀然に走る、波の様な芝生、青々と大な葉を心持風に靡かせてゐる椰子、其他の樹、今を盛りと咲き誇る眞紅なフアイヤー、ツリーの花、南洋氣分は四方一面に漂つて何とも云へぬ愉快さである。馬車は植物園の手前を右に折れて、エルミタ區コロン街に入ると、右手に小さい日本人商工會の建物が見える。パシツグ河に懸つた橋を渡つて、サンミゲル區の町々を走らすと此邊には日本人が大分住んでゐる。キャツボ區に入ると松井バザア、岡部醫院など、日本式の看板が次第に増して来る。此區は尤も日本人の住んでゐる處で、アスカラガ街の日本領事館裏は、土人家屋との飛び交りながら、宛然たる日本人

町を構成してゐる。日本人旅館の關ホテル、藤田旅館、其他數軒の旅館も、此邊に散在し日本雜貨店もキヤツボバザ―其他數軒ある。住人は重に大工で、移民が初めてマニラでの一夜を明すのは、大抵此のキヤツボバ区である。之等所謂日本人町を瞥見した後、サンタクロス街に出で、此日の見物は一先づ之を打ち切りとして、再びエスコルタ、ロサリオ其他の町々を通つて午過ぎに歸宅した。周遊四時間、マニラ市の重なる處は見て廻つた譯だが、地圖と照らし合せると、やつと五分の一を歩いたばかり、然し残りは全部住宅地で格別のところでもないと言ふ話。

正午からは中山君に連れられて、三井物産の手前なるビノンドの寺院附近にある稅務局へ行つて人頭稅の二圓も支拂つた。これで比律賓中は何處でも大手をふつて歩ける身となつた譯だ。

### トンドの市場

比律賓に暫く居るからには、マーケットを知つて居られねばならぬとい

ふ。それではと、翌朝中山君を案内役に頼んで出かける。トンドのマーケットは、區の北方にある。マニラ市に於ける十個許りのマーケットの内一番大きいのが此のマーケットで次はキヤツボのマーケットである。キヤツボのマーケットは大きさでは第二位にあるが、品物の好い點では第一である。それと云ふのは此の市場が、市の上流階級の住宅地を背後に控へてゐるからで、城内マラテ區エルシク區方面の米國人西班牙人等が、皆此市場で多數の食料品を買ふからだ。トンドの市場は、二町四角程の大きさである。五棟のトタン家根の大平家で、下は一面セメントで固め、外側は大きな鐵柵で圍んである。一帶比律賓の市場は、獨りマニラ市にかぎらず、どんな田舎に行つてもあるので、其制度は何れも同じで日の出から日没まで日曜日は正午迄とされてゐる。商人は一日幾干と定つた税金を市役所なり町役場なりに納付する事になつてゐる。

さてトンドの市場には商人が三百人も居ようか。三百人と云へば三百軒の店になる勘定

で、其半數は土人の女、其半數は支那人である、此處には、日本人の菓子店も店を出して居る、漁師も多數に店を出して居るが、色の黒い彼等は、殆ど土人と見違ふ許り、時々日本なら負けるぞ』など、日本語で冗談を云ふので、それと判るのがある位である、市場は、其棟に依つて野菜、果物部、牛豚鶏肉部、魚類部、乾物部に分れてゐる。面白いのは此中に飲食店の設けがあつて、市場の商人が全部これ一日の食物を攝る外、買物に行つた連中までが時を嫌はず盛んにバクツク事だ。トンドの市場は、五萬人の食料を供給するといはれてゐる丈けに、其品物の豊富な事は、全く初めて行つた者の目を驚かす。時は午前八時人の出盛り、市場の前は人と馬車とで通り切れぬ程の混雑で、市場の中は肩摩擦撃、宛然、戦場のやうで、浮々見て歩いては居られぬ。それでも折角來たのだからと、果物の女王と云はれてゐるマンゴー、日本の柿に似たチーコなどを買つて、漸くの思ひで外に出る。

此市場は夜明け早々から此様な人集りで、多少閑散なのは一時二時の間位のものだと云ふ。市場の前には支那人の雜貨商と向き合つて日本の雜貨商店が五六軒固つてゐる。此處の雜貨商店は高橋商店を初め、皆邦人雜貨店中有數なもので高橋商店の如きは、店員を十數名使用して、卸賣を専門に傍ら小賣をも營んでゐるので、一ケ年四十萬圓餘の商賣をやると云ふ、氏は所謂空拳黨の一人で、七八年間に今日の成功を見たのである。重なる商品は玩具で、日本から輸入する玩具の内、日本人の手に入るもの、四分の一以上を商ひ外に菓子、食料雜貨、化粧雜貨等を商つてゐる。

そこを出てアスカラガの通りに出ると、電車道に併行して鐵道線路がある。この鐵道は石炭其他の鐵道用品並びに船車連絡貨物をバシツグ河畔の税關から運ぶもので、海岸を迂回した上、此通りに出でトンドの中央驛(マニラ驛)に迄通じてゐるのである。

此のアスカラガの通りは、半里以上に及ぶ長い通りで、キャツポに近く、此處から半里

許りの處に、日本領事館があり、其前には日本人小學校がある。高橋商店の前を出た此通りに、マニラに一つの拳闘場がある。拳闘は日曜だけ許されてあるので、入場料は五十錢、土人は鬪額と共に之に金を賭ける。此處に來た序に此附近に在る日本人の漁師町と屠獸場と送便所とを見る事にする。

屠獸場はアスカラガ街の南端、海岸近くに置かれてある。一日に牛豚百數十頭を屠殺する丈に、却々の大規模で、血に塗れた牛の皮や肉體が、堆高く積まれてある。血は流れたものを一度取集め、其後場内を洗ひ流す事になつてゐるが、血腥い臭ひと其場の光景とは、到底永く見るに堪へぬ。殺すのは夜明頃の人の見ぬ時だといふ。

送便所は屠獸場の前方海岸に有る。市内の糞便は鐵管で此處まで誘送され、蒸汽唧筒の力で、二哩許の沖の、海中の深所へ放出する仕掛になつて居る。米國が此方策を取つたのは、赤痢、虎列刺腸窒扶斯等の豫防手段にも依るが、實は一番十二支腸蟲を恐がつたのに

依る。十二支腸蟲の検査は却々嚴重で、移民は甚しく之に惱まされるので、大抵移民會社の手を経て日本を出發する時、出發港で嚴重に検査して貰つた上で出掛けるが、更に上陸の際嚴重な検査を受ける事になつてゐる。

市の衛生設備は、マニラ市の處で一寸附言してある通り文明都市として耻かしくない丈に整つてゐる。道路は一等街路の外、必ずしも清潔だとは云へないが、多數の掃除人があつて、日中隅から隅へと掃除して行く外、家庭の塵芥も毎日一度宛、馬車なり自動車なりが來て取り集める。飲食店其他、特に惡水の溜り易い處へは、殺菌劑を蒔いて歩いて、蚊の發生を未然に防ぐ手段を取つて居る。市の繁華な區域には、一定した建築條例が設けてあつて、必ず糞便を流出せしむる便所を設けせしめる。然し家屋が僅々百圓内外で出来るニツバ式や、洋式とニツバ式混淆の家にあつては、二百圓以上を要する便所の設備は到底經濟が許さない。で之等は市の衛生課から支給する糞桶を利用する事になつて居り此等

の糞便は自動車で此の送便所まで運んで来た上で鐵管に注ぎ込み、同じく海中へと放出するのである。

米國政府が十二支腸蟲の撲殺に腐心してゐる結果、農作物に對して糞便を肥料とする事を嚴禁してゐるので野菜類の如きは年々其出來が悪くなつて行く。敢て野菜類と云はず、總ての農作物は、年々衰へて行くと言つて宜しい。然し之は敢て十二支腸蟲の關係のみではないので、一體土地が肥沃な比律賓では、肥料を施さんでも植物はよく成長する。従つて支那と均しく施肥に對する觀念がない。土地が多く人民が少ない丈に、折角丹精して耕した土地でも、數年の後土地が瘦せて來ると捨て、顧みない。土人に言はせると高い肥料を施してゐるは經濟が許さないと云ふ。其結果は畑地外に金を費さずして、立派に肥料となる多數の草が叢生してゐるのを見ても、自然に任せて決して之を芻取つて堆肥にしようとはせぬ。

送便所の建物は、白堊の小粋な平家建てで、機械は二百馬力位かと思はれるのが二臺据ゑて在る。其の横に五十坪許りの花園があつて、手入れもよく行届き、數十種の珍草木が植ゑてあるのは、場所柄だけに一種の皮肉を感じしめる。

去つて屠獸所の裏町へ行くと、此處は日本人の漁師町で、數町の間土人の家と飛び飛びに、日本人の家がある。潮風と日に焼けた赤黒い顔の漁師が、土人着物、メリヤスシャツにカーキ色綿布の洋袴、浴衣の着流しなど、種々雑多な風體で、網の修繕や、乾魚の仕分けなどを遣つてゐるのを見受ける。漁師對手の日本人の食料雜貨屋、理髮店、氷店などもある。漁師の本據は此處で、此外トンド區の海岸一體に散在してゐるキャツポ區が大工の本據地で、勢ひがよいと同じく、トンド區は漁師の勢力下に在ると云つて宜い、彼等はゾロリとした浴衣の着流しで、日中市中を闊歩する。夜など日本流に浴衣を膝の邊まで捲し立てる者すらある。全部がさうでもないが、斯うした連中が多い結果、マニラ市中の日本

人の中で、尤も風儀が悪いと云ふので、在留日本人一同が肩を擧める。警察でも日本の浴衣着は風俗を素すと認めて、屋外では男子には絶対に之を禁止する事にした。然し風俗に關しては、案外平氣な日本人は、今でも往々之を犯す。そしてそれがトンド區の住民に尤も多いのである。

**共同墓地**

サルバンテースの共同墓地は、マニラ市に於ける立派な觀物の一つである。晝から空が曇つて餘り暑くないのを幸ひに、今度は自分一人で見物に行く事にした。

電車に乗つて一旦サンタクロスへ出る。こゝでリサール行に乗替へると、電車は市の北部へと進んで行く。附近には支那人も大分店を出してゐるが、多くは土人の住家である。途中左側にサンラサールの癩病院がある。敷地が随分廣く、高い塀で圍まれてゐる。其前を右に少し行くと、大きな競馬場がある。此處では月の第一日曜日に限つて競馬の催しがあり一勝負に何千圓と云ふ大金が賭けられる。日本人中此競馬で年中ピーピーしてゐる者

も少くないとの事だ。同じく電車で行く途中に、マケットが二つある。何れも規模が小さく店も甚だ振はない。電車がアスカラガの通りを曲ると、幾組もの葬列に出遭ふ。派手な葬式は自動車で棺を運び、會葬者も自動車馬車で之に續く。或は六頭立四頭立の馬車で棺を運ぶもの、或は擔いで行くのなどがある。會葬者は何れも馬車で之に續き、何れも一組二組の樂隊が伴いて、賑かに囃し立て、行く。曲は勿論哀みの曲で、哀れつばいものだと思ふが、音楽通でない自分には、それが如何にも賑かな曲に聞えて、悲んでゐる親族等を慰むべく、特に氣を咬る様な面白い曲を奏して行くかの様に感ぜられる。

電車の終點に支那人經營の狂人病院がある。随分立派な建築で、在留者が多い丈けに、患者も随分あるらしく、家を建増するの盛に工事をやつてゐる。電車を降りると其處は墓地の入口で、小石を敷詰めた幅六間許りの立派な道路が有る。兩側は公園の様になつてゐて、芝生の中に珍草木が整然と植ゑ付けてある。道々石の腰掛が左右に設けてあつて、

美しい庭である。此處にもフアイヤーツリーの樹が澤山植ゑてあつて、眞紅の花は枝もたははに咲誇り、美しい鳥が樹間を飛んで、幽邃の氣が満ちてゐる。折柄丁度土人の葬列が遣つて來たので、其後に跟いて行くと、入口から拾町餘りも行つた處で、漸く墓地に達する。葬式の一隊は棺を下すと、會葬者一同棺側に集まつて死者に最後の袂別を告げる、棺の蓋は此時開けられて、會葬者は口々に祈禱の詞を唱へながら棺に近いて接吻の型をする。此間に蠟燭が棺前に供へられ、花環なども供へられる。式が終ると豫め掘つてある穴に棺を埋め、皆一握り宛の土を棺に掛ける。中々鄭重な儀式である。遠方からそれと偷み見て、若しや日本人の墓もがなと四邊を調べて見た。

墓は種々雑多の様式になつてゐる。多くはセメントで作つた十字架であるが、土饅頭の上に死者の塑像を置いたもの、寶塔式の大きなものを造つたもの家を作つてあるもの、セメントの十字架の下に更に臺を作り、種々の裝飾を施して、中に死者の寫眞を嵌め込んだ

ものなど、一々計へれば何十種となくある。寫眞と云へば御丁寧に生前の寫眞と死後棺内に於ける撮影とを、二面飾つて有るものもある。高さ一丈餘もある塔を作り、十字架の下に天使の像を四隅に立て、電燈の設備を施してあるものもある。こんなものになると墓一つに少く共數千圓の金が懸つてゐる。墓の四隅には、大抵美しい草木が植ゑてある。多分生前愛好した植物を移し植ゑたものであらう、要するに此墓地は甚だ美しく、日本の墓地とは全く比較にならぬ程に立派なものである。道は三間幅位のものから、六間幅位のものが適當に縦横に付けてあり、墓地の整理は充分に整つてゐる。

一時間許りの間探して見たが、支那人の墓が目についたのみで、遂に日本人の墓は見付からぬ。止むなく引返す事としたが、際立つて美しい墓に限つて、支那人のものが多いは、支那人の富の程度と其風習がそれと察せられる。此處に附加へて置かねばならぬのは十一月一日の墓祭りである。日本の盆祭りと同じく、此日故人の親族知友は朝から翌朝ま



での間に墓に参詣する。これは比律賓に於ける年中行事の中、尤も美しいもので、墓には何れも立派な花環が幾つも飾られ、晝夜間断なく蠟燭が燈されて、夜は此大墓地が火の海人の海と化する。そして親族は終夜を墓畔に通夜して、故人を追憶する、誠に美しい習慣がある事である。

**植物園と水族館** エスコルタ街の方から、西班牙橋を渡ると、前方右に古城、左りに之を圍んだ並木道がある。市の雑踏と炎暑とに倦み果てた心身が、青葉戦く風と、涯しない此緑の並木原に接した時、如何に蘇生の思ひを爲す事であらう。此邊りは何時見ても見厭かぬ、何程歩いても歩き厭かぬ、マニラ市の樂園である。さて樹蔭に直射する日光を避けながら、ブラ／＼と見物する。植物學に知識の無い自分に取つては、其數知れぬ珍草木が、何科の何であるやら一向要領を得ぬが、南洋特産の草木として、寫眞に繪畫に見たものや、更に嘗て見た覚えの無い珍草木が、それからそれへと並び植ゑられて、見る目も眩

るしい。特に多く眼に着くのは、椰子科の植物で、其種類は十數種、何れも天を衝いて轟立してゐるのが、幹の色も違へば葉の格好も違つてゐるが、注意して比較して見ないと、中々それとは思へない。遂には木を枯らして了ふといふ恐ろしい蔓の類も、大は二尺平方もあらうと思はれる大きな葉から、小は日本で見る小さい蔓の類まで、何十種とあつて、日本の温室に移し植ゑたらばと思はせる。數丈の高い枝から、繩暖簾の様に數十百の根を垂れてそれがまだ地に届かず長い根を風に靡かせてゐるタコの樹もあれば、枝といふ枝が切り取られたやうに枯れ落ち、上の方にだけ少しの枝を着けたものもある。

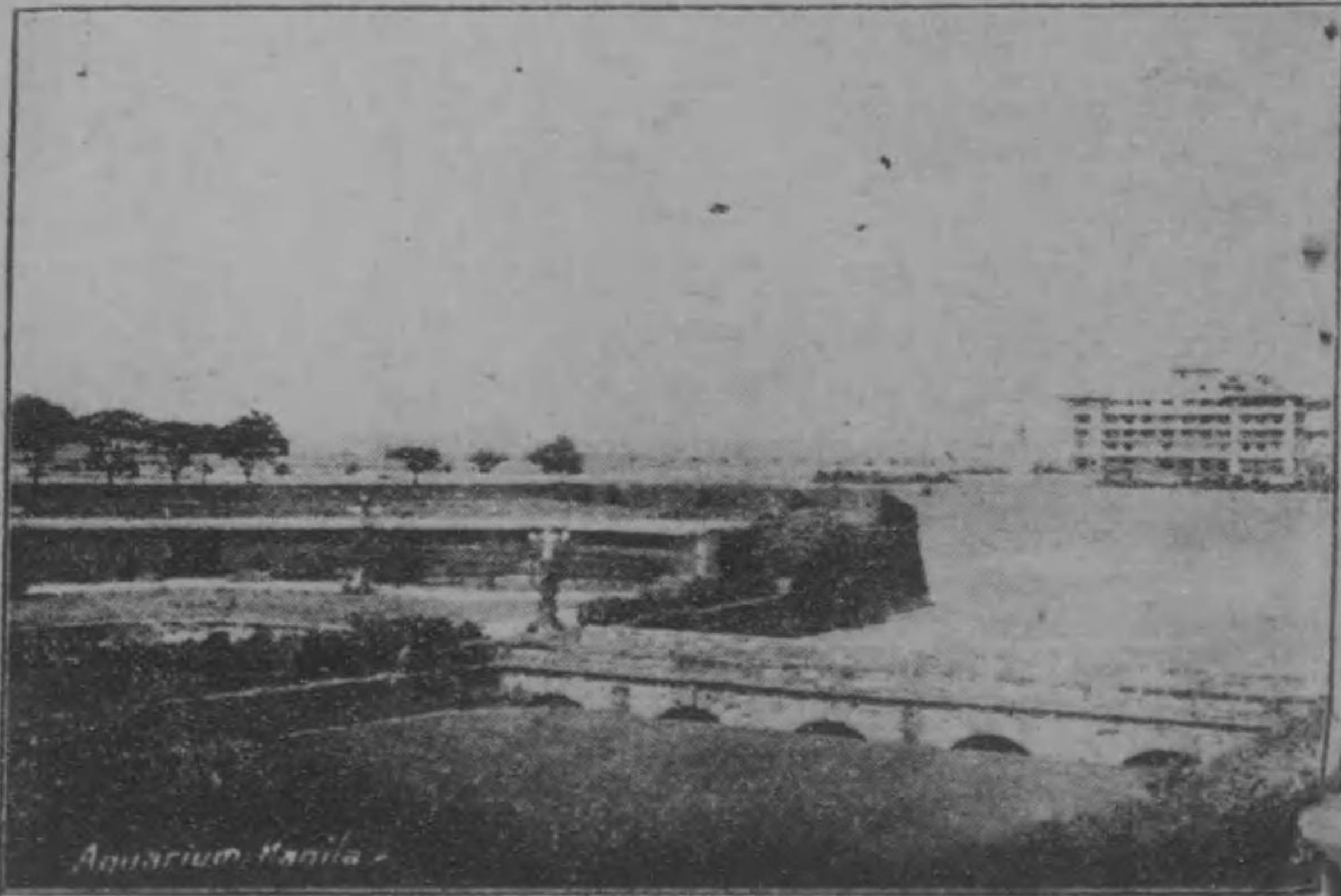
植物園の中には、動物園も設けてある。鳥の檻の中には、孔雀や南洋鳥や鳩や鶯などが澤山飼はれ、頭よりも嘴の方が大きい不格好な鳥や、鹿と常に遊んでゐる鹿に集る澤山の蠅を上手に食つてやる白い鳩位の鳥など、數に於て必ずしも多くは無いが、可成り珍奇な鳥が飼つてゐる。其外には虎豹の猛獸から、猿兎に至る迄二十箇の獨立した檻に飼は

れてゐる。六尺餘の大鱉、二丈位の大蛇、四尺餘の大蜥蜴などが初見の赤毛布を驚かせる。水族館の建物は古城跡の一部を利用したもので、隧道の中に魚が飼はれ、上部は遊歩場になつてゐる。此處には南方ミンダナオ方面のモロ族が攻めて来た當時の軍船や、土人の漁具などが飾つてある。軍船は人が二十人位を乗れる大きさで、立派な彫刻が施してある。現代南方支那の戎克に似て、更に多数の彫刻を施したものである。大きくて飼ひ切れない大きな鱈や鯉、鯛、鯖などの類は干し固めたり、或は其骨許りを飾つてゐる。貝類は眞珠貝を初め數百種陳列してある。比律賓の貝類の輸出は年額五十萬圓以上に及んでゐる丈に、珍奇なもの、光澤の美しいものが多い。

生魚の種類は五六十種もあらう。月に二回宛新奇なものを十數種入れ替へる事になつてゐるが、日本では見られぬ珍魚が多く、特にその色彩に富んだものは見れば見る程美しい。其他池の中には鱉、大龜等數十匹飼つてある。一巡して上に登ると其處は城壁で、昔の



ルネタ公園内リサールの銅像



(左)館族水  
(右)ルテホヲニマ

三馬尼刺市

歩道には青芝が生えてある。城壁の上に登ると、ルネタ公園は元より、港内植木園を眼下に見渡すことが出来る。

### 競馬と闘鶏

七月七日、今日は第一日曜日で競馬の催される日である。幸ひ天気も宜いので、中山君と共に出掛ける事にした。

馬車を走らせて癩病院の附近まで行くと、もう此邊は馬車と自動車と歩行者とで織るが如き雑踏である。それに隨つて吸ひ込まれるやうに、競馬場の構内に這入ると、三町餘もある廣大な観覧席には、既に數千の群集が陣取つてゐる。下方の柵内には又數千の見物人が日光の直射するのも平氣で右往左往し、ガヤ／＼と口喧しく騒いでゐる。席は一二三等に別れて、一等席には米西人等が主に陣取る。米國の軍人も妻君連れや、朋友連れで澤山に來てゐる。其等が何れも財布から札の束を取り出して、自分の好きな馬に賭ける。愈々馬が駆け出すと何れも腰を浮かして勝負に熱中し、中には狂氣の様に騒ぎ立てるものも有る。

土人はと見れば、之れは又一層盛んで、金を賭けない者までが、口々に番號を叫んで罵り合ふ。勝負が終ると一連り配當の金高の噂で又賑ふ。競馬の馬券は一枚五圓で、土人は之を五分して賣付ける方法も取つてゐる。配當金は馬に依つて多寡があるのは勿論で宜い馬程配當金が少ないが、それでも大抵十圓以上になる。買手の無かつた馬が運よく一勝した場合の如きは大變で、一枚に就いて貳千圓からの配當が着く。此日も日本人の漁師が貳人共同で一枚買つたのが、運好く勝つて九百八十圓の配當を得た。二人は意氣揚々と札を鷲掴みにして自動車で歸つて行つたのは、對手が日本人丈に滿更悪い氣もしなかつた。場内を一巡して見ると、日本人も四五十人來てゐる。大抵は負け黨の方で、一番違ひで惜しかつたとか、あの馬をと思つたが餘り賣行きが宜かつたからとか零し合つてゐる。土人の馬券賣りが『日本人馬券々々一圓一圓』などと叫んで賣歩いてゐるのを見ると、餘程買手が有ると見える。

勝つた者は意氣揚々と笑ひさやめいて自動車馬車で引揚げ、負けた者はつまらなさうにトボ／＼と徒歩で行く。それでも歸る者と來る者とは、常に相半ばして、場内の人波は中々に減りさうにも見えぬ。まだ今日は名物の闘鶏を見る豫定なので、宜い加減に競馬を見捨て今度はマイバホへと馬車を走らせる。

マイバホの闘鶏場は、市内電車線マイバホの終點にある。前方は木造亞鉛屋根の洋式家屋で、後方は破風造りの大きなニツバ家屋である。入場料は一人に就き二十仙、鶏を抱いて這入る者は十仙で済む。場外には土人の食物店がズラリと並んで客を呼ぶ。比律賓人は昔から盛んに闘鶏をやる。日本でも明治初年頃大分流行して自分も少年の頃見受けたが、比律賓では今日でこそ亞米利加政府で日曜祭日の外興行を禁止した爲め幾分か衰へたが、昔は連日興行されたもので、其盛な事は到底實地を見ぬ者の想像の及ばぬ處である。

闘鶏場はマニラ市中にこそ無いが、町端れには幾つもあり、田舎には村と云はず町と云

いず、いづ、一つや二つはある。闘鶏場の税金は、比律賓に於ての尤も高いもので、大きな闘鶏場では一年間に貳千圓以上も納めねばならぬ。それにしても此高額の税金を拂つて、立派に立行く處が盛んに儲かつて行くのである。足一步田舎に入れば誰でも鶏の多いのに一鷄を吃するが、之等の鶏の中には闘鶏が随分飼はれてゐる。闘鶏は其強弱に依つて相場に高低があるが、大抵一羽十五圓以上で、高いのになると百圓でも賣らぬと云ふのがある。闘鶏は其値段が高い許りでなく、賭けに對する利害が伴ふものであるから、飼養者が之を大切にすることは餘所目には可笑しい程に見える。試みに一人の飼養者に子供と闘鶏と何れが可愛いかと問うて見たら、子供には叶はないが其次ぎには之だと笑つて答へた。それ程あつて彼等は朝夕鶏を抱いて或は蟲を殺し、或は毛並を揃へ、或は他の鶏と喧嘩の練習を行らせるなど、子供の放任主義に似ず目を放たず手を掛ける。

斯んな風で闘鶏の爲めに日常の暮しを立て、ゐる者も澤山にあり、さなきも之を唯一の

娛樂としてゐる者は、比律賓人の大部分で、之が爲めに一家流散の憂目を見る者も数多いのである。闘鶏には必ず賭が伴ふので、所有者は一勝負に四十圓五十圓の金を賭ける事も珍らしくない。見物人は又見物人同志で五十錢位から、五圓十圓位迄の賭を行るのである。従つて蹴合ひが初まると同時に、見物人は其勝負に熱中して、面白い勝負になると小屋も破れん許りに騒ぎ立てる。さて場内に入つて見ると、中は立錐の餘地もない程に人が集つてゐる。闘鶏場は場の中央にあつて、鐵格子で四方を圍まれてゐる。一方には検査役、行同警官などが並んで、鶏の所有者は圍みの中に控へる。闘鶏には左の脚に鋭利な刃物が附けてある。従つて愈々蹴合ひが初まると一方は必ず殺されて了ふのである。

さて總ての準備が整ふと、鶏の所有者は、鶏を抱いて互に敵手の鶏の頸の邊りを突かせる。斯うして戦ひの氣を起させるのである。双方が鶏を放すと頸を突かれたので憤激した鶏は、羽毛を立て、蹂り寄り、施て盛に蹴合ひ初める。一上一下凄じく蹴合つてゐる内、



屋家人土の區ドント市ラニマ



古稽の鶏園

一方の體から鮮血が飛出したと見ると、もうバツタリ倒れて死んでゐる。誠に凄慘なものであるが、土人は之を面白がつて、一勝負ある毎にワイノくと騒ぎ立てる。勝つた方が多額の金を得て、鶏を撫で勞はりながら欣然として場外に出ると、負けた方は悄然と流血淋漓たる死骸を下けて退場する。

斯くて一勝負は三四分間で終つて蹴合は次から次へと進んで行く。大抵の勝負は勇壯活潑に蹴合ふが、中には鶏の悲しき眼前に落ちてゐる餌に氣を奪はれて敵の羽毛を立て、隙を覗つてゐるのも構はず、一口二口啄んで、哀れ果ない最後を遂げるものもある。到底永く見るに堪へないのでそこ／＼に此處を引揚げた。

鶏の蹴合は朝の八時頃から夕方まで續けられる。大抵一日に五六十番の勝負があるのである。如何に比律賓人が勝負事の好きとは云へ、此凄慘な有様を面白がつて一日を闘鶏場に暮すのには驚かざるを得ない。

### 三、郊外週遊

#### アンチボロ行

七月二十日、タヤバス州から來遊した齋藤君に促されて、郊外アンチボロに涼を趁ふ事とした。アンチボロには寺院の有名なものがある。土屋氏は之を神女寺と命名してゐるが、土人の尊崇する寺で、毎月一回祭禮があり、其本尊の神體は或種の男に好かれるもので、金次第では見せて貰へるといふ。マニラ市から十哩、日歸りの散策には恰好である。

朝の八時にアスカラガの寓居を立つて、電車に乗る、車外は折柄華氏の八十五六度、直射する日光は却々に暑いが、車内は風があるので甚だ心地宜い。乗合の客はケンタツキー兵營歸りの米人の將校や土人の兵隊が多く、市場歸りと見える米婦人が、籠に果物や罐詰や牛肉類を入れて場所も狭しと陣取つてゐる。土人の女迄が威張り散らして腰を据ゑて果

物を頼張り煙草を燻らす。電車は間もなく市の住宅區域を突破して構外に出る。左方に日本人經營の比律賓に唯一個しかない硝子壘製造工場が見える。之は元西班牙人が多大の金を擲つて建設したものだ。比律賓には原料が少しもないのと、一年の内の最暑氣なる三四、五、六月及び七八月の雨期以後二ヶ月間從業出來ぬのとて引合はず、廢物となつてたのを日本人が引受けて、硝子屑を原料として漸く經營を續けてゐるものである。電車線路の兩側は一面の水田で、遠くに竹藪や土人のニツバ家屋が散在して居る光景は、岡山附近の村落の景色に彷彿たるものがある。但し三間幅の道路にはカルマタと自動車とが陸續疾驅して、折角の日本の氣分をも打毀して了ふ。水田には一面に丈けが五六寸の草が生ひ茂つてゐる、餘り密生してゐるので、變に思つて聞いて見ると、それは稻ではなくて馬と水牛に食はす牧草だと云ふ。馬尼刺市には馬車の數丈けでも四五千臺あり、附近の交通も皆馬車で、其他に水牛も多數居る、之が爲めに牧草の値段が高く、マニラ附近では稻を

作るよりも此牧草の方が數倍利益がある。爲めに市から二三里の間は、水田と云ふも稻を植ゑるのは一つもない。それから少し行くと左方に米人の共同墓地がある。フアイヤーツリーやマンゴー、イランイランの樹などが植ゑてあつて如何にも墓地に相應はしい。

齋藤君が電車線路に近いそれが、我菅沼貞風氏の墓であると致へて呉れる。やがてケンタツキー兵營に來た。兵營を過ぎるとバシツグ川の岸に出る。濁水の悠長な流れの中を、獨木舟が悠るやかに漕がれて行く。團平船が四五艘モーター端艇に曳かれて行く。線路の兩側には多數の土人のニツバ家屋があつて、豚や犬や馬や鶏が多數飼はれてゐる。家の周圍には大抵バナ、やマンゴー椰子などが植ゑてある。一帶マニラ附近は椰子の栽培に適しないので、八九年を経たらうと思はれるものも實の生つてゐるのは甚だ少ない、従つて植ゑられるものは重にバナ、で他は觀賞木に過ぎない。此處では椰子も觀賞の目的で植ゑてあるので、檳榔樹や其他の棕櫚に似た樹は何れも蟲々と勢ひよく生えて居り、馴れぬ目に

はそれが恰も椰子の様に見える。電車は一時半許りでバシツグの町に着いた。此處はリザール州の首府で州廳があるが、人口は三千餘り、家屋は大半竹の柱にニツバ家屋の土人家屋で、何に一つ見る物はない。州廳は二階建ての西洋家屋で、同じ建物内に警察が置かれてあるといふ。氣の利いた日本の郡役所位るの建築である。餘り大きくはないが石造の古い寺院がある。其前に一寸したマアケットがある。電車を降りて町の繁華區域を驛の方へと歩いて行く。右側に日本人の煎餅屋があつて四十許りの日本人が煎餅を焼いてゐる。此人は既に四五年居住して二千圓許り貯蓄してゐると云ふ。此外にも若い日本人が三人で煎餅屋を造つて居り、一年許り前まで日本人の氷屋が一軒あつたが、金を残してマニラで雜貨屋をする爲めに引揚げたといふ。

バシツグ町の全部の家を建築する金で、あの石造の寺一つが出来まいと齋藤君が云ふ。寺を建築する爲めには、土人は三百年間汗水垂して儲けた金を吸ひ取られた。人口が三千

のバシツグの町も州廳も甚だ貧弱であるが、寺は巍然としてニツバ葺の家屋を睥睨して立つてゐる。驛へ行つて見ると、構内には貨物は何一つなく、驛員も金線の帽子を被つたのが一人ゐるのみだ驛の後には古びてはゐるが廣大な破風造りの鶏の蹴合場がある。バナ、や檳榔樹やマンゴーやファイヤリーの蔭を選びながら町の彼方此方を歩いて見る。野良には人が餘りなかつたが、家には家族が椅子に凭つたり坐つたりして、一家團樂の樂しみに太平を謳歌してゐる。僅か數ヶ所に女の機織を見た外には、仕事らしい仕事を遣つてゐるのを見ぬ。其代り駄菓子店の前や支那人氷屋の前や同じ豆腐屋（豆腐に砂糖密を掛けて食す）の前や玉突屋は、大人小兒で何れも人山を築く程に賑つてゐる。大人の内には鬪鶏を大切に抱へ込んで、悠々と散歩してゐるものもある。比律賓の學校は土曜日も休むので、小學生が盛んに賭事の遊戯をやつてゐる、七歳八歳の小兒が、ボカ／＼煙草を喫かしてゐるのも見受ける。此の牧草以外に何等の産物の無い田舎町の土人は、斯うして金



のある内は遊び暮すので、労働を非常に賤める風向があると云ふ。歐米人が比律賓人を仕末に終へぬ懶惰者だといふのも、其一面に於て決して無理だとは云へない。

一時間許りの後に驛の前から折よくあつたカルマタ(土人馬車)を雇ひ、アンチボロへと田舎道を奔らせた。道の兩側は相變らず水田である、行く事一里許り、小さい町の様になつた部落を過ぎて、更に行く事半里許り、田は茲に盡きて山地へと掛つた。其前に横にそれた道があつたが、それはモンタルパンの水源地に行く道であつた。モンタルパンの水源地には此附近一帯の連山から落ちる水を堰き止めたもので、マニラ市の水道は、此處から水を取つてゐるが、五十萬人に配給し得る丈けの水量があるといふ。但し濾過池の設備が充分でない爲めか、多数のアメーバ菌が存在し、衛生觀念に乏しい土人すら之を生の儘飲む事を恐れてゐる。それが爲めにマニラの市中には、多数の掘抜井戸があつて飲料水丈けは之を使用してゐる。といふのは土人は湯を呑まず、朝の麵麩の如きも、多くは水で濟ま

して了ふからである。

山に懸つてからは、道は幾曲りして景色は殆ど内地の田舎道に變らぬが、只日本に付物の松や杉が無いのが物足らぬ。山路に懸ると涼しい風が頬を撫でて、嚇々たる太陽の直射も左程には感ぜられぬ。マニラ市の日中の暑さは、家屋内にあつても随分烈しく、特に二階は屋根が亜鉛葺きで焼ける爲め、肥満してゐる余の如き堪へ切れぬ時が多いが、此處の涼しさは之れでマニラ市から五六里しか離れて居らぬかと思ふ程である。歐米人はアンチボロを避暑地として、日曜毎に此處に遊ぶ者が多く、爲めにアンチボロの山上には、此等の客を收容すべき立派なホテルが建てられてある。幾程もなく山を登り詰めると、もう木の間隠れにアンチボロの町が見える。相變らずニツバ葺の汚ない家屋が雜然と固まつた町で、見るものも、バシツグの町に於けると變らない。アンチボロは、四方山に圍まれた凹地にあるので涼しい丈けが取柄である。神女寺は小さい石造建の寺で、神女に信仰のない

余等に取つては一向に有難くないものである。馬車を降りて門前の茶屋に入り、飲料水とバナ、を取つて饑渴を癒し、堂内に這入つて見たが珍らしい事もないので、再び馬車の客となつてバシツグへと急がせた。午後の四時バシツグに着いて、バアに這つて冷えた麥酒の杯を舉げてゐると、歸り途から怪しくなり掛けてゐた空は、遂に雨となつて如何とも出来ぬ。止むなく一時間許かり雨を避けて七時頃、火を懸うて飛び入る蟲に興がりつ、歸宅した。

### マラボンの平和郷

アシチボロの清遊に味を占めた余は、中山君を介して親しくなつたバシツグとは反對の郊外にあるマラボンの菓子製造業本田君の徳意に任せて、それから間のない七月二十五日、中山君東道の下にマラボン見物に行く事にした。マラボンは電車が通じて居つて、余の寓居からは四十分位で行ける、馬車に乗つても一時間の上を幾等も出ぬ。此處はマニラ灣に近く、附近でマンモースと稱する淡水魚の産地として有名で

ある。マンモースは一寸臭味があるので、邦人中厭ふ者もあるが、其味は鮎の如く、比律賓に於て獲らる、魚の中では最も味が宜い。此魚は鹹水にも産し、非常に生長が速いので土人は養魚池を設けて盛んに飼養してゐる。マイバホ附近から掛けて北方の海岸には、數里の間養魚池が続いてゐる。便利な事には土人は養魚を重に雨期中に遣つて、十二月以降四五月頃迄は池を乾して鹽を取る。一舉兩得の策で、養魚池を持つてゐる者は、莫大の利益を擧げるさつである。然しながらマラボンの名物は、身體の丸い甲の厚い此邊のみに取れる蟹と蠣とである。蠣はマニラの市中でも賣つて居り、蟹も日本に見るが如きものが澤山に取れるが、此丸い蟹が他の蟹に比して特別に甘いと共に、蠣も廣島蠣の名がある如くマラボンに於けるそれが特に甘いのである。これが爲めに電車の終點には、西洋式の大きなバアが設けられ、上等の麥酒と蟹と蠣とを饗する事に依つて食通仲間にも名を知られ、日夜マニラから遠征する内外人で賑つてゐるのだ。涼に於て劣るマラボンを特に選んだものは、

此一事も與つて力あつた。

午後三時マラボン歸りの馬車のあつたのを幸ひに、寓居の前から乗つて行く。馬車はマ  
イバホ、カルカン等を通つて行く。カルカンはマニラに續いた細長い町で、北方バギオ線  
に於ける最初の停車場がある。トンドを出た處に市場があつて、其前に小さなリサル紀  
念碑がある。此邊には歐米人も大分住んでゐて瀟洒な洋式家屋が多く、タコの樹、火炎樹、  
檳榔樹、椰子、バナ、其他の觀賞木が、家の周圍又は垣根等に植ゑられて、見るからに涼  
しさうである。然し大半は相變らずニツバ家屋で、住むには此方が涼しいが見ては不様な  
ものが多い。家屋の裏は兩側共水田が續いて、例の牧草が植ゑてある。到る處に大小の竹  
藪があつて、景色も却々美しく、住宅地としては宜ささうである。道の左側に昔の墓地が  
ある。大半破壊して原形を知るに由ないが、廣さは幅半町許り長さ一町許りで四方を高い  
石垣で圍つて、石門である。石垣の幅は一間以上あり、長方形の穴が順序よく無數に穿つ

てある。其中に死體を納めたものらしく、一定の期間此處に存置して、又他に移すか、委  
棄するかしたものらしい。此種の墓地は他にもあるとの事で地面を要さぬ點に於ては土葬  
式のものよりも優つてゐるやうである。

其處から一寸行つた處のマイバホの中央に育兒院がある。不良少年や罪人の子供で衣食  
に困る者を收容して育て、ゐる。比律賓人は處女の内は馬鹿固く結婚前に浮名を流すもの  
は甚だ少ないが、女尊男卑の結果は随分姦通事件がある様で、育兒院に收容されてゐる兒  
童は、之等の因果の胤が大部分であると云ふ。此處は一種の寄宿を兼ねた學校で、小學の  
科程の外に將來自活に適當な種々な職業を教へてゐる。二時から四時迄が體操の時間で、  
體操の模倣や兵式體操などを行らせる。丁度此體操の時間であつたので、馬車を一寸止め  
させて柵の外から見物した。

再び馬車を走らせる。カルカンに近くに從つて家が疎らになり、一體の色彩が田舎臭くな

つて行く。道に鬮鶏場が二ヶ所あり活動常設館が三個ある。斯る田舎で之丈の娛樂機關が備はり、然も兩者の收入は土人營業中の尤なるものだといふに至つて、如何に比律賓人が遊惰に耽るか、察せられる。カルカンの驛近くなると道の兩側に竹藪が茂つて居り大木も道を蔽つて景色が好い。驛の前を左に外れると、其處に大きな共同墓地がある。サルバンテースの共同墓地に似た美しい墓地である。此處からはもうマラボンの町が見える。眞正面に大きな寺院があつて其右の方にも二つ、少し小さいのが見える。一體比律賓の町は何處でも寺院の尖塔が目標になつて見える。ニツバ葺の汚ない家並が、此の立派な寺院の爲めに幾分か引立つて遠目に美しい。

寺の前は電車の終點で、マラボンの町の入口である。寺の後は直ぐ海になつてゐて三町許り向ふにマラボンの町と同じ様な洲の中の町がある。川の様な此海は相當に深いと見えて三百噸許りの汽船が二隻這入つてゐる土人の漁船が澤山繋つてゐる海の中程には大きな

竹筏が澤山浮いて居り土人がそれに四つ手網の大きなのを装置して魚を取つてゐる。間もなく本田君の宅に達して暫時休憩する。

此處は海に近い丈けに一體に涼しく、其上に裏は野原と養魚池で風通しが宜いので、暫らく座敷に上つて晝寝する事にした。座敷に上つて見ると、明け放した近所の土人の家屋の状態がよく見える。土人の家屋は何れも床が高く一寸見ると二階建の様に見えるが、事實は何れも一階で、此附近では下部を納屋に使用してゐるのが多い。座敷は大抵打通しの一間で、上り口の正面には大抵神棚を設けてゐる。神棚と云つても簡單で、前に蠟燭を燃す丈の棚がある許り、多くは竹壁に十字架上のクリストやマリアや、其他宗教關係の油繪を額縁に入れて吊してゐる。床は竹で編んだもので風通しがよく、それに椰子科植物の草で編んだ蓆を敷いてゐる。其外には衣類を入れる木箱がある位のもので、臺所の如きも土竈の外に土鍋と皿が少しある位の至極簡單なのが多い。此邊は昔は雨水を飲んでゐる

たが、二三年前堀抜井戸が造られてから、雨水を使用する者がなくなつた。堀抜井戸は長さ一里に餘るマラボンの町に六つあつて、近所の者は自ら汲みに行くが、多くは馬車で運ぶ、水賣の水を一荷二錢乃至四錢で買つてゐる。

一時間許り氣持よく眠つた後、馬車を雇つて見物に出掛けた。此町は一般に裕福な丈けに、パシツクの町に比べると遙に立派で、家も洋式のもものが澤山にある。寺は町に三つあつて活動寫眞館も五つある。町の中央の一寸した廣場には、リサールの石工像を置いた記念碑がある。此町は人口八千人からあるが、未だ郵便局の設けがない。近所にも二千三百人を有する部落があるのであるから、郵便局は大きいのが一つあつて然るべきであるが郵便は皆マニラから集配に來るので、それも二日に一度位しか廻つて來ない。一體土人は他に移動する者が少く親戚關係も近所の者同志のみあるのと商用は電車なり馬車なりでマニラに一日に何回も往復するので、餘り郵便を利用する者が無いのであらうが、當局の

怠慢か町の人が必要を感じぬのか、何れにしても随分不便なことである、一體マニラの郵便は不便が多い。手紙の届かぬ事も往々あるし、日本行などは三ヶ月目位にマニラ局の消印があるのみで、返戻される事も珍らしくない。小包郵便は一々當人が受取りに行かねばならず、小包でなくとも新聞の少し重いものや書留郵便不足の郵便物などは、一々取りに行かねばならぬ。それにマニラ市には郵便局が一つしかなく、切手は雜貨屋其他で賣つてはゐるが、定價の上に二割五分乃至三割の利益を附するので、四錢で済む日本行の端書は五錢懸り、十錢で行く手紙は十二錢乃至十三錢掛る。之を思ふとつくづく日本の郵便制度が難有く感ぜられる。

一時間許り馬車を走らせてマラボンの町を見盡し、對岸のホロの町も瞥見して歸て來ると、名物の蟹と蠍其他心盡しの料理が揃へられてゐる。日本酒の外にヒネブラと云ふ比律賓特有の酒も出されて、本田君の跋渉談に花が咲き、歡興を擲にした。本田君は明日ミ

カワヤンへ商用で出掛けるとの事に、之幸ひと同伴を乞ひ其夜は遂に同家に宿泊した。翌くれば二十六日午前五時と云ふに起きて身仕度もそこくゝに家を飛び出す。夜は明けて間もないが、早起の土人はもう戸を閉めてゐる家はない。今日は馬車に乗らずに徒歩で行く。麵麩屋の前に澤山の土人が娵集して、朝飯の麵麩を買つてゐる。駄菓子屋の縁臺に腰かけて麵麩をバクツいてゐるものもある、日本人（ハボン一般にアボンと發音す）が通る／＼と物珍らしげに見る者もある。マラボンと對岸の部落との境界にある橋を渡ると、小さい寺がある。此處までは道が宜かつたが、之から先は田舎道で道幅も狭く、二三日前に降つた雨がまだ水溜りを爲してゐる處が多く、其上に日光は次第に其威烈を増して來たので、漸く歩行に難澁を覺え出した。此邊道の兩側は皆養魚場で清く澄んだ水の中に大魚小魚が勇ましく遊泳してゐるのが見える。

一里半許進んだ處に今度は渡がある。川幅は一町許り水は汐水で、小さい渡舟小屋が

ある。此深い水中からマングローブの太木が生えて川中に宛も小島を見るやうに林を爲してゐる。マングローブは丸い葉で實は實らず、用途としては薪にするのみであるが、木質は非常に硬く、水陸兩生であるから護岸用として都合がよい。樹は多く水邊に生えてゐるが、土人は之を川でも海でも用の無い處に澤山植ゑ、尙護岸用として川岸に植ゑてゐる。爲めに之等多くの洲は、大抵マングローブの林で圍まれ、海の中や川の中にも島の如くに林を爲して、單調なるべき此邊の景色を美しく飾つてゐる。渡舟賃は一名二錢で、舟は長さ六間幅三尺許りの獨木舟である。獨木舟は長さと幅とが釣合はず、轉覆し易いので、舟の兩側に大きな竹が四ツ手にして渡してあり、轉覆を防ぐ仕掛けになつてゐる。十二三歳の色の黒い腕白小僧が元氣よく舟に飛び乗つて、日本の飯杓子を大きくしたやうな權で舟を漕いで行く。對岸に渡つて前方を見ると川に近い半分は養魚池で半分には稻が植ゑてある。田の極つた處には、一面に數里に互る竹藪があつてニツバ家屋が散在し、一里に一つ

位づつ、大きな寺が竹藪の中に聳え立つてゐる。野良には殆人を見ぬが田の中には澤山水牛が泥に埋つたり草を食つたりしてゐる。鷺が田から田へと餌を漁つて中には水牛の背に止つて遊んでゐるものもある。悠々たる気分が四邊を包んで、平和郷だとの感が湧然として起つて来る。此景色に日本の様な忙しげな野良仕事は調和しない。マニラの市中には住みたくないが、こんな田舎なら何年でも住んで見たいと思ふ。

竹藪を通つて再び田の畔道を通り、更に再び竹藪をぬけると、其處に大きな寺が二つあつて、戸數五六百の町がある。此の町はボロと云つて、マラボンから約二里半マニラからは約三里あり、此處からカルカンへは一里半許りしかない。丁度カルカンとマラボンと此町とで不等三角形を爲してゐる事になる。併し町とは云ふもの、農家許りで、土人の店は菓子店か穀物商か下駄屋、帽子屋、氷屋、飲食店、雑貨屋(重に食料雑貨)位のもので、それが二十戸に一軒、三十戸に一軒位の割合で散在してゐる。マラボンには支那人の店が、

三十軒からあり、五六十人の支那人が居ると聞いたが、此處にも二三軒支那人の雑貨屋を見た。此處許りではない、少くとも戸數三四百の町には、大抵二軒三軒の支那人店の無い處はないと本田君が語る。此處からはもう立派な一等道路で、カロマタ自動車の往復が頻繁である。余等も此處でカロマタ上の客となり坦々たる五間幅の道路を涼風に頬を弄らせつ、行く。竹藪は兩側から空も見えぬ位に道を蔽つてゐるので、馬車の上は甚だ涼しい。馬車に乗つてから約一時間九時に愈目的地たるミカワヤンに着いた。此町には停車場があつて汽車はマニラの中央驛返一日に四回往復する。然し馬車でも三時間掛らぬ内にマニラに行けるので、土人は多く馬車を利用すると云ふ。

本田君の商用先は土人の雑貨屋である、町の中央大きな寺院の前にある。本田君が商用を果す間を利用して寺院に参拜し、市場を覗いて見る。寺院の本堂に却々に廣くて石燈が敷いてあり、正面に基督の像が安置してある。日本の寺の本堂の佛壇と大した變りはなく

硝子の四合瓶大の圓さの永き四尺位の大蠟燭が燃されてある。腰掛も四五並べてあつて堂の周圍には種々異つたクリストやマリアの等身大の像が安置してあり、其前には同じく蠟燭が燃してある。像は博多人形式の土細工で、美麗な衣類が着せてある。凡てが神女寺に於けるものよりも立派に見られた。壁には宗教に關した諸名畫の石版刷が、金の額縁の中に入れられて幾十となく吊してある。像の中には山車の様に車の着いたのがある。祭禮の時に町中を引いて歩くのである。見終つて市場に行つて見ると、建物はトンドの市場と同じく亞鉛賣の平家で、床は叩きになつて居り、魚屋、食料品屋、雜貨屋、肉屋、野菜屋、と分れてゐる。此處には反物屋、玩具屋迄が混つて居り、飲食店も店を出してゐる。市場の中は一杯の人であるが特に奇異に感じたのは買手に小兒が澤山ある事だ。何れも七八歳から十四五歳迄の男女少年が、大人と同じやうに交渉し、格別高價に買ふ模様も見えず、種々の食料品を買ひ調べて行く。日本の少年には此模倣は出来ない。

見物を終つて歸つて來ると、間もなく本田君の川も濟んだので、十時半又カロマタの客となつて歸途に着き、今度はボロからカルカンへ竹藪の中を突破して、十二時半マラボンに歸着した。晝食の後晝寢に前夜の睡眠不足と今日の旅行の疲勞を補ひ、午後四時歸宅しようとしたが許されず、其儘神輿を据ゑて、土人の洗濯や鶏の蹴合の練習に打ち興じ誘はる、儘に河中にバンカを漕がす事となつた。川は一町許り向ふにあるので行くに何の雜作もなく、麥酒罐詰の用意も整つて愈バンカに乗る。夕陽は將にマングローブの林の中に落ちんとして紅の色を波間に漂し涼風衣袂を拂つて何とも云へぬ快感を覺える。バンカは四十歳許りの土人の手に依つて悠るやかに河中を漕がれる。唄をと望んだが笑つて答へぬ。川の兩側はマラボンの町と對岸ホロの町で、間もなく家々は燈火に飾られ、それが長く續く様は又一段の眺めである。此の景色の中に主客は麥酒の滿を引いて打興したが、軽い麥酒の酔は涼しい川風に吹き消され、漫ろに寒さを覺える様になつたので、一時間半許りで



上陸し家に歸つて今度は強烈なヒネブラに酔ひを食ふ事とした。斯くて一座四人談話に夜の更くるも忘れて遂に歸宿の時刻を失し、再び涼しい本田君の家に一夜を明かして、蒸暑い我アスカラ街の寓居に歸り着いたのは、二十七日の午前十時であつた。

#### 四、タヤバス紀行

ホンダグワまで タヤバス州マウバンには、親友齋藤寅四郎君と梶原熊一君とが、二年前から雜貨商を經營して居る。タヤバス地方の概況に就いては、既に同君より幾度も聞いて胸を躍らしてゐた。そこで十月中はマウバン視察に費す筈であつたが、健康を害しために見合せ、十二月初旬には愈々出發する事に定めて準備まで整へて居たのが、流行の西班牙風に祟られて、又沙汰止みとなつた。どうせ病院で苦しむのならば、變る風月を伴にして、一月二日病軀を提げてマニラ中央停車場からタヤバスへ出發した。此鐵道はマニラ、レールロード、コンパニーの經營で、一等と二等に別れ、二等の設けは無い。車體は可成り大きいが古く汚ない事によつて有名である。

列車は十一時三十分南方タヤバスへ向つて動き出した。同乗の客は洋装した比律賓婦人

が一名と比律賓人二名だけ、展望室は日光を受ける左方の一部分丈けが日避けがしてあつて、殆ど三方明け放しであるから、列車の進行に連れて涼風が肌を通して氣持が好い。同四十五分バコ驛に着くと十數人米西人が乗込んだ。陸軍の將校二人が展望室に割込んで賑かになる。

バコを出發し、バシツグ川の鐵橋を過ぎると兩側は一面の牧草田である。自に入るものはニツバ家屋と水田と竹藪と水牛と雜木林位のものである。

水田が盡きて高地に差蒐ると、傾斜の急な處以外は大抵畑になつてゐて、蜀玉黍が植ゑてある。植ゑ方は随分粗つばいのが多く、密植してある爲めと肥料を施さずに同一の物を畑を休まさずに植ゑるので、出来はよくない。滿洲のものを見た目には、之でも引合ふかと怪しまれる。蜀玉黍は植ゑ立てのものもあれば五六寸から一二尺位に延びたものもあり、三尺位で二つ三つ實を附けたものもある。甘蔗を植ゑた處や豆を植ゑた處が所々ある。

然し一體に餘り出来榮は面白くない。稻の穂丈けを摘み取つた田が二十分許り續いたと思ふと、今度は刈入中のものに出遭した。眞白い猿股や眞赤な猿股、淺黄色の股引などが目に着く。女も男と同様に野良仕事を遣る。服装こそ違へ日本の稻刈を見るやうだ。但し枯れた稻は其儘に残してあるので遠目にはそれが刈つたのか刈らぬのか一寸見當がつかぬ。穂を積み重ねた塔式の山も所々に見える。十一月小閑を利用してミカワヤン附近に行つた時には、其邊は稻刈の最中で、日本式の案山子や鳴子を見た。僅か十里許りの相違で、其刈入は二ヶ月違ふ譯である。同乗の土人に此邊は稻を何回作るかと聞いて見ると、此邊のリサール州、ラグナ州、バタンガス州は、皆一年一回で、土地に依つては二回作る處もあると云ふ。左方に竹藪の間からバイ湖が見える。バシツク川は此湖の流れたものである。バイ湖は周圍百哩許りの大湖であるが、水深は二十呎許りに過ぎず、マニラと湖畔のランバとの間には、小蒸汽船が通つてゐる。

午後一時にカランバ驛に着いた。ロスバニヨス行の支線がある。ロスバニヨスには温泉があつて日本人の宿屋もある。此地方の山に日本人の炭焼業者が炭を製造して居り、其雇人の外に、伐木木挽等で米人に雇はれてゐるものもあり、四百人許りの邦人が此附近で働いてゐる。カランバの町には邦人の雜貨屋も三軒あり、氷屋煎餅屋も四五軒あると聞いてゐる。驛構内の賣店で、サンドウィッチを賣つてゐるので書飯を認める。二時汽車は椰子林中に這入つた。線路の兩側は見渡す限り蟲々と立つた椰子樹許りである。人頭大の實が累々となつてゐる。景色は全く一變して、初めて南洋だとの氣分がする。他の雜木林とは變つてゐる丈けに、別段の眺めである。

二時三十分サンバプロ驛に着いた。此處はバタンガス州の首府で、人口は二萬五千人と稱せられてゐる。此町にも日本人は三十人許り住つてゐて、種々の職業に従事してゐるといふ。將校や妻君連れの米人や比律賓人婦人など、此處で大半降車してつて、一等車内

はマニラから同乗の比律賓人と外に米西人各一名のみとなつた。四ヶ國の人民が各一名宛陣取つてゐる譯で、しかも其内で身體の最も大きく背の高いのは余で、次が米人西班牙人比律賓人の順序である。米人が近寄つて来て日本人は一體小さいが君丈けは別だと云つて一座を笑はせる。行先を聞くと余と同じくマウバンに行くので、商買は煙草商だといふ。西班牙人は言葉がよく判らないが、同じくマウバンに麻の買出しに行くのだと云ふ。

娘子軍は此處にも大分るたが、昨年九月營業停止を食ひ、十數名が氷屋に陣取つてゐる外皆マニラへ引揚げたが、十月マニラで同様營業停止を食ふに及んで、マニラに在つた二百餘名の娘子軍は、全部日本に送還された。今や娘子軍の公然に營業してゐる處は、キヤビテの軍港とミンダナオ島のダヴァオのみである。

サンバプロは此線に於ける尤も繁華な町で、驛もマニラ驛を除いては一番大きいが、驛前に於ける倉庫は三つ許りしか見當らぬ。それでも椰子の産地丈けに、コブラの山は數ヶ所

構内に築かれてゐる。

三時四十分、エルセナに着く。人口三萬、タヤパス州の首府であるが、車中から見た處では、一サンバプロに比し、數段劣つて見える。

相變らず椰子林が續く。其切れ目に所々水田がある。此邊の水田は未だ稻の青いのや、既に結實して案山子や鳴子繩が置いてあるのがある。竹を三角に編んだ臺に土人が雀の見張をしてゐるのを見受ける。山中に這入ると、未だ處女林の儘の處が随分あつて、高さ數丈の大木が密生し、蔓が絡んで枯死したものもある。運賃や労働者の關係で放任してあるのであらうが、見るからに涎が流れるやうだ。米人も之を指して之をマニラに出すやうになると宜いがと云ふ。

芋の一種だと聞く徑二三尺の楕圓形の葉をした草や、二尺位の大きさの葉を持つた蔓が澤山大木に絡んでゐる。之等の小さいものにマニラの植物園やサルバンテース共同墓地内

の植物園でも見たが、大小の差は牛と豚程の相違である。鳥は少ないと見えて滅多に影を見せぬ。それでも日本に見られぬ美しい小鳥や、鶯、烏などを時々見受ける。

空模様は怪しくなつて間もなく雨になつた。しばらくまどろんで居るうちにバナオン驛に着いた。雨は止んでゐるが、車内は大分薄暗い。車掌が来て電燈を點もす。再び展望室に出て、暗に黒く見える椰子林を見ると螢が數百千一團となつて飛ぶのが見える。耳を澄ますとゲツコーンと鳴く大蜥蜴の鳴き聲や、コーンと鳴く河鹿の聲が聞える。天地暗澹四面寂寞の境を汽車は走つてゐるのである。

椰子林の中にニツバ葺の家を見る。此邊の農家にはランプが無いと見えて、椰子油らしいのをドン／＼屋内で燃やしてゐるのが多く、家の前庭で盛に薪を燃やして、燈に代へてゐるのも見受ける。

薪の火が、四邊の家屋や人や椰子の木を照して、一種形容し難い物寂しさを感じしめる。

斯る内に七時半になつて、漸く目的地たるホンダグワ驛に着いた。遙か彼方の棧橋に余等が乗るべきマウバン行の汽船が碇泊してゐるのが見える。ホンダグワは二三年前に出来た新港で、此南方線の終點である。ホンダグワは土名深い水の意味で、東方に突出した岬と前方アラバト島とは屈指の防波堤となつて、波靜かな絶好の港を爲してゐる。

列車は棧橋に着いて、船の前に停車した。直ぐにマウバン行の切符を買求め、汽船へ乗込む。汽船は名をサマルと云ふ。南方サマル島の名を取つたもので、噸數は三百噸、明朝未明に此港を出發して北方のカシグラン迄行き、翌朝カシグランを出發し、ホンダグワに引返し、更に其翌朝には南方サマル島方面に向ふのである。此汽船は同じくマニラレールロード、コンパニーの所屬船で、一年前迄は毎木曜日毎にカシグランに向つたが、北方より南方の方が貨客が多い爲め、カシグランの定期は二週一回とし南方線を擴張してゐるのである。北方線の寄港地はアラバト島のアラバト同島のサンヘレン、呂宋島のマウバン、

同島のインフアンタ、ボレリオ島のボレリオ、呂宋島のミライ、同島のバリル及びカシグランで、之等の諸港には支那人が澤山に住んで雜貨商の傍ら椰子、麻、米の仲買に従事して、實勢力を收めてゐる。

日本人も發展はしてゐるが、數は非常に少くマウバンの外はボレリオに雜貨商、菓子製造業等三名、バリルに大工四名菓子屋一名、カシグランに大工六名菓子屋二名、雜貨屋二名が居るのみである。内バリルに於ける大工の一名は土人を妻として、既に三名の子を儲け、裕福に暮してゐるさうである。

此のホンダグワは新開地で戸數も少く、商業も思はしからず、日本人は一名も居住してゐない。然し支那人は既に山上にホテルを營業してゐるのが一軒あり、雜貨商も一軒あつてホテルに及び雜貨屋の主人は椰子、麻の仲買を副業として活動してゐるといふ。

### マウバンの町

さて船に乗つて船室はと聞くと、既に満員になつてゐるから、今夜

は甲板に寝て貰ひたいと云ふ。一等客は十五六名あるが、何れも甲板の藤椅子に坐して、既に安眠を貪つてゐる者もある。米人が夕食を取らぬかと云ふので共に食卓に着く。又雨が盛んに降り出した。此頃はタヤバスの雨季だから、明日も降るだらう。マウパンの上陸が困るぞと米人が云ふ。

間もなく給仕が折疊みの出来る木製ズツク張りの寢臺を持運んで来て、夜の用意を整へて呉れたので直に横になる。グツスリ寢込んで了つたが、スクリューの音に目を覺して時計を見ると、午前四時だ。船は既に錨を上げて岸を放れやうとしてゐる。雨はまだ降つてゐる。四邊は直つ暗、驛の方に二三の明りが見える許りだ。再び床に就く。やがて四邊の物騒がしい音に目を覺ますと、側にあつた寢臺は皆取拂はれて、寝てゐる者としては余一人である。時計を見ると七時五分前、顔を洗つて甲板に出ると、海近い椰子の林が雨に煙つて云はうやうなく美しかつた。

七時半此の絶景を前にして朝食を取る。八時船はアラバト島のアラバトの前面十町許りの處に錨を下した。

アラバトの町は一面の椰子に圍まれてゐる。其の椰子の間に、青く塗つた亞鉛葺の木造家屋が十數戸見える。海岸に白い服を着けた土人が澤山に出てゐる。歸る者を迎へるのであらう。

貨客の積み下しがすむと間もなく錨を揚げて、船は次の港サンヘレンへと、アラバト島の沿岸を縫ふて行く。對岸に呂宋の山々が雨に霞んで臙氣につゞく。此邊一帶山といはず平地と言はず一面に椰子が植ゑてあつて、山は餘り高からず所々大木鬱叢たる處女林も見える。マングローブの樹は海中遠く林を爲してそれが遠目には陸地とも、離れ小島とも見える。瀬戸内海を油絵にしたやうな景色である。九時サンヘレンの港外に着く。此處もアラバトの町と同じ様で、山の形が違つてゐる位のものである。雨は些が小降りになつて、

止んだら、霧のやうなのが降つたりする。比律賓の青年が種々と話しかける。その話に依ると、是等の諸港は何れも一ヶ年二三十萬圓の椰子と數萬圓の麻とを出す。此邊には眞珠も多く、ボレリオ島には魚類が豊富だから、海上の交通がもつと開けたら此邊のものは皆金持になれるといふ。

十時半愈よマウバンに着いた。船は海岸から十町許り離れた沖合に錨を下す。手荷物を揚げて、土人等が我先にと押合ふ中を漸くにモーター端艇に乗移る。マウバンの町も椰子の林に取圍まれてゐる。洋式の亞鉛葺とニツバ葺とが混着して海岸に竝んでゐる。端艇が岸の方へ近くと、岸の方から多數の土人が水に胸の邊までを浸して水中を歩いて来る。パンカを二艘押して来た。どうするのかと見てゐると端艇は忽ち止つて、土人の客が夫等の水の中の土人に荷物を渡し、或は其肩車に乗つて陸に運ばれて行く。齋藤君が大井川の危険が恐ろしいとなぞの様な手紙を遣こしたのが、之であつたと合點はしたが、病後とは云

へ、尙二十貫の身體は、人夫の弱さうなのにくらべて、少からず當惑した。止むなく日本式に肩車に乗ると、土人はよほど重かつたとみえて歩けない様子、這方も調子がとれずにフラクして、アワヤ眞逆様に水中に落ちる處であつたが、兎に角漸く二間許り向ふに波に揺られてゐるパンカに移された。然し身をかはず時に、右足を水中に突込んで、洋袴も靴もズブ濡れになつて了つた。

ヤレ／＼と安堵の胸を撫で下す間もなく、パンカは又も水中に止つて、四五間の間を肩車に乗らねばならぬ。今度は先の失敗に鑑み、土人の流儀を學んで横に肩に跨つたが、馴れぬ事として調子が取れず、此處でも危ふく墜落しやうとして、漸く身體を持直し、ジメジメしてゐる砂の上に下された。米人に別れを告げ、海岸から二町ばかりの齋藤君の家に落付いた。午後は麻山を見にゆく筈であつたが又雨が降つて來たので午睡に旅の疲れを休める事として、此日半日を遂に家に籠つて了つた。

マウバンの人口は三萬人と云ふが、之は附近村落までを勘定に入れたもので、町には戸数が四百許りあり、約三千人の居住者がある。此處には町役場警察郵便局があり、學校は寺院附屬のものを合せて三つあり。七百人許りの生徒を收容してゐる。支那人は雜貨商を主として反物商小料理店(パンセキと稱する餛飩を商ふ)等に從事し、其數約八十人、西班牙人は其數二十人、雜貨商、煙草商、椰子、麻園經營並びに之が仲買等に從事してゐる。日本人は齋藤商店の二人の外に肥塚商店と云ふのが同じく菓子製造と雜貨の小賣とを行つて居り、其處に四人ゐるのみである。之丈けがマウバンに於ける商店の主なるもので、外に土人の雜貨商が十軒許りあるが、之は一向に振はない。

此町の居住者は、大抵附近に十町歩以上の麻山か椰子山かを持つてゐる。持たない者は小作に從事してゐるが、小作は所有主の持山全部を引受けて居るのが多く、其所得は收穫高の半分であるから、暮しは至極裕かである。此處の小作は日本と違ひ、勞力の供給丈

で、即ち麻山ならば麻を挽いて乾燥し、椰子山ならば椰子の實を落して、同じく乾燥し、山から町へ運ぶ丈けの事である。

山には随分澤山な資本が入れてあるのであるから、半分別けでは地主の方が不利のやうであるが、人手の足らぬ此地方にあつては止むを得ない事なので、一般に勞働者の不足を嘆じてゐる。此町の者は住宅の外に、山にも家を持つてゐる。そして男は日曜日祭日の外は、大抵山に住つて勞働に從事するので、中には學校行の子供のみを家に残して、月曜日から土曜日までを山に暮す者もある。

一つ困つた事には便所がない。マニラ郊外マラボンに於ける約三ヶ月の生活にも、最も不自由を感じたのは便所の無い事であつた。幸ひ直ぐ裏が廣い野原で、土人は此廣い野原を共同便所に宛て、居つたが、それにしても夜丈けしか用を達する事が出来ぬのには、病氣中非常な苦痛を嘗めたものだ。處が此處では町から數丁離れた椰子山の中や海岸でやる。



晝間でも椰子山の中で遣れば宜い譯で、人家をさへ離れ、ば土人は他人が見てゐても平氣であるが、日本人には氣が咎めて具合が悪い。爲めに時としては十二三丁の遠方へ行つて用を足す。齋藤君は之を散歩と稱してゐる。實際散歩と用便とを兼ねてゐる譯だ。

井戸はないが一年中降る雨を利用した貯水池が椰子山の麓にある。そこには十個の噴水口から水がとめどなく流れ出てゐる。水屋があつて一荷五錢で賣つて歩く。洗濯や水浴を行ふ場合には此處へ行つて遣るので、一つしか無い丈けに朝から夜へ掛けて此水槽は一杯の人集りである。然し五町許りの間を學校と市場と役場と寺院とに水道が布設してある。水は常に開放して布設の工事は日本人が行つたといふ。

寺は一つある。百年前に大きなものが建てられたが、三十年前の大地震に崩壊して、今は一部の痕跡を止めてゐる許り、舊の通りのものを再建するのは財政が許さぬので、木造のものが建てられて居る。向ひのボレリオ島には鰐が大分住んでゐるが、此處には鰐も蛇

も居らず、鱧丈けが土人に恐れられてゐる。鱧は八尺位から一丈二尺位で、よくパンカを轉覆し人を殺すので、之に殺られた者がチヨイノゝある。足の一部手の一部喰切られて命丈けを取止めたものもある。

蕃族ネグリートは此山奥にもチヨイノゝ住んでゐるが、重に北方四五十里の箇所に住んで居り、カシダラン邊へは時々ネグリート人が物々交換に遣つて來るといふ。

晩に齋藤君と二人で水浴に行く。此町には電燈がないので暗く、裸足で歩くものが多いのに拘はらず、途中に切石を敷いた儘の處がある。水槽は大きさ約二間四方、外廓を板で圍つて家根には亞鉛が葺いてある。之を男女二方に別つて放水口は男の方に四箇、女の方に六箇ある。一つの放水口から水が二方に別れて落ちる。此水に身體を打たせて水浴を遣るので、大抵男も女も水浴と洗濯とを兼ねる。

土人の中に混つて眞つ暗やみに水浴をやる。水は四尺位の高さから落ちるので、瀧にか

かつてる様で氣持が宜い。妻君の無い齋藤君は洗濯黨の一人で、洋燈の一つ位黓ければ宜いのだがと云ひながら、洗濯を行つてゐる。時々白い處と黒い處が出来て二度遣る事もあると云ふ。女連は反對の方で蠟燭を持込んで洗濯を遣つてゐる。歸つて齋藤君にマウバン所感を叩くと、日本人を妻にするなら一生香氣に此處で暮してもよいと云ふ。

**椰子山見物** 四日、朝來の雨は午後に霽れたので梶原君を東道に先づ町内見物から始める。齋藤商店は町の中央部にあつて隣りは支那人の反物屋で前は西班牙の雜貨屋、一軒置いた隣りから一町許りの間に支那人の雜貨屋が十軒許りある。小さい支那人街とも云へるので、此町での一番賑やかな通りである。少し離れて横の方に役場がある。同じ建物内に警察と郵便局と小さな裁判所とがある。警察の方には留置所と云つた具合の監獄があつて一般に見物される様になつてゐる。

其隣りに學校がある。學校と役場との前庭に砲塔から持つて來た古砲が飾つてある。其

裏が寺院で、崩壊した跡が一面の草原になつてゐる。家は亞鉛膏とニツバ膏とが相半ばしてゐる。亞鉛膏は大抵洋式木造建でニツバ膏は柱から一切竹のものが多し。家の周圍は附近が椰子山で、一寸出れば椰子がある丈けに、バナ、の外は殆ど歡賞木許りである。殊に目に立つのは葉の美しい木が多い事だ、市場が椰子林の中にある。牛肉の外には鹽魚許りである。梶原君の話に依ると、之等干魚や鹽魚は皆マニラから來る、海岸で漁師も居るのだから、此事は不思議に思はれるが、土人の漁夫は漁撈が下手なのと、一帶に近海に魚が少くないのとで、生魚は減多に口に入らず、稀に市場に生魚が持出されても頗る高く、其上直ぐに賣切れて了ふ。それで生魚を好むものは海岸に行つて漁船の歸るを待受け奪ひ合つて買ふので三人掛りの漁船で、一寸した魚を二三匹しか持つて來ない事が有る。鱒が時時取れるが一尾五六圓から十圓位する。對岸のボレリオ島は魚が豊富で網でなくても取れる處が多いが途中波が荒くてパンカが時々轉覆するのと、舟足が遅くて持歸る迄に魚が

腐敗するのとて、岸近い處許りを漁り歩く。其爲め魚は岸に寄附かず、漁船は十艘許りあるが、一日十貫目許りの魚を獲つて歸る日が大部分だといふ。

魚の外に野菜迄がマニラから来る。大抵は腐つて了ふので、野菜といつても馬鈴薯と玉葱許り、それも元は日本や支那から渡つたものである。土人は一體餘り野菜を食はない。漬物も知らず、肉の煮物やコ、ナツ汁を作る時に、少し薬味的に加へるのみで、それも多きは野生の草を使用するさうである。近頃學校で野菜の效用を説いて、小さいながら野菜園を設け、野菜栽培を奨励してゐるが、土人は人數を要するので、あんなものを作つたつて引合はぬと云つて對手にせぬ。滑稽なのは栽培を躍起になつて奨励してゐる先生が生徒の手を使用して、毎日土を捏ね返してゐるのは未だしも、毎日の様に雨の降る今日此頃、一寸でも日が照ると一日に幾回も水を掛けさせて居る。野菜と稻を同様に考へてゐる所は御愛嬌である。

市場を去つて海岸の方へ出る。途にニツバ膏の活動寫眞館がある。此處には芝居がなく此活動寫眞館も一年前出来たものだが、興業するのは一週金土日の三日間だけである。前にも云つた通り山に這入つてゐる農夫は、土曜日の夕方までに町に歸つて日曜日を休むのであるが、之は一つは彼等が宗教に熱心で、日曜には必ず寺院に參詣する事にしてゐるからである。其外に之なくてはならぬ闘鶏場が、日曜日に限つて開場されるのも、彼等が日曜日を休む一大原因となつてゐる。

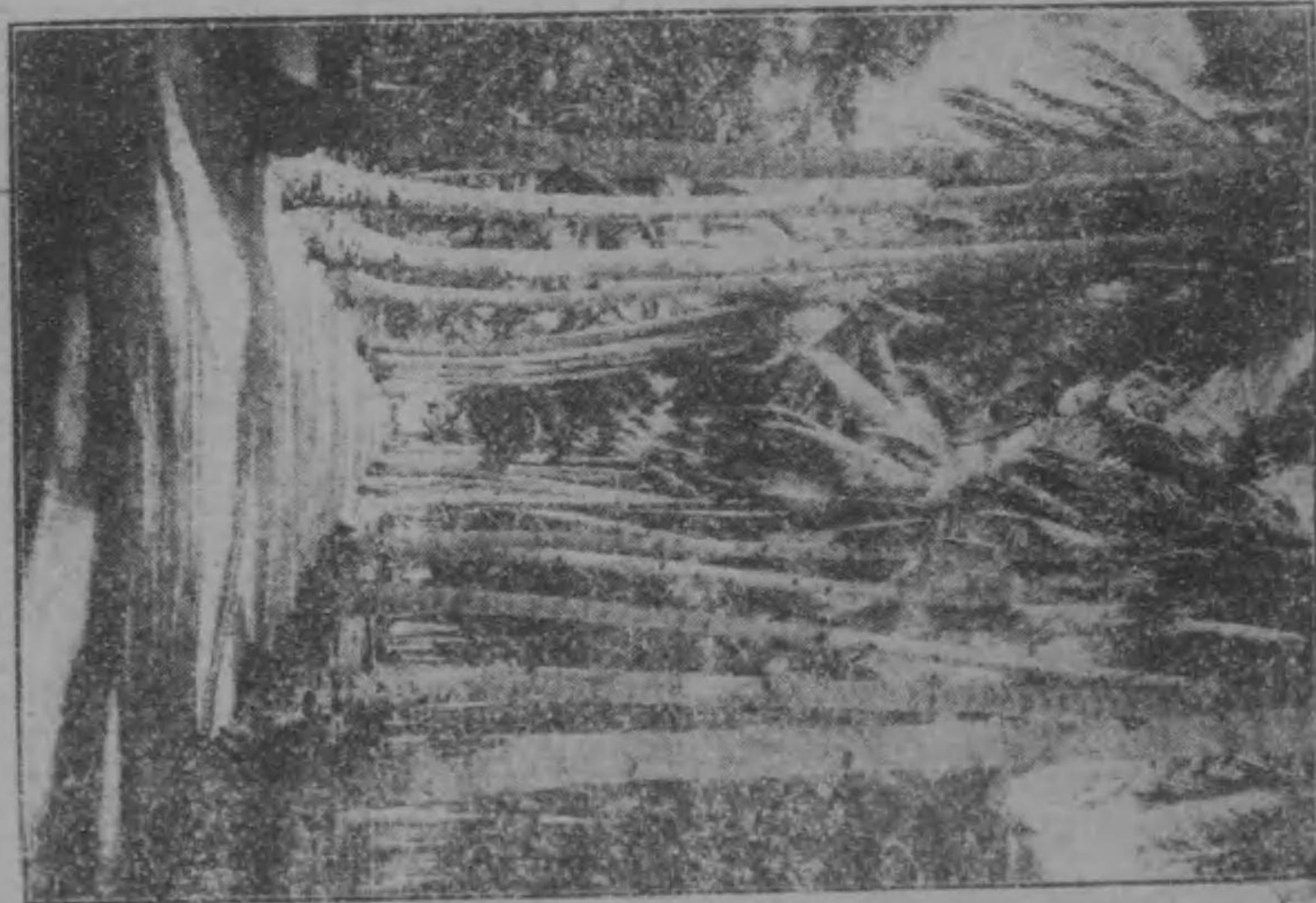
そんな譯で、土人は日曜日を寺詣りと闘鶏と活動寫眞とに楽しむので、闘鶏場も此小さい町に二つあつたが、競争になつたのと闘鶏が青年間に賤められる様になつたのとで、現在は一つしかない。町の見物が大體終つたので海岸に沿つて椰子林を見物する。

抑も椰子はなぞと、今更説き立てなくとも誰でも知つて居る通り、椰子は植ゑ付けてから六年目位から結實する。實の大きさは人頭大で、之が一年に十五六顆から四五十顆生る。

椰子樹の生命は約六十年で一年一本に就き約二圓の収益がある。一町歩に就いて百本位の植ゑるのが尤も宜しいとしてあるが此邊では三百本位植ゑてゐる。假りに椰子林を十町歩持つてゐると、之から擧る一ヶ年間の収益は四千圓許りで、之を小作と半分けにしても、二千圓の収益となる。十町歩以上の地主が遊んで暮すのもで分る。現に齋藤商店の屋主は、椰子園約十町歩と水田約五町歩とを持つてゐる。それで今年六十歳の老爺が一人働く外は、小作に掛け家族十二人を養つてゐる外に、子供三名をマニラ及びルセナの専門學校に通はせてゐる。椰子林の中に這入つて行く。丈二丈餘の椰子が上の方で一杯に葉を擴けてゐるので、下の方は殆ど陰になつてゐる。何れを見ても青いのや黄色いのや大小幾十の實が生つてゐる。面白い事は下の分は黄ろく熟してゐて人頭大の大きさであるが其上は大きさが三分位でまだ青く、其又上の方には小梅位の實が生つてゐる事だ。勞力を惜むと見えて、下の方は雜草の生えるに任せてゐる。鳥が皮の柔かいのを選んで水を吸ふので落ち



椰子園の風景



椰子園の道

たのが澤山ある。熟した奴が彼方此方に放つてあつて中には芽を出してゐるのがある。椰子林を歩くのに蟲や獸の危険はないが、實が落ちる時に大怪我をする事がある。頭にでも落ちやうものなら大變で、死んだ者もチヨイノゝあるが、滅多に人に當るやうな事はなさうである。それに安心して十二三町の間、椰子林の中を歩いたが、日没に間がなくなつたので、此日は乾燥の状態を視察せずに歸つて了つた。

五日は日曜だ。七時頃寺の鐘が常と違つて永く鳴る。それを合圖に土人の男女が盛裝して續々と寺へ參詣する。余も八時頃見物の意味で參詣して見る、堂内にはもう五六百人の老若男女が集つてゐる。女は右側に陣取つて何れも跪座し、男は少數が跪座してゐる丈で、他は腰掛に座し、立つてゐる者も澤山にある。正面には此處も相變らずの美々しい神壇が設けられ、壁には種々の宗教畫が掛けられて、山車とも神輿とも云へる神像も二つ置いてある。燭臺に多數の蠟燭が燃されて、坊主が四人神壇の前に立つて、蠟燭の明りを搔

き立てたり供物を供へたりしてゐる。僧正と見えるのは青や赤の彩りした美しい僧衣を着け、他の者は白赤黒の僧衣を着けてゐる。階級に依つて色の相違があると見える。僧正が敬しく神前に跪いて、旋て神扇を開き、大聲に聖書を読み上げると、會衆がそれに和する。終つて讚美歌の合唱があると、上の方に樂隊が響いて調子を合せる。日本と違つて中々賑やかだ。三回許り聖書の朗讀と讚美歌の合唱が続いた後、一同跪座して祈禱を行ふ。終ると一齊に立ち上つてぞろ／＼歸り初める。余も歸宅して店で遊んでゐると、九時頃再び鐘が鳴つた又新参詣者がある。午後にも二回説教があると云ふ。

土人は皆遊んで居るし、常には女小供が多いマウパンの町も、今日は大人が右往左往して人も急に増へ、一寸賑かである。お蔭で齋藤君の店も、朝から客が這入り續けて、洋傘や帽子や襦袢、扇子、土人靴、白粉、半巾、菓子類が飛んで行く。日曜日は大抵平常の二、三倍賣行きがあるさうである。

四時頃散歩がてら椰子山へ行つて、椰子の水を飲まうと誘はれて、梶原君と共に今日は昨日と反對の方へ行く。村落へ通ずる道を行く。道と云つても幅一尺許りが草が生えてゐない丈けの事で、泥田の様な處が澤山あつて兎もすれば迂り轉けやうとする。山道を五丁許り歩いて海岸に出ると、今度は道が盡きて、細い田の畝を行く。潮で乾ると砂の上を行けるので、土人は道を造らないのである。水牛が二三匹草を喰つてゐる。三間許りの小川に竹が二本並べて渡してある。動搖が劇しく危険なのを無事に渡つて、又田の畝を行く。農家が三軒前に水田を控へ、後に椰子山を負つて立つてゐる。家の周圍にはバナ、が垣を爲してゐる。

家に近いて梶原君が聲を掛けると、十七八歳の美しい娘が窓から顔を出したが、直ぐに引込んで日本人が來たと大聲に叫んだ家族が皆窓から首を出して我々を珍らしさうに見詰める。來意を告げると、五十歳許りの老翁が棹を持つて案内に立つ。よく其邊を見ると寶

仙花や白茄子や金蓮花が植ゑてある。附物の鶏と豚が飼つてある。心憎い住居振りだ。此平凡な奥床しい生活が羨しくなる。

二十錢與へると幾個入るのかと聞く。幾個でもよいと答へると、直ぐ裏の椰子を取つて呉れる。棹の先には鈎があつて、引張つて落すやうになつてゐる。棹は二丈でも三丈でも必要に応じて継ぎ足すやうに出來てゐる。エタクと云ふ大鉞で固い皮を切つて呉れる。皮の中に今一重固い皮があつて、其中に白い肉があり、肉の中には三合以上の水がある。酸甘くて誠に甘い。實の重さは大抵五六百目ある。之が一二丈の上から急落するのだから、随分危険な譯で、地上で大きな音がして落ちた處が凹くなる。我々が水を呑んでゐる内に十二個取つて呉れた。未だ入るなら取つて遣るといふ、辭して其内四個を呑み、餘は外皮を剥いて吊り下げる様にして貰ひ、水邊に生えてゐたニツバ椰子の葉を切つて棒とし、代るべく擔いで歸つて來た。

旋てそれでコ、ナツ汁をするととて、白い肉を薄く剥ぎ取り、水に入れてよく揉み、白い水丈けを搾り取り、鮭の鱗詰の味を附けたのを饗して呉れたが、珍らしい許りでなく、非常に美味であつた。

三日間を氣紛れ雨に妨げられて、九日朝、今度は齋藤君と共に出掛ける。西に椰子林中を行く事数丁、一農家に達した時、齋藤君が珍らしい物を見せやうと家に近いて行く。何かと思つてゐるとそれは一挺の竹許りで作つた籠で、客は籠に横はるやうに出来てゐる。竹の棒の長さは三間許り、之を四人で擔いで二人肩代りが附くのだ。ルセナ、サンバブロ等へ女や病人を運ぶもので、賃銀は片道二十圓位だといふ。此町には二年前迄は醫師が一人も居らず、寺の坊さんが好い加減の藥を與へてゐたが土人の青年がマニラに遊學して、現在二名開業し、町長以上に尊敬されてゐる。従つて昔は大病人は此の籠でルセナやサンバブロに運んだもので、相當客があつたが、今は女は汽船汽車を利用するので、殆ど廢物になつてゐる。

二町許りの幅の川があつて、渡舟がある。此川上は兩側共澤山に水田があり、麻山もあるといふ。對岸に西班牙人の持つてゐる麻の倉庫が二つあり。支那人の持つてゐる椰子の倉庫が三つある。水邊には之等の倉庫が澤山あつて、貨物は皆帆前でシヤインかホンダグワかへ運び、其處から汽車でマニラへ運ぶのだ、更に椰子林中を行く事数丁、一間幅の道に出た。ルセナへ行く道ださうで道とは名許り、全くは泥田だ。

こゝは未だよい方で、裸にならねば通れない處があると聞いてウンザリする。比律賓開發の第一策は完全な道を設けるにあると聞いてはるたが、之を見て眞に然るを知つた。此道は百年前、西班牙政府が土人に賦役を命じて作らせたもので、當時は馬車も通ひ、立派な道であつたが、其後一回も修復しないので斯んなになつたのである。

椰子林の中には、コーゴンといふ鐵の様に固い葉を持つた芽の一種が生えてゐる。一度

之に襲はれると、中々根絶を期し難いさうである。其外に葉のない蔓許りの草が一面に折重つて生えてゐる。之もコーゴンと同じく厄介な草である。

二三町行くとニツバ家屋の中で土人が四五人、椰子の實を乾燥してゐる。股になつた木に鑿のやうな刃物の出てゐるものに、椰子の實を打つけてクル〜と厚い繊維で出来た表皮を剥ぎ取り、實を取つて之を鉞で眞二つに割り、水丈けを捨て、之を竈の上に積み重ね下から火を焚いて焙り乾すのである。

竈は地面に深さ一丈許りの穴を穿つたもので、上は家になつて居り、之に竹の床が設けてある。即ち、床の上に二つに割つた實を伏せて積み、一日位火に焙ると、白い身が黄ろく油の固つたものになる。其時に火を消すのである。表皮は暫時乾して之を焙る燃料とし、肉に付いた皮は之を焼いて炭にする。共に火力が旺盛で、特に此の椰子炭は獨逸軍の毒瓦斯豫防用として、米政府が一時盛んに買占めたさうである。

土人に乞うて、木から實を落して貰つて甘い水を飲み、椰子林中を海岸の方へと歩く。途に又水田がある。水牛を使つて田を耕してゐるのを見受ける。途に椰子樹と椰子樹との幹に竹を結んだ簡単な境界線があるに其線内は必ず一二箇の作業小屋がある。中にはそれを住居に使用してゐるのも見受ける。小屋から煙りの上つてゐるのは、今乾燥させてゐるのである。海岸に出て入江に沿うて南方へ行く。水邊には一面にニツバ椰子が生えてゐる日本の松に似たアゴホーの木、ナンカ、コンゴ樹等が植ゑてあり、海の中には大きなマングローブの木が林を爲してゐる。波が強く地が砂地である爲めに、海濱にある椰子樹は倒れたものが多数ある。此處の波は堅固な古城をさへ崩壊せしめた程で、時に砂を揚げて一大州を作るかと思へば又忽ち一大椰子林を洗ひ流してしまふ。齋藤君が來てからでも、既に十町歩許りの椰子林が洗ひ流されたが、一方には砂地が二十町歩許り出来た處もあるさうだ。



深い入江があつて渡舟がある。三十歳許りの女がバンカを漕いで對岸に渡して呉れる。行く事更に數丁又も入江があつて、對岸に椰子の倉庫が二棟あり、人家が十戸許り並んでゐる。岸に帆船が繋つて倉庫から袋を出して舟に積んでゐる。此處はマウバンの町を隔ること一里半許りの土地である。

マウバンの麻山

翌十日は二里許り山奥の麻山を見物すべく、梶原君と共に午前八時に家を出た。ワイシャツ一枚に洋袴を着け、足には土人靴、腰には土人の農夫やモロ族がやつてゐるやうに、エタクと稱する長い刀のやうな鉞を附け、望遠鏡を肩から吊り下げた。余とエタクの代りに辨當を腰に縛り着けた梶原君の姿が大袈裟な探検隊のやうだと齋藤君が笑ふ。土人は余を軍事探偵だと云ひ、地圖を作る爲に來たのであらうと評してゐるさうだ。毎日の様に椰子山に行くことや身體の大きいのが噂のもとならう。

戶外へ出ると、迂散臭さうに我等を見た前の西班牙人が、今日も行くのか、一體何をす

るんだと言つて聞く。之もどうやら軍事探偵だと思つてゐるらしい。水源池の側から細道を傳つて、椰子山に懸る。山は餘り高くはないが道らしい道が無く、其上に薄んで急坂になつてゐるので、僅四丁許りの上りに非常な苦痛を覺える。頂上に上ると、其處は殆ど平地に均しく椰子の中に所々竹藪がある。ナンカとバイマの木が多數植ゑてあつて人頭大の實が幾つも生つてゐる。之は珍果として知られてゐるが、三月頃でなくては甘くないといふ。住宅が數戸二三町を距て、立つてゐる。此山の中では一年中暑さを知らぬ。空一面に椰子の葉が生ひ茂つて風が吹いてゐる。

一里許り行つた處で初めてアバカの植ゑてあるのを見た。アバカの間には椰子が生えてゐる。此邊の土人は勞力の關係上、アバカよりも椰子の方を好む。椰子は六十年間は植替への必要もなく、雜草も取らねば取らぬで済んで行くが、アバカの方は利益こそ多いが、常に雜草取と麻挽とを遣らねばならぬ。土人の云ふ處に依れば、最初アバカを作つて其間

に椰子を植ゑた方が、椰子の成長が速かであると云ふ。すれば椰子の植付より結實迄の六年間をアバカに依つて収益を得、椰子栽培は非常に有利な事業になる譯である。但しそれは此附近の事で、更に四五里奥に行つた處では、椰子は少なく、殆どアバカ専門に栽培してゐる。勞力さへ充分であれば、椰子栽培よりもアバカ栽培の方が利益で多いのである。此邊の水田では一年に稻を三回作るといふ。不思議なのは雀の居らぬ事で一體鳥蟲類は非常に少ない。蝙蝠も少ないが、鳶以上の大きいのを屢見受けるさうである。

一體此邊は、四五十年前までは太古其儘の處女林であつたのを人口繁殖の結果、次第に開拓されたもので、土人は木材が豊富に得られるのと、他に輸出の方法が無いのと、勞力を省く爲めとで、此の大木密生せる處女林を、片端から焼き拂つて了つた。そして其灰を肥料として、最初麻を植ゑたのが次第に椰子山に變つて行つたもので、ミンダオ島に於ける麻、椰子の栽培も此處と大差はないのである。即ち土に化して立ち、又は横つてゐる

のは之が名残りで、其後間もなく見たものには炭になつた箇所が残つてゐた。

左に椰子山を右に麻山を眺めつゝ、行く事十餘丁、一農家に達した。案内を乞ふと快く座に招じ入れて内の水は汚ないからとて、求めぬに青年が戸外へ走り出で、熟した椰子の實を三個取つて来て呉れた。麻挽の状況を見たいが、此邊に麻を挽いてゐる處はないかと聞くと、自家では先達挽いて了つて今一寸休んでゐるが、此隣りで挽いてゐる筈だとの事に禮を述べて教へられた方へ行く。數丁行つた處に所謂隣りの家があつた。之は作業小屋であらう。下の方に竈が掘つてある。女二人と老爺一人で、まだ生々しい麻を乾してゐる。來意を述べると、老爺が立つて、數丁離れた麻挽小屋へ案内して呉れた。小屋は上をニツバ葺きで、麻挽の機械は曲けた竹で木の臺と鈍い刃物とを緊める様になつてゐる。若者が一人セツセと麻を挽いてゐる。附近には葉の枯れた根元から切られたアバカの幹が澤山に積み重ねられてゐる。之を一枚宛剥ぎ取つて宜い程に引き割き、機械に掛けて白い纖維丈

けを取るの、至極簡單な方法である。二人で代るく方法を開いて挽かして貰ふ。中々力のいる上に馴れぬので甘く行かぬ。二人で一本を挽くのがヤットの思ひであつた。土人が笑つて我々を見ながらそんな事では飯が食へぬと云ふ。暫時見物した上で歸路に就く。二山越えるとマムバンの町は直ぐ目の下に見えて来た。水田の畝から海岸に出で砂上に腰を下してゐると、先日の老爺がバンカを漕いで歸つて来た。マンバンの町から米を買つて来たのである。急にバンカに乗つてマングローブの林の中を行つて見たくなつたので、二時間許り漕いで貰ふ事とした。

時に午後三時、日は未だ中天高く、海岸にあつても日光を浴びては相當に暑い。バンカは靜かに波の上をマングローブの林へと進んで行く。少し沖合に出て椰子山を見渡すと、陸で見馴れたのとは違つて、亦格別の眺めである。海中に竹を丸く立てた處がある。土人が魚を獲る場所だといふ。マングローブの林近く漕ぎ廻らすと、漫ろに過ぎし日のマラボ

ンの川遊びが思ひ出されて麥酒が欲しくなる。

沖の方は暑いので、岸に寄つてマングローブの大木の下に舟をつけて暫時涼を入れる。日が落ちて行くに従つて、風が強くなつて涼しくなつて来る。再び舟を漕がして林中に快をとる。五時岸に上つて椰子の實に渴を癒して歸る。

### 土人の音楽

十一日、朝來雨、椰子山へも行けぬま、肥塚商店の主人を叩いて、マウバン八年間の變遷を聞く。肥塚君が其兄と二人で、初めて此處に移り住んで菓子商を初めた。當時は、此町の戸数は今の三分の二位であつた。當時土人は皆跣で歩いたもので、(尤も今でも田舎に行けば皆跣である)金持の女丈けが僅に土人下駄を穿いてゐる。學校は一つ丈けで生徒は約二百名許り、鬮雞場は二つあつてトランプ其他の賭博も盛んであつた。當時洋服を着たものは、日本人の外には西班牙人丈けで、土人は服や靴をひどく珍らしたものであつた。支那人は、其頃既に五十名許りゐて、マウバンの商權を支配してゐた。

支那人が初めて此町に來たのは四十年前で、其男は此處で土人を妻とし、五六人の子を擧げた。初めは雜貨商をやつてゐたが後には椰子山に手を染めてマウバンの大地主となつた。當人は二年前に死亡したが其女は町長外町の有産階級に嫁し、其の子孫は三十名許りに及んでゐるので、其葬儀はマウバン初まつて以來と噂された程盛大であつた。此外支那人は土人を妻にしてゐるのが多く、是等の子孫を算へたならば恐らく二三百人になるであらう。其内に四五年前からルセナ、マニラ等へ遊學する者が出て、之等が休暇に際して男女共に洋装し、跣で歩くのは野蠻だとか、學生は洋装でなければいけないとか言ひ出したので、一年許りの内に遽に男女青少年の服装が變り、土人も下駄を一齊に皆が穿くやうになり、青年は大抵洋装する様になつた。特に變化が劇しかったのは娘の服装で、女の子には全部洋装さすやうになつて來た。日本でもこんな風に變化したのであらうが、餘りの急劇な變化に驚いてゐるといふ。肥塚商店でも此土人の變化に伴つて、四五年前から小間物雜

貨食料品等を賣る様になつたのである。今夜は小學校で婚禮披露の舞踏會がある。外に適當な建物が無いので、何かの寄合には小學校の二階が利用されるのである。監獄から囚人が二名引張り出されて、街路の掃除をやつてゐる。大抵は賭博とつまらない喧嘩で、重犯の者はルセナの監獄に入れられる事になつてゐるといふ此邊の土人は性質が柔和で、喧嘩をしても減多に殺人事件を惹起す事は無い。遂二十日許り前に一つあつたが、八年間に五つ六つしか無かつた。重犯といへば殆ど二重結婚と姦通であると云ふ。

幸ひ雨が上つたので海岸へ出て見る。漁師は雨の爲めに沖釣を止めたので其代りに引網をやつてゐる。子供が多數手傳つて旋て引上げられたが、小魚が四五貫目取れた許りであつた。椰子林を暫時散歩して夕方歸宅し今日は一人で水浴に行く。

數日間の滞在に椰子山も麻山も思ふさま見て歩いた。斯くて先づ満足すべき程度にマウバンに於ける凡てのものを視察研究して、比律賓が如何なる土地であるか、日本人は如何

にして地方に發展すべきかの問題も、臆氣ながら頭に入れる事が出来たので十九日ホンダグワ行の汽船がカシグランから寄港するのを幸ひ、思ひ出多いマウバンの地を見捨て、マニラに歸る事とした。日誌に記されてある處を見ると、土人の子供の支那人と喧嘩した事や、グツバノの美果を初めて味つた事や、土人の子供のブクシンの事や、支那人と土人の情事、西班牙人と土人との情事、日本の娘子軍の此地に於ける一年前の模様など、委しく書かれてゐるが、之等は餘り枝葉に亘るからマウバンの雨に流して了ふ事とする。

十二時早晝を濟まして、梶原君に別れを告げ、齋藤君に送られて海岸に出た。折悪しく又もや雨が降つて來た。前回の失敗に懲りて特に大きい力の強さうな土人を雇つて、日本式の肩車に乗つたが、土人がそれに馴れず、余も永年遣らぬので調子が取れず、美事に前の方へ落されて了つた。之がマウバンに於ける再度の大失敗である。二町許りを内心怖々もので水中を渡り、一應バンカから端艇に移つて再びサマル船上の客となる。

船は一時に錨を上げてホンダグワへと直航する。思ひ出多いマウバンは、間もなく椰子の林に隠れて了つた。繪に晝いた様な四邊の景色を賞してゐる内に、六時半にサマルは無事にホンダグワの棧橋に着いた。驚かされたのは着港三十分前迄一等室に陣取つてゐた土人許りの男女が、上陸する時には三等の切符であつた事である。之は切符を船中で發賣し發賣に手数が掛る結果、此弊風を助長したものと思はれる。マニラ行きの汽車は、明朝八時三十分に此棧橋へ遣つて來る。一等客は何れも船中の一泊を許されてゐるが、三等客は驛前の土人飲食店で夕飯を取つた上、驛の構内か其飲食店の土間かに寢るのである。

土人の男客三人が、バナナの葉に盛つた携帶の飯を例の手掴みでバクツク。船の食卓に就いたのは、青年米人と余のみであつた。今夜は船室を與へられる。室内に扇風器が設けてあるので具合が宜い。

二十日、朝食の後、ふと海を見ると鯛、鰯、真鯨、ギス、サヨリ、其他美しい南洋特

産の大魚小魚が、無数舷側に寄つて上下に浮遊してゐる。丁度マニラの水族館を大きくしたやうで、美觀譬へ難い。船員が朝食の飯を投げて遣ると、重なりあつて奪ひ合ふ。前方に近く二重の虹が浮く。背景に椰子がある丈けに特別に美しい。土人は何故魚を取らぬかと船員に聞くと、網を持たぬからと答へる。

先日暗に妨げられて見られなかつたホンダグワ港は、今眼前に展開してゐる。須磨の浦を見るやうである。支那人の山上ホテルが見える。定刻八時二十分汽車が棧橋に來た。サマルに別れを告げて車上の客となる。四邊の景色に名残を惜んでゐる内に、汽車は棧橋を發車して停車場に止まり此處で客を收容して、九時十分マニラへ向けて出發した。今度の一等室は頗る不潔で、天井には蜘蛛の巣が澤山に張られてゐる。腰掛も壞れたのが多い。之でマニラ迄百餘哩九圓八十四錢は随分安くない。ルセナ迄の景色は前日見逃したので、眼を車外に晒して椰子山を見る。椰子の外に麻を植ゑてゐる處が見える。麻の中に椰子を

植ゑてゐる處もある。椰子、麻山、水田の外は、大抵千古斧鉞を加へざる處女林で、所々枕木を製造してゐるのを見受ける。ライマノ驛の前に、五六哩あるらしい湖水がある。小島が三つ四つあつて、椰子其他の樹木が鬱叢と茂つて居り、湖水の岸にはマングローブ、椰子樹等が生えて、宛も松島を見るやうな絶景であつたバビロー驛に零時二十分到着した山間の小驛で何等の風情もなかつたが、長さ一丈許りの大鱗を二つに切つたのを積み込んだ。人を喰ふ大鱗が、人に喰はれる事になつたのだと面白く感じた。

此鐵道で滑稽に感じた事は秩序の無い事で、サマルの如きも定期航路に従事して居りながら、其時の都合次第で定期を變更する。酷い時には降客が無いと、乗客の不便なぞは構はずに寄港地に船を着けぬ事である。鐵道の方でも度々之を行ふ。昨年十一月中旬、齋藤君がマニラに出た時の如きは、機關に故障が生じて二時間許り遅れた爲め、常に停車する驛で、客が二三人乗車しようとしてゐるのに拘はらず、其儘見捨て、通過して了ひ、ルセ

ナノ驛では貨車を連結する苦なのを、慌て、出發したので、驛員が非常汽笛を吹きながら追掛けて、漸く引留め、後歸りして連結して出發したが、悪い事は三度の譬に洩れず、線路で椰子林から水田に過らうとする水牛を慥殺して大騒ぎを演じたと言ふ。此不潔な一等車内の模様と呆然した驛員や車掌を見ては、さもあらうと北叟笑む。ルセナに來た時に三人の僧侶が乗込んだ。何れも西班牙人で、羅紗に縫取を施した立派な僧服を身に纏ふてゐたが、驚いたのは大きな紅石を中央に金剛石を數十縁取とした金指輪を箆め、太い金の十字架の付いた首飾りを永く胸の邊りに下けてゐる事で、此二つで少く共五六千圓は下るまいと思はれた。他の二人は之に比すると餘程見劣つたが、それでも千圓許りのものを身に着けてゐる。ニツバ葺の汚い家屋の中に聳え立つてゐる石造作りの大伽藍と、此僧侶の贅澤振とに徴して、如何に往古彼等が威を振つたかと思ひ遣られる。

余は飽かず郊外の景色に目を遣つて旅行の樂しみを味つたが、マウバンに於ける滞在十

餘日の間に、往途に青く見えてゐた稻も大部分刈取られて、沿線一帶に日本の晩秋の如き色彩が漲つてゐた。斯くて車中厚い硝子戸が列車の動搖の爲めに二枚一時に破壊した以外には、別段の故障もなく、汽車は定刻五時にマニラ驛に着いて、余は三度マニラ市の暑熱に身を投じた。

## 五 歸航の記

ユエンサン號 大正八年三月七日、余は病後の静養とある急務との爲に、歩行尚ほ自由ならざる身を提けて、英國船ユエンサン號の客となつた。月餘に亙る病床にあつては夢は幾度となく故郷に通つて、遺瀨なさの吐息を洩らす事もあつたが、愈々故國へ歸るとなると、馬尼刺に於ける拾ヶ月間の生活が沁々と今更ながら懐ひ出された。

一體植民地は何處でも呑氣な生活の出来る處である。それには人が少なくて職業が得易い點も原因してゐるやうし、物質的の生活が安易な點も原因してゐるやうが、最大の原因を爲してゐるものは、面倒な社會上の束縛が少くない點にある。全然ない事もないが、それは自發的の責任感念で濟む事で、他から無理壓付けられる様な事はない。多年植民地の生活に馴れたものが、止むを得ない事情で歸國しても、一年と辛棒し切れないのは之が爲めであ

る。植民地の暢氣な氣分は、到底筆や言葉では盡せない感じて、余は最も此植民地の氣分を好むものである。大連にあつて知友諸氏から暢氣者の標本と稱せられてゐた余が、原始的の自由を愛する心から、國力の伸張を策する考へから、南遊を思ひ立つたのは大連の暢氣さがまだ充分でなかつたからである。余が九年間朝鮮、滿洲、山東省の三ヶ所に於て感じた處に依れば、自分の地位境遇上の立場よりする感じも手傳つてはるやうが、在住邦人の様子に見ても、朝鮮が最も悪く、滿洲が最も善かつた。之を詳説すれば永くなるが、暢氣さの程度に於て、滿洲を都會から遠く離れた田舎に譬へれば、山東省は東京大阪の郊外の如く、朝鮮はコセックした點に於て兩市の如くであつた。

然るに余が比律賓に於て感じた處のものは宛も滿洲と朝鮮との如くで、更に其生活を中古に引戻した如きものであつた。滿洲では仕末に終へぬ暢氣者のやうに云はれた余も、比律賓ではよく知友からそんなにコセックなと吐言を言はれたものである。滞在日を経るに



連れて、余は次第に身心の甚しく若返るを覺えて、之では年と共に子供に逆戻りするであらうとよく知友を笑はせたものである。

茲に於てか思ふ。比律賓の著しく發達すべくして、未だ其處に至らなかつたものは、西班牙政府の鎮國主義と官吏僧侶輩の惡政とが、最大原因を爲したには相違ないが、人を暢氣ならしめる自然の力が、更に與つて力あつたであらうと。此の暢氣な土地から、假令二三ヶ月にしても離れるのは、一方に故郷の山河に見ゆるの樂しみがあるとしても、實に堪へ難い様な氣持がしてならぬ。然し目下の場合としてはそんな事を思つてゐる譯には行かぬ。

ユエンサン號は、香港馬尼刺間の定期船である。日本船客は余一人だと内心淋しく思つてゐた處、久原礦業會社の野呂君が幸ひに乗り合せてゐられたので、大いに心強く且つ心置きな談話に、三日間の無聊を慰められたのは幸ひであつた。馬尼刺は之からが暑くな



る時である。正午アスカラガの寓居を立つて、バシツグ河畔の税關横に到るまで、馬車の上で白服を透す程に汗を掻いたが、船上は海面を撫でる涼風がそよ／＼と面を吹いて心地好い。

船室に這入つて行李の仕末をすると、直ぐ上甲板に上つて緑樹茂る美しい馬尼刺市の遠望を楽しんだ。三時半漸く錨を揚げて港外へ出る。折柄西南の風が烈しく吹出して、大分波が烈しかった。

カビテ軍港の方を望みながら、野呂君と談話を交へる。野呂君は呂宋島タヤバス州に於ける鐵礦採掘に關する用務を帯びて、十二月來馬されたので、鐵鋼は久原と馬尼刺在住米人との協同經營に係り、既に數月前から採掘を開始してゐるが、鐵夫として日本人を呼び寄せる用務もあり、鐵價暴落に關する打合せ等もあつて、急遽歸阪されるとの事である。君は以前會社經營の北ボルネオの椰子園の視察にも赴かれ、同社に於ける南洋通である。

爲めに談話は南洋問題が大部分を占めて、大いに余の蒙を啓かれたのは呂宋島の一部分か知らない自分に取つて、甚だ幸福であつた。元氣が充分に回復してゐないので、一時間許りで一時談話を打ち切り、船室に歸つて疲れを休める。七時頃目醒めて船室を出て見ると、暮色既に迫つて、呂宋島は東方遙かにそれと首肯されるのみである。

夕食合圖の銅鑼が鳴つたので行つて見ると、客は十五六名、我等日本人二人の他は英米人のみである。一等船客には多數の支那人が在るのに、之は不思議な譯だと野呂君に、訊ねて見ると、客が餘り多いので、支那人は別にして先に済まして了つたのだとの事、我々を英米人と共にしたのは、數が少くないといふよりは、一等國民として敬意を拂つた譯であらう。

食後上甲板に上つて涼を取つてゐると、米國人が無聊に堪へ難ねてか、若い婦人を捉して來て舞踊を初める。他の者は散歩しながら、時々拍手喝采する。野呂君と再び南洋問題

に話を引戻す。その説に依れば、北ボルネオのサンダカン附近には、邦人が三百人許り居るが、農園經營者の外は名物の娘子軍と之に附随した者許りで、其發展の程度は比律賓の一局部に布かず、投資家の發展に俟つ以外、労働者の發展は絶望である。其故は土人が安價な労働に服するのと、勤勉な支那労働者が多數に入込んでゐる爲で、日本人は労働能力に於て、支那人に遠く及ばず土人や支那人の如き低度の生活も出来ぬので、勢ひ高價な労働を要求し、殆ど労働者としての價値がないのに依ると。氏は又曰ふ。南洋は何れも天然の富源に富んで、投資家の發展には好箇の活動舞臺ではあるが、植民の實を擧げ得るのは、比律賓を措いて他に求め難いと。此事は前にも聞いた處ではあるが、事實さうだとすれば日本人の海外進出は益々難しくなつて來る譯で、植民地としての南米及び比律賓の位置は益々重要になつて來る。

翌朝船は一面油を流した様な大洋の中を靜に波を蹴立てながら走つてゐた。朝日は既に波上高く登つて、晃々たる光りを水面に輝かしてゐたが、涼風徐ろに面を撫でて清々しい一日を三等支那船客の賭博見物と、野呂君との對談に暮して了つた。此日夕陽が甚だ美しく、陽の落ちた後も波は紅く輝いて、平凡に飽きたる船客一同を樂しました。翌正午、南方遙に一汽船の同じく香港に向つて走るのを見た。事務長の云ふ處に依ると、夫れは日本船で漳州からの歸途であると、余等が馬尼刺を出る時、同港には日本船が五隻繋つてゐた。何れも荷物船ではあつたが、日本船がこんなに發展してゐるかと思ふと、衷心甚だ愉快に堪へなかつた。然るに今亦此處に日本船を見て、一層愉快の念に堪へぬのであつた。波と飛魚より外に目に入る物の無い洋中の航海にあつては、一隻の日本船は船客一同の視線を惹いて、夜遅くまで問題となつた。兩船は競争の態で、香港に向つたがユエンサン號の方が三哩許り速力が早く、夜の九時頃には遂に視界の外に日本船を残して了つた。此夜英米人等は、三等船室に陣取つてゐた比律賓人の管絃樂隊を招致して、同乗の二婦人を引張風

にして、上甲板で盛な舞踊會を催した。これは船長以下も加はつて、餘り上甲板に姿を見せなかつた支那人客も騒ぎの甚しいのと無聊に苦しんだ揚句、見物の内に加はつた。上甲板の騒ぎは遅くまで續いたが、船が明朝未明に香港に着くと、宜い加減に切揚げて自分の室に歸る。

香港の夜泊

翌朝六時目を醒まして行方を見ると、岩許りの小島が前方に螺旋し、燈臺も二三見える。愈々香港に着いたのである。今朝は風強く波荒く雨さへ降つて、朝晴れの香港港外は暗鬱たる有様である。船の進むに従つて無数の戎克が帆を孕ませて、波に揉まれながら香港に向ふのが見える。氣候が遽に低下して肌寒いので、大急ぎで合着服に着替へ外套を重ねる。上甲板に上つて、寒いのを堪へて兩舷の景色に目を遣る。右舷は殆ど樹もない島許りで大して風情もないが、左舷の香港市の方には燈臺やら兵舎やら別墅などが、山上山下に横つて却々に美しい。

何處から來たのか、日本船が二隻前後して入つて行く。旋て兩岸に巍峨たる高樓大厦の美しく立竝ぶ處に來た。右方は大陸に接續した九龍で、左方は香港の市街である。三四十隻の大小汽船が、港内の諸所に陣取つてゐる。内に日本船も十數隻あつて巾を利かしてゐる。船が止まると間もなく檢疫船が來て頭數丈けを調べる。簡単な檢疫が終り、引續いて警官が遣つて來て、簡単に旅行券を調べて直ぐに其場で返して呉れる。税關の手續きはないので至極手軽である。昔は旅行券が無くとも上陸したので、南洋熱に浮かされた日本人が随分澤山に遣つて來た。そして此處に一應上陸した上更に南進したものである。然し今年の一月以來、旅行券の無い者は絶対に上陸させぬ事となつたので、爲めに香港の在留邦人は少からぬ打撃を被つてゐると聞及ぶ。支那人の客引を乗せた戎克が、澤山に遣つて來て客を呼ぶ。上陸して松原旅館に入る。此頃はどの船も満員で、まご／＼すると十日も二十日も滞在せねばならぬとの事に早速客引を案内として、上海行の切符を買求めに行く。

上海行の船は同日正午出帆するのが一隻あり、外に十一日十二日十三日に各一隻宛出る何れも英國船許りで、外に日本直航の船が二十日過ぎに二隻許りある。余は船の都合で日本行きを先にしても宜いと思つてゐるが、餘りに滞在日数が永くなるので上海より直ちに大連に向ふ事に決定し、十一日十二日出帆の船を取扱つてゐる店に行つて見たが、何れも満船で断わられ、止むなく十三日出帆の加奈陀太平洋汽船會社船エンプレス、オブ、ルシヤに乗る事として、香港警察署の査證を取り、切符をも買求めた。

香港で驚いたのは銀相場が高いので、日本の百圓が六十四弗にしか通用せず、余の持つてゐる比律賓の金は、百比が六十四弗にしかならぬ事であつた。由來香港は物價が安いと聞いてゐるが、斯く銀相場の高い今日では、決して安く付かない勘定になる。

十ヶ月目で日本風呂に這入つて疲れを休めて、グツスリ夕方迄眠り、夕食の後東京ホテルに陣取つてゐる野呂君を誘ひ出して、對岸の九龍へと出掛ける。音に聞く香港の夜景を

海上から賞したい爲なのだ。旅館前の渡船場に行くと、折よく九龍行のランチが着いた處である。香港と九龍との間は十二三町もあらうか。此間をランチが、早朝から夜の十二時頃迄五分間置きに通つてゐる。對岸とは云へ、地續きも同様で、誠に便利である。外套を着なかつたので、ランチの上は中々寒い。香港人は半分冬服で半分は合着服である。これでは熱帯から來た者に寒いのは無理はない。ランチの上から電飾された香港市街を見る。勸商場のある四邊電飾された大厦高樓は、海岸に永く横つて云はん方なく美しい。山上の家々も螢の火の如くに散在して、海岸の美景を圍繞してゐる。一應九龍に上つて賑かさうな通りをブラツいて見る。家は全然洋式であるが、招牌其他は支那式で町を歩いてゐる者も九分通りは支那人である。日本人の雜貨商や洋服屋が目止まる。無理をして病氣が再發しては堪らないと、早々に切上げて再びランチの人となり、充分に此美しい香港の夜景を賞して宿に歸つた。翌日はピークに登る豫定であつたが、船上と前日歩行の疲れが出

たのか、身體が重くて起上るにも骨が折れる。开で止むなく静養する事にして、雑誌に終日静を時した、さて翌朝になつて見ると、まだ身體が重いので、之ではピークも見られまいと其儘横になつてゐたが、晝過ぎになつて多少元氣も出て來たので、ピーク丈は見えて置かうと旅の給仕が案内して呉れる儘に、午後二時頃家を出た。途中は丈の低い汚ない人力車に乗つて、ピークの停留場に駈付ける。香港の町は何處に行つても美しい。特に感心させられたのは道路の整つてゐる點で、山上山下縦横に貫通してゐるアスファルトの道路は、大英國の文明と富とを以て初めて出來たものだと思ふ。ケーブルカーの客となつてピークに登る。山上の大夏、山下の高樓、港内の汽船、一々指呼の裡にあつて、美しさは得も云へぬ。十分許りで山上の人となり、更に市街を瞰下すると、之は又一段の眺めで、此儘何時迄も立ち盡してゐたい様に思ふ。香港の町は日本の尾道市の如く、門司下之關の如くにも譬へられるが、其美しい點に於て、賑やかな點に於て、全く兩者とは較べ物になら

ない。

苦しい思ひをしながら、それでも山上を少し歩行して大體を見物し、再びケーブルカーに乗つて降る。ケーブルカーは上る時よりも下る時の方が氣持が悪い。丁度エレベーターに乗つたと同じ様であるが、車體が斜に傾くので、初めての者にはエレベーターよりも乗心地が悪い。多少疲勞を感じたが、序だからと勇を鼓して公園を見物する。園内には温熱兩帶の植物が數限りなく植ゑ付けられて、ダリヤや霧島櫻など日本に多く見られる花も、熱帶産の花と共に今を盛りと咲き亂れてゐる。公園といふよりも寧ろ植物園と稱すべく、日本式の加味してゐるのが一段と興を添へる。

久しかりき大連

翌十三日氣の勢か身體の具合もよいので、午前十一時九龍に渡り棧橋に繫留してゐるエンブレス、オフ、ルシヤ號に乗込む。右舷に歐洲行の伏見丸が繫つてゐた。

朝來怪しかつた空は、此時北風と共に雨を降らして來た。雨にボケた香港の町が着いた時よりも美しい。此船には野呂君は氣の毒にも遂に乘遅れとなられたが、瓜哇から歸朝される東京の石井辯護士、馬尼刺から余より一船早く來て同じく杉原旅館に滞在してゐた大阪の宮崎商會主、大阪商船香港支店の上田君等、余を合せて七人の日本人が乗込んだ。船は定期の正午、棧橋を離れて上海に向ふ。

港外に出て見ると、風は思つたよりも強くて海上酷く荒れたが、船が巨きい丈けに殆ど動搖を感じず、話對手も多いので退屈する事もなく、愉快なる航海を續け得たのは非常な幸福であつた。

余の船室の合客は二名の支那人で、偶然にも馬尼刺から同船した連中であつた。二人共に比律賓子で、曾祖父の時代から馬尼刺に住み、一名は雜貨の卸商を遣り、一名は材木の卸商を遣つて、山から伐出したのを二つの工場で製材してゐるが、共に商用を帯びて米

國に向ふのだといふ。

比律賓に於ける支那人の勢力は、實地に之を見聞して大體知つてゐるが、米國に迄澤山の支那人が出掛けて商權を擴張しようと思ひ及んでゐなかつた。比律賓に於ける邦人も、將來此處まで進んで來ねばならないと思ふと、つくづく現状が情けなくなつて來る。船は翌々十五日午後二時、濁水漲る吳松に錨を下した。之から上へは遡江出來ぬので、上海迄はランチが我々を運んで行くのである。午後三時ランチの客となつて楊子江を遡る景色は此處に全く一變して、支那の風光に馴れてゐる自分には、最早故郷へでも歸つた様な氣がする。船中で冬服に着換へたが、少し暖か過ぎる位で、兩岸の柳は既に若芽を出してゐる。

税關碼頭に着いて、手荷物の簡單なる検査を受け、西華德里街萬歲館に入る。十八日正午榊丸が大連に向つて出帆するので其客となつた。船に乗ると今迄張り詰めてゐた元氣が

一時に緩んで身も心も一時にグツタリして了つた。  
 思へば馬尼刺出發以來十二日間、歩行尙自由ならざる病體を持堪へて、香港上海とめぐつて来たのは、旅行中病氣で寢てはならぬとの一心からであつた。それがあと二日といよ／＼大連と云ふことになつてみれば急に疲れが出て何をすることも臆劫になつて了つた。斯くて船房に昏々として半醒半睡の裡に船は大連に入つた。未だ煖爐の焚かれてある大連の風は南の海を経て来た身には寒かつた。はるけき旅路よ。タヤバスの椰子林、アンチボロの夕月、思ひ出多い旅路であつた。

## 六、比律賓概観

### 一、史外史観

比律賓の沿革を調べて見ると、西歴千五百六十五年、西班牙人レガスピがマジエランの遺志を繼いで占領したもので、爾來西班牙政府はマニラに太守を置いて、之を統治せしめてゐるのである。而してレガスピは其功に依つて太守となり、一は部下の將士を犒ふ爲めと、一は島民の反亂を鎮める方策として、地頭制を布いて區分の地を治めしめ、懷柔策を以て島民を善導した。此の地頭制は随分永く續いたが統治の全權が地頭にあつた爲め、壓政が随分行はれ、之が爲めに比律賓人は酷く苦しめられたもので、餘りに弊害が甚しい爲め、近時に至つて郡村制を布くに至つた。

イタロニエマ  
 マカリアネス  
 四十三日(四日)  
 フトツツ



レガスピの初めて太守として赴任するや、彼は島民を善導するには宗教の力を藉るに如くはないとの意見の下に、盛んに僧侶を招徠して布教に努めさせた。此僧侶は初めの内は施政を助けるのに非常に都合がよく、官吏と島民との間を圓滑ならしめて、反亂を未然に防ぎ、治績を擧げるのに非常な功勞があつたが、宗教の發達に伴ひ、其勢力が擴大すると共に、後には官吏を壓迫し、島民を虐けるといふ大變な厄介者になつて了つた。

僧侶の跋扈跳梁は、三百年間に亙る西班牙の施政をして、全然秩序なきものとした。其官吏を壓迫して威を揮つた事は、千七百十七年に、時の總督バスタメントを白晝公然總督府に於て殺戮し、大僧正デラケスタが自立して比律賓太守になつた一例に見ても、その如何に甚しかつたが判る。一體斯く僧侶が官吏よりも威張つた原因は、人民の輿望が官吏以上であつたのにも依るが、西班牙の制度にレンデンシアと稱するものがあつて、新任者は着任と同時に裁判所を開いて、前任者の治績を調べる事となつて居り、僧侶は此裁判の可

否を決定するに對して、全權を握つてゐた爲めである。比律賓群島太守中には僧侶と衝突した爲めに、功勞があつたに拘らず、歸國後牢獄に投ぜられた者が多く、爲めに太守は此治績裁判を恐れるの餘り、僧侶の機嫌を取るに是れ努め、遂に手に終へぬ程増長せしめた次第であつたが、之には又彼等官吏が家財の蓄積許りを考へて、人民の膏血を搾るべく、僧侶と結託した事も大いに與つて力あるとせねばならぬ。

比律賓の僧侶の墮落してゐた事は驚く許りで、彼等の多くは蓄財蓄妾を憚らず、只管罪愆を擅にするを念としたのである。今日でも僧侶といへば、何れも金持ちで、僧侶の金貸は誰も怪しむ者が無い程になつて居り、蓄妾も依然として行はれてゐるが、昔は更に之が甚しく、其罪惡の結晶はメスチソ（混血兒）として、判る處に多數存在してゐるのである。

此の蓄財蓄妾邪慾にのみ耽る僧侶が、御機嫌取りのみに汲々としてゐる官吏を願使して

政治の全權を左右し、官吏は又た官吏で蓄財許りを念としたのでは、比律賓如何に天恵に豊かなりとは言へ、到底發達し難い譯で、比律賓人が早くから歐洲文明に接觸したに拘らず、近年に至るまで開始の域に進まなかつたのは當然の次第である。

斯くの如く西班牙統治中の三百年間、比島人は貪婪極まりなき官吏の爲めに、徒らに惡税を誅求され、更に僧侶の爲めに種々なる奸策を施されて、財産横頭の憂目に遭ひつゝ、哀むべき生活を送つたのであるが、併し西班牙の施政中にも、決して惡虐無道な事のみではない。即ち千七百七十年に太守となつたドン、シモア、アングの大いに西班牙語の普及に努めたが如き、其後繼者たるヴァスコの産業開發に努めたるが如き、千八百六十八年に太守となつたデラ、トーレ將軍の自由を鼓吹したが如きがそれで、爲めに比律賓の産業は發達し其思想は向上して今日の文明を贏ち得たのである。而して此間比律賓の歴史中重なる出來事は、七年戰爭當時即ち千七百六十二年英國艦隊の侵略を被つて、一時其掌中に陥

つた事と、十九世紀の末葉に頻々として起つた内亂とである。

僧侶は初め自個の慾望を果すには、土人を無智の者たらしめるのが肝要であるとして、折角發達しかけてゐた教育を廢止し、學校は殆ど名のみの状態であつたが、太守の内にもアング、トールの如きがあり、駁々として襲ひ來る近代思潮には抗する能はず、十九世紀の中葉に至つて、教育施設も稍整つて來た。之と共に土人の知識慾は嶄然と頭を擡けて來た。斯くて二百年間昏睡裡にあつた比島人は、漸く目醒めて、島内一時に革命の叫びが起り隨所に反旗が翻へされた。

其後千八百七十二年、政府が寺院に反抗した俗僧三名を處刑したのが、甚しく島民の反抗心を刺戟し、比律賓の青年は秘密結社を組織して、大々的に革命運動を開始した。ホトセ、リサールは、此運動に更に一段の熱を加へさせたもので、其基るを爲したものは、有名なるノリメタンヘレ（我に觸る、な）及びエル、フイリバステリスモ（一揆）二篇の小

説であつた。此小説の爲めに彼は僧侶の甚しき憎しみを買つて、遂に千八百九十七年、罪なくして殺されて了つたのである。之より先ホーセ、リサールの小説に刺戟された青年等はカチブナンと云ふ秘密結社を組織して、アンドレー、ボニファシオを首領に戴き、悪僧等を驅逐し、進んで西班牙の群島政府を顛覆しようとして企て、千八百九十六年には一舉にして悉く西班牙人を殺して仕舞はうとの陰謀が企てられて居つたが、事半ばにして露顯し、黨員の内一千名は阿弗利カの西岸フェルナンドポールの牢獄に投ぜられ、首謀者は處刑された。けれども之が爲めに反亂は益々擴大され、リサール銃殺の響と共に全島に擴がつた。有名なるアギナルド將軍が奮然として起つたのは此時で、半歳に亘つて官軍と戦つたが、銃器彈藥缺乏の爲めに其目的を達する能はず、ビアクナロバトに退いて形勢觀望中、一方政府は鎮壓に力竭き、時の太守リベラは一部の改革と八十萬圓の償金を支拂ふ條件の下に反軍と講和する事となり、全島に亘つた反亂も表面上一先づ收まつたのである。

然るに其翌年に至つて、突如として米西戦争が起り、時宛も香港に碇泊してゐた米國の太平洋艦隊は、比律賓に進撃して、カビナ軍港に碇泊してゐた西班牙艦隊を一撃の下に殲滅した。海軍の大勝に次で、米國は陸兵を派遣する事となり、數ヶ月後に及んで馬尼刺を占領した。當時は既に米西間に平和會議が開かれてゐた時であるが、此陸兵の進撃は、海底電線に故障があつて、本國の命令が届かなかつた爲めであるといふ。而して此戦争の結果、比律賓は米國領となり、米國は之に對し二千萬弗を支拂つたのである。之より先香港に隱遁して再舉を策してゐたアギナルド將軍とデューイー提督との間には、比律賓獨立を條件として、アギナルド將軍が再び比律賓に反旗を起して、米軍を助けやうとの密約が、成立してゐたので、巴里條約に於て米國が比律賓領有の事を確定し、一言同島獨立に言及しなかつたのを見て、島民は甚しく憤慨し、アギナルド將軍を首領として反旗を翻し、假政府を造つて拮抗した。斯くて各所に奮闘する事數年、萬事は現状の如く解決されたが

米國は之が平定に三億弗を費消したと云ふに見て、如何に島民が獨立に熱心であつたかと思はれる。

### 二、天然力

比律賓群島の領域は、北は北緯二十度、南は同度四十五分、東は東經百二十七度、西は東經百十八度の間である。即ち東西七百哩、南北千五百五十哩で陸地の面積は十一萬五千方哩、水面は七千萬方哩になつてゐる。

此中に呂宋、ミンダナオ、サマール、ネグロス、バナイ、バラグア、ミンドロ、レイテ、セブ、ボホール、マスバテ、スルーの十二大島があり、之に所屬の小島が基石を並べた様にあつて島の總數は三千四百四十一を算へてゐる。最も大きい島は呂宋島で、四萬方哩の面積を有し、次は三萬六千方哩を有するミンダナオ島である。

全群島は殆ど火山質から成つて居り、西部海岸に僅に珊瑚層があるのみである。呂宋の北方は山岳が重疊して、四千呎から七千呎に及んでゐる。最高峯は南方にあるマヨン山で高さ八千二百八十三呎、其形が我國の富士山に酷似してゐるので俗に呂宋富士の名稱がある。今日尙ほ盛んに煙を吐いてゐるので、全山禿兀として、山麓に僅に雜草や灌木を見るのみである。然し全群島中の最高峯はミンダナオ島のアポー山で、高さは九千六百十呎に及んでゐるが、此方は深林が蒼鬱として繁り、遠望甚だ優雅であるといふ。

斯の如く比律賓群島は山岳が多いので、河川の大きなものが少く、航行し得る程のものは殆ど無い。大なる河川は呂宋の北方にあるカバン河で、雨期には河水が兩岸に溢れ、カバン平野の沃野を造ること、宛も埃及のナイル河のやうである。

之に次いで中央呂宋のバンバンガ河、南呂宋のビコール河、ミンダナオ島のパツアン河、リオ、グラント河等であるが、以上は悉く河口十數哩の間、小舟を通ずるに過ぎない

此地は元亞細亞大陸に續いてゐたのが、中間の陸地が陥没した爲めに、合見る様な群島となつたもので、日本と同じく亞細亞大陸の斷片であるといふ。但し岩石は總て日本より新しく、地皮は一面に火山石と火山灰とを以て蔽はれる。活火山は今尙群島中に十二個もあり、爲めに地震も中々頻繁である。

比律賓は斯く火山生成である處へ、海流が島嶼を廻つて氣候を緩和し、又北東南西の信風と相俟つて、適宜に雨を降らすので、土壤は膏腴となり、數百種の美しい草木が、非常な勢ひを以て生成する。其大なるものは建築器具用材として、全世界に供給せられてゐる。高價な熱帶特有の硬木類、亞細亞、亞米利加等から移植された有用植物、椰子、アバカ麻、護謨樹、バナ、マデー、甘蔗、木綿、煙草、珈琲、鳳梨、カ、オ、マンゴー、パイヤ、チーマ、タビオカ、柑橘、藍、麥、米、玉蜀黍、芋、馬鈴薯、落花生等、凡ゆる有用植物に富んでゐるのである。

比律賓最初の住民は、現にネグリトと呼ばれてゐる黑人種であつたのを、南方から移つて來たインドネシヤン人種が漸次に驅逐して、遂に其土地を占領したものである。インドネシヤンは、我日本人に酷似の人種で、ネリグト以外の比島人たるタガログ、ビサヤン、イコロス、バンバンガ、バンガシナンなどの開明人種は元より、呂宋島山地の非教民、ミソダナオ島のモロ、バコボ等、皆人此種に屬してゐる。

氣候は別に説いてあるが、一年中日本の夏であるといふ以外、格別言ふ事もない。此内乾燥の二季があつて、全群島を通じ、大體に於て乾燥期は十一月より初まつて五月に終る。此季節には毎日東北から來るモンスーンを被るので、地は熱帶圈内にありと雖も、甚しく凌ぎよい。雨季は五六月の交に初まつて、十月に終る。此時分には、西南風が吹き氣温も餘程低下する。但し太平洋岸に於ては之と正反對で十一月より雨季に入り、五月頃より乾季に入る。降雨の量は一定しないが、全く雨の無い月は罕で、南方諸島では降雨量が大幅

平均してゐる。馬尼刺に於ける平均雨量は、七十六吋で降雨日数は平均年二百餘日である。呂宋島の平均温度は樺氏八十一度五分で、北方山岳地方では最高七十八度、最低四十六度を示し、年の半ばは日本の秋の如き氣候である。又ミンダナオ島の首府ザムボアンガ市は、馬尼刺を南に距る事四百哩の地にあるけれども、温度は却つて涼しく、平均温度は八十度一分を示してゐる。

比律賓が他の熱帯地方と異つてゐる點は、虎、豹、象、其の他の猛獸や毒蛇の棲息してゐない事である。鱉は太平洋海岸の諸島に棲息してゐるが、之とても僅のものである。鳥獸類は甚だ種類が少く、數に於ても乏しい。有用な獸類として勞役に服してゐるのは水牛と馬とで、豚は食用として盛に飼育されてゐるが、羊、牛の類は多く居ない。

比律賓の氣候

余の経験した處に依れば、比律賓中で最も暑いと稱せらるゝマニラ市も、決して遣り切れぬと嘆

つ程ではなかつた。マニラ市の平均温度は樺氏の八二、〇二度で、之が一年中殆ど變らないのである。余は酷暑たる四五の兩月を知らないが、多年マニラに居住してゐる日本人から聞いた處に依れば、此頃でも日中華氏百度に上る事は少く、夜は相變らず涼しくて、日本の酷暑に於ける夜寝られぬやうな目に遭ふ事はなく、暑さに對して身體が馴れてゐる丈に、さして苦痛を感じず済むさうである。六月此地に上陸した當時は、日中は甚だ弱つたが、十日許りの内には馴れて了つて、左程苦痛を感じなくなつた。然し身體が太つてゐる丈に、馬車や電車内でも脊まで汗が通る事が多かつた。然し土人を見ると、日中徒歩の者でも汗を出してゐる者は少ない。之は衣類が極めて薄く風通しがよいのにも依るが、氣候に馴れてゐるのと身體が瘠せてゐるのが重なる原因であらうと思ふ。土人は大人は元より小兒まで骨も現はに見える程瘦せたのが多く、肥満した者は千人に一人もあらうかと思はれる程で、日本人の瘦せてゐると稱する者も、土人に會へばお前はよく太つてゐると云はれるが常である。

七八兩月はマニラ附近の雨期で、十二、一月はマヤパス州附近の雨期である如く、雨期は地方に依つて異つてゐる。雨期は一般に涼しいが雨の降らぬ日は蒸暑く、日々温度の高低が著しくて、

健康には却つて害があるやうである。此兩月には蚊が盛んに發生し、随分苦められたものであるが、此兩月以外には遂に蚊帳を吊らすに濟まして了つた。之は市の衛生課が蚊の撲滅策として、悪水の溜る箇所を殺菌劑を撒布するからで、蚊と共に蠅も極めて少く、殆ど水牛の糞や便所以外では目に留まらぬ程であつた。之はマニラの便所が、其下水と共に清水で常に洗ひ清めて海水へ捨てられるからで、一步郊外に出れば蚊と蠅とは一年中絶ゆる間がなく、マラポンに於ける九、十、十一、の三ヶ月、マヤパスに於ける半月餘の生活には、随分苦しめられたものである。九、十、十一の三ヶ月は六月頃と大差なかつたが十二月に入つてから、急に朝夕が涼しくなつた。一二の兩月は日中と雖も凌ぎよく、屋内にあつては餘り暑さを感じなかつた。他の月には夜寢巻の儘で眠つたが、十二、一、二、月丈は上に毛布を掛けて眠つた。四季の相違がないだけに、感覺は多少鈍くなるやうで、單調に飽くが一年中同じ服装で暮されるのと金儲けが多い結果は、誰でも非常に呑氣になる。生活が安易な丈けに、永住を策する者が多く、言葉の通ぜぬ者丈けが兎もすれば日本に歸りたがるので、之は單へに發奮しない結果である。一度病氣に罹ると回復するに永引いて、其後は著しく健康を害れるから無理をすると遂には取返しがつかぬ事になる。余の知事も暑さには負けなかつたが、病氣には酷く祟られて、其爲め遂に豫定の十分の一も旅行する事ひ出来なかつた。此點は在留者の大いに心得べき事で、木挽、麻挽其他の請負労働者の内には、金の儲かる嬉しさに無理な労働を續けて、二三ヶ月で重き病氣に罹り、素志を貫徹し得なかつた者が多く、セントルカス病院にも此種の日本労働者が數名入院してゐた。然し一體に日本人は身體が壯健で、病氣に對する抵抗力が強いと、土人に羨しがられてゐる。要するに比律賓は決して不健康地ではなく、脚氣胃弱の氣味ある者の外は、移住するに於て何等の畏るゝ處はないと思ふ。

### 三、政治組織

比律賓の立法部は、上下兩院より成立つてゐる。下院は四年の任期を以て、直接各州人民から選舉せられる八十一名の比律賓人と非基督教州から總督が任命する九名より成り、

其權限は米本國議會の下に於て活動するのと、財政案に對し、自動的發案料が無い外、全部米國議會と同一である。選舉資格は年齢二十三歳以上の男子で、且つ次の一箇條に該當する者である。(イ)英語又は西語を讀み、且つ書き得る事。(ロ)五百圓以上の財産を所有する事。(ハ)三十圓以上の租税を納むる事。(ニ)西領時代に於て地方官吏の職にありし事會議は毎年十月から開かれ議長はセブー選出議員オスマニア氏で、將來比律賓が獨立する際に於て、大統領たるべき輿望を有つてゐる人物である。

上院は元と米國大統領が任命して、米國上院が承認した九名の委員から成つてゐるが、四年前ジョーンス法案が通過した結果、各州から選出する二十四名の議員より成る事となり、上下兩院共、全く比律賓人の掌中に歸して、獨立の準備が充分に出來上つてゐる。上院議長はケソン氏で、オスマニア氏と肩を並べて威望がある熱心な獨立運動者で、先般運動の爲め、米國へ自由獨立請願の爲めに赴いた事は、普く人の知る處である。

猶兩院は各々一名の代表者は互選して、之を米國に送り、四年の年期を以て米國上下兩院に列席し、發言せしむるの權利を有してゐる。比律賓の政務全般は、米國の陸軍卿の管下に屬し、同省内に島務局が設けられて、之を掌つてゐる。

比律賓群島政府の首長は總督で、前般の政務を統轄し、其下に官房及び内務部、商務及警察部、財務及司法部、教育部の四部を置いてゐる。左に官制の大體を示せば、

總督直屬 總務局、検査局、人事局、馬尼刺市廳

内務部 衛生局、土地局、科學研究局、山林局、氣象局

商務及警察部 警務局、土木局、建築顧問、航務局、通信局、沿岸測量局、勞働局、鐵道監督部

財務及司法部 司法局、稅關局、内國稅局、理財局

教育部 教育局、比律賓大學、農務局、調度局、監獄局、印刷局、比律賓圖書館

現總督はフランシス・バートン・ハリソン氏、副總督はヘンダーソン・エス・マーチン氏で、



共に比律賓人間に勢望がある。

次に地方官制に就いて見れば、半自治體で土人文化の程度に依り、便宜上基督教州、非基督教州、回教州の三つに分けて、各々異つた政治を行つてゐる。州は教、非教を合せて三十六個あり、各知事を置いてゐる。此外にミンダナオ及びスルーに省が設けられて、其下に七個の縣を置き、一切の回教徒を統治してゐる。此縣にも知事を置き、施政上手加減が加へられてゐる丈で、組織は何れも同じである。

國防は米國の陸海軍が之に當り陸兵約二萬人の外、カヴィテ、オロンガールボの二軍港に砲艦と驅逐艦とが置かれてある外、特記すべき程のものはない。治安を保つには、コンスタブラリーと稱する憲兵を用ひ、憲兵兵士は全部土人、將校は米人及び土人である。其他に米人及び土人の巡査が居る。

### 四、土地問題

比律賓の産業的統計に關しては、官廳の發表せる所と學者の調査せる所と皆悉く一致せず、何れを取つて宜いか分らない。現在全群島の隅々に亘つて嚴密な國勢調査をやつてゐるから、これが出來上れば總ての事が分る様になるが、それまでは人口でも産業でも全く大體觀念を得るに満足せねばならぬ。今山林局の調査に依れば比律賓の土地は、次の如くである。

種別	方哩	割合
處女林	四〇、〇〇〇	、三三 <sup>一</sup> / <sub>三</sub>
第二期深林	二〇、〇〇〇	、一六 <sup>二</sup> / <sub>三</sub>
草地	四八、〇〇〇	、四〇

六 比律賓概観

開墾地

一二、〇〇〇

、一〇

尤も比律賓學者として有名なウースター博士は開墾地を八九三七方哩と計算し、クロー氏は全島面積の五分餘と測定してゐる。斯うなると開墾地は益々少くなる譯であるが、開墾地は年々著しく増加して行くから山林局の調査に依るのが、大體に於て當を得て居るであらう。更に開墾地を、所有權の性質に依つて分類すれば、

公有地

七〇、三〇〇方哩

私有地

三一、八七九方哩

となる。之以外の地は總督府、州廳、地方團體其他の所屬地である。政府は此等の公有地を拂下げ、又は貸下げの方法に依つて、私人の耕作を奨励してゐる。

方今比律賓の憂は、耕作地が甚だ少くて満目の天恵を、空しく蓬々たる青草の繁茂する儘に委してゐる事である。故に政府は比律賓人及び米國人に對しては、個人には四十エー

カー法人には二千五百エーカーを限度として、壹エーカー十ペソを以て拂ひ下けてゐる。外國人は個人としては此特權に浴する事が出来ぬが、法人を組織し、四分の一の拂込を終り、且つ名義上一人の比律賓人を加へる事に依つて、等しく二千五百エーカーの土地を所有する事が出来る。而して借地權を得るには、壹エーカーに對して、僅に五十錢で足りるのである。

五、産業一斑

イ、農業

比律賓群島に於ける産業中、農業の如何に重要な位置を占むるかは、輸出貿易に於て主要農産物たるマニラ麻、砂糖、椰子及び椰子油、煙草及びマゲーの輸出額が、一九一七年度に總輸出額の九割二分三厘餘、一九一八年度に同じく九割三分餘に達してゐる事に徴

して瞭かである。(別項、外國貿易中、重要輸出品表参照)元來、本群島は氣温高く地味肥沃であつて、農業上有利な條件を具備してゐるから、その經營は頗る有望であるが、現在に於ては既墾農耕地は僅々總面積の九分に過ぎず、農耕は殆んど土民の手に委ねられ、然も其方法は極めて幼稚である。加ふるに資本の缺乏と勞力の不足とに依り、天與の富源が、多く原始状態に放任されてゐる。最近の統計に徴すると、本群島に於ける農家は八十萬戸を超ゆるが、内五割は一年に一町歩以下の土地を耕すに過ぎず、五町歩以下を耕す者は八割九分に當り、百町歩以上を耕す者は僅かに三厘(二千四百戸)を數ふるに過ぎない。併して最近數年間に、製糖業及椰子麻の栽培等に對し小額の外資が投ぜられたのみであるから、此際我國の資本家は宜しく其眼を本群島の農業開發に注ぐべきである。

**米作** 比律賓人は常食とする所は米であるから、米作は農業中最も重要であるが、其産額は群島内の需要を充すに足らず、豊凶に依つて大差あるが大約需要總額の三分の一



比律賓人の植田



甘蔗畑に働く人

至五分の一を輸入米に仰いでゐる。比律賓群島に於ける現在の米作方法は、多くは人工灌漑に依らずして單に雨季を利用し、一年一回の耕作に止り、灌漑工事の普及する迄は、米の産額は主として天候に左右せらるゝ状態にある。最近の統計に依れば、米の耕作面積は約百二十萬町歩に及び、兎に角に各種作物中最も廣い。最近八年間の米作統計は左の如くである。

年次	耕作面積 ヘクタール	數量 千キロ	金額 ペソ	一ヘクタール 當り收穫高 キロ
一九一〇	一、一九三、二四一	五二八、〇五四	六〇、六二〇、六四六	四四二
一九一一	一、〇四三、七五七	五七四、八四三	六五、九九一、九四一	五五一
一九一二	一、〇七八、八九一	三三三、四二九	四二、三〇五、七六二	三〇二
一九一三	一、一四一、二四二	五八七、九七三	六一、七三七、二二三	五二五
一九一四	一、一四四、七三七	五四五、六八四	五七、二六一、七六〇	四三八
一九一五	一、一三〇、七三三	四二七、六四四	四九、二〇七、九七八	三七八
一九一六	一、一四〇、八二九	五〇一、〇九三	五五、九三三、八二二	四三九

一九一七

一、三三五、六六二

六七六、六四一

八二、三七七、八二二

五五四

### 玉蜀黍

玉蜀黍は米に亞ぐ重要食物で、耕作面積に於て第三位にあり、近來政府は諸種方法を講じて、之が耕作を奨励してゐる。耕作面積及び産額の趨勢を左に表示する。

年次	耕作面積 ヘクタール	數量 千キロ	金額 ペソ	一ヘクタール 當り收穫高 キロ
一九一〇	五七九、七六八	三九二、四八四	三〇、一九二、〇九〇	六七七
一九一一	三〇二、五二五	一四五、三六六	一一、一八四、二八〇	四八一
一九一二	三四〇、一六六	二二二、四七三	一六、四九七、八六六	六七七
一九一三	三三三、七〇九	二五三、八五一	一五、三三一、〇八二	六六二
一九一四	四二二、三〇九	三六六、五七〇	一五、八七三、八〇四	八七〇
一九一五	四四三、〇四八	FOE、一三九	一六、〇六七、六五八	九二二
一九一六	四三三、七六六	三八七、〇九一	一四、七三三、九六二	八九四
一九一七	四六八、二六三	三六九、四五四	一七、六三九、八〇〇	八六三

### マニラ麻

マニラ麻は主として綱索製造用纖維として需要廣く、從來本群島第一の輸

出品で、其輸出額は總輸出額の四割乃至五割に達する。全島到所に産するが、最も適當してゐるのは北緯六度より十五度、東經百二十一度より百二十六度の間に位する地方である。是等の地方に於て殊に可なるは東海岸及南海岸で、呂宋島の南部アルバイ州、アンボスカマリネス州、ソルソゴン州を初めミンドロ島、マリンジグ島、サマール島、バナイ島、ネグロス島、セブ島、ボホール島、レイテ島、ミンダナオ島である。就中ミンダナオ島のダバオ州に於ては本邦人の麻栽培に従事する者多く良好の成績を擧げてゐる。輸出マニラの麻の仕向地は米國を主とし英國及び日本之に次ぐが、概して上等品は日本に、中等品は米國に、下等品は英國に仕向けられる。マニラ麻の植付面積産額の趨勢を表示すれば左の如し。

年次	植付面積 ヘクタール	數量 千キロ	價額 ペソ	一ヘクタール 當り産額 キロ
一九一〇	四七五、一三六	一六、四三三	二六、九五三、三四三	三五五

一九一一	四〇四、一六〇	一七、八八〇	二七、五〇〇、七三六	四二五
一九一二	四三三、八〇四	一五、四七三	二八、七〇五、二〇八	六六八
一九一三	三六八、三一一	一四、五三〇	三三、三九、六六六	三八二
一九一四	四三七、四七〇	一三、七六六	二九、九六八、〇〇九	三三五
一九一五	四五七、八六五	一四、一九二	三〇、四三〇、七四二	三三八
一九一六	四四六、六六二	一五、七五六	四三、六七、三三九	三三二
一九一七	四八八、五〇〇	一六、九五三	六三、五九八、三三六	三三九

**椰子** 椰子樹も本群島到處に生育するが重なる産地は、呂宋島のタヤバス州、ラグナ州、カマリネス州其他南部諸州及びミンドロ、ミンダナオ、バナイ、セブ、レイテ、サマールの諸島で、主として土民が栽培してゐるが近來急速の發達を爲し、其産物たるコブラ及び椰子油はマニラ麻に亞ぐ重要輸出品である。一九一六年七月より一九一七年六月に至る間の統計に依れば、椰子樹は五千萬本以上で、其植付面積三十萬一千ヘクタールに及び、椰子實の産額八億八千萬顆を超え、其産物たるコブラ、椰子油及び椰子飲料なるチ

ユーバを金額に見積れば三千二百萬ペソに達し、植付面積に比し産額莫大である。本群島は一部を除く外地味氣候の點より椰子の栽培に適し、殊に其栽培は植付後の手入れ及び收穫に比較的勞力を要せず頗る有利な事業である。一九一三年以後椰子油の輸出激増し、一九一七年度に於てコブラの輸出九千二百十八萬担、一千六百六十五萬四千ペソなりしを凌駕して、同年度椰子油の輸出は四千五百十九萬八千担、二千二百八十一萬八千ペソとなり一九一八年度に於ては更に増加して椰子油の輸出一億一千五百二十八萬一千担、六千三百三十二萬八千ペソとなり爲めに、コブラは却つて減少し五千五百六萬二十担、一千三十七萬七千ペソとなつた。左に椰子の植付面積及び産額を表示する。

年次	植付面積 ヘクタール	數量 千担	金額 ペソ	一ヘクタール 當り産額
一九一〇	一六四、一九三	九三、九六	三、九四一、六六	五、七三
一九一一	二〇八、四三三	九六、一五六	二、六二一、二七三	四、六三六
一九一二	三〇〇、六八二	一、〇四一、一八二	三、九六六、五四三	四、五二四

一九一三	三三三、三三三	七八一、五八六	三〇、五五三、六四	三、五〇一
一九一四	三四五、九五三	五九一、二六六	二四、六五一、七四	二、四〇四
一九一五	二六四、一四八	八六五、八二六	二四、四六一、八八四	三、二七
一九一六	二七五、六八九	七三三、二七六	二四、四三〇、九五五	二、六六六
一九一七	三〇一、三三〇	八八〇、五八九	三一、九五、四九	二、九三三

砂糖

本群島に於ける主なる砂糖産地は、ネグロス島西部のオキシデンタル、ネグロス州で、總産額の四割を産出し、呂宋島バンバンガ及びバタンガス地方並にバナイ島の南部之に亞ぐか、未だ甘蔗栽培適地の半を耕作せるに止り、其種類も劣等であり、耕作の方法も幼稚であつて、製糖法は極めて舊式なるが爲め、粗悪なる赤糖を産出するばかりである併し一九一三年以來、主として米國資本に依り起されたる新式工場を初め十餘ヶ所の新式製糖工場があるが、次第に何れも良好の成績を挙げつゝある。耕作、製糖の方法を改善すれば、本群島の製糖業は最も有望である。猶本群島の砂糖消費量は十萬佛噸で、大部分は

米國を初め英日支等に輸出されてゐる。甘蔗植付面積及び砂糖産額は左の如くである。

年次	植付面積 ヘクタール	數量 千キロ	金額 ペソ	一ヘクタール 當り産額 キロ
一九一〇	八三、一六六	一五二、六三九	一五、二六三、九三三	一、八三五
一九一一	一三〇、三三三	二四三、九九五	二四、三九二、四三七	二、〇二七
一九一二	一六四、二六一	二四二、三三五	二六、四八六、六三六	一、四七五
一九一三	一七六、二八	二九二、三三七	二五、六九八、四五〇	一、四三四
一九一四	一六九、四三六	三〇六、四三〇	二六、三二一、五五五	二、〇四五
一九一五	一七三、〇五二	三〇〇、一七六	三三、三三三、四八八	二、〇八一
一九一六	一七九、六一	三五〇、二八二	三三、二六六、一三四	一、九四八
一九一七	一八五、四二二	三六三、三三八	三六、七四四、七〇八	一、九四九

煙草

煙草は本群島の重要輸出品の一つで、重なる島に於て、多少にても産出せぬ處はないが、呂宋島の北部イサベラ州、最も多く、總産額の三四割を産出する。耕作の方法は小規模で、改良の實は未だ容易に擧らざる狀況である。輸出葉巻煙草の仕向地は米國がそ

の過半数を占め、支那、英領印度、英國、西班牙等之に亞ぎ、葉煙草は西班牙を第一とし佛國、和蘭之に亞ぐが、葉巻煙草の總産額の半は領内の消費に充てられ、紙巻煙草は殆ど全部領内で消費され、輸出は僅少である。左に煙草産出狀況を表示する。

年次	植付面積 ヘクタール	數量 千キロ	金額 ペソ	一ヘクタール 當り産額 キロ
一九一〇	五三、六二六	二六、〇〇七	七、五六一、八三〇	五、三五
一九一一	六九、〇二五	二五、五一八	六、八八九、八六六	三、七〇
一九一二	五七、〇四一	二九、五八三	七、九八七、四五六	五、一九
一九一三	六八、九九一	四六、〇六〇	一二、四三六、三〇五	六、八八
一九一四	六〇、八九〇	四六、七三二	七、一〇九、三三七	七、六七
一九一五	五三、三四三	三八、三〇三	五、六八四、五七九	七、二八
一九一六	五八、九二二	四一、一三九	七、二五九、一六九	六、九八
一九一七	六二、七七六	四八、九二九	一〇、八八三、五三三	七、九二

マゲー マゲー(龍舌蘭)は古くから本群島に散在したが、市場に賣出されたのは一

九〇四年以後で爾來漸次産額を増加し重要輸出品の一となつた。綱索製造用纖維として需要廣く、其栽培は地味の悪い所で出来、長期の早魃に堪へ、耕作簡單にして病害の虞がない。本群島に於ける事業として有望なものである。左にマデー植付面積産額表を掲ぐ。

年次	植付面積 ヘクタール	數量 千キロ	價額 千ペソ	一ヘクタール 當り産額 千キロ
一九二二	八、五九八	四、六六八	五五五	五三七
一九二三	九、二八三	三、六〇〇	四七一	三九〇
一九二四	一八、二三八	七、五八四	八六一	四一六
一九二五	一九、二二八	六、三三六	六三三	三三九
一九二六	三〇、八〇四	一三、三九〇	一、七四七	四三五
一九二七	二六、〇九	一七、一九〇	二、七五〇	六二六

**家畜** 終りに本群島に於ける家畜増加の趨勢を示せば左の如くで、他に比して甚だ振はないが、それは疫病に苦しめられてゐる結果で、是等家畜の保健に就ては、政廳も大いに注意してゐる。

年次	種別	水牛頭	牛頭	馬頭	豚頭	山羊頭	羊頭
一九一〇		七五六、七四	二六九、九六三	一四二、六〇四	一、六八一、五五〇	四四一、四五五	九四、二六
一九一一		八六三、六四九	三二五、四九五	一五一、六九六	一、七〇三、〇七九	四五五、二九一	九三、三四一
一九一二		九五六、五二二	三六二、二三〇	一七〇、八六一	一、八八八、一三三	四七五、七九四	九六、六五六
一九一三		一、〇四七、一六四	四一八、二四	一七九、〇八九	二、〇六六、七三六	五二八、一八〇	一〇四、一四七
一九一四		一、一四七、四三三	四七七、七三六	二二五、八三六	二、二八五、八八〇	五九二、〇四二	一一八、〇一〇
一九一五		一、三三二、八六六	五三四、一〇六	二二三、一五	二、五三一、一四三	六四四、〇三六	一二九、四七〇
一九一六		一、三三八、八三六	五六六、一九九	二〇三、一三一	二、七三四、六八四	六〇四、三三三	一三〇、〇三四
一九一七		一、二〇三、七六〇	五五七、三三〇	一九七、六六三	不明	不明	不明

**口、農業以外の産業**

比律賓群島に於ける産業と云へば、農業に限られる観があるが、農業以外にも林業、漁業等、將來可成り有望の事業がある。



**林業** 比律賓群島に於ける處女林は、四萬平方哩に及び、群島の總面積の約三分一を占め、諸種の良材繁茂し、外に二萬平方哩の第二期生林ありて薪材及び小木材を産出するか、群島の森林の九割九分以上は官有で、官有森林は一年乃至二十箇年を限り、伐材の特許を與へてゐるけれども、之を拂下けぬ。群島を通じ約七千の挽材工場あり、國內の需要を充して餘りある、その輸出額は漸次増加しつゝある。而して産出狀況を擧げると、左の如くである。

年次	數量	年次	數量
一九一〇	一五、六八	一九一四	二九、〇九
一九一一	一八、〇八	一九一五	二八、九五
一九一二	二四、九七	一九一六	三三、〇八
一九一三	二七、一七	一九一七	三三、〇八
一九一三のイ	一〇、五三		

(一九一三年迄は各年六月末日迄、一九一四年迄は同年七月一日より同年十二月末日迄)



マニラ園土の人



椰子の實を運ぶ村夫

**鑛業** 比島に於ける鑛産額は、金を除きては極めて貧弱である。之れ鑛山の踏査普及せざると交通、労働及び資本の關係からである。石炭は一九一二年迄多少産出されたが、此後産出せず全部輸入に仰いでるので、政廳は石炭自給策を講じ、頻りに石炭會社の設立を助成してゐる。銅も一九一一年迄少額の産出を見たが、以後産出しない。

最近三ヶ年間鑛山額表

品 種	一九一六年		一九一五年		一九一四年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
金	佛蘭 一五、五九九	一八、八六四	佛蘭 六六	二二、六九四	佛蘭 一九九	五六、二七四
銀	一五、五九九	七、五七六	四六六、九七	一五、六六五	一〇、〇〇〇	九、八七八
鐵	三、二六五、七六九	三、〇一一、七五五	一、九八一、五八七	二、六三三、五八	五、三三五	二、三四九、二六七
滿 鐵	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	—	—	—	—
計	—	三、〇六八、一五五	—	二、六七一、八八七	—	二、四一五、四一九
非 金 屬	—	—	—	—	—	—

品 種	一九一六年		一九一五年		一九一四年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
粘 土	佛蘭 一三、七九二	六八五、〇七八	佛蘭 一一、五〇〇	四七五、〇〇〇	佛蘭 一〇、〇〇〇	四六五、〇〇〇
石 灰	立方米 六五七、九三七	一五三、〇七五	立方米 五八〇、五八〇	一四、〇〇〇	立方米 一〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
土砂及砂利	立方米 三三二、〇四四	五五、五七七	立方米 二六七、九二〇	五八〇、五八〇	立方米 七三、四六二	六五、四三九
石 材	佛蘭 二四、七五〇	三四四、八七一	佛蘭 三三、五〇〇	三三、一一九	佛蘭 二〇六、八九〇	三六七、五四三
鹽	リットル 三、五三三、六三〇	七四二、五〇〇	佛蘭 三〇五、四〇〇	六〇〇、〇〇〇	佛蘭 二一〇、〇〇〇	五九〇、〇〇〇
水	—	八二、九九四	—	五五、〇〇〇	—	五〇、〇〇〇
計	—	二、五九六、〇六五	—	二、一五五、六九九	—	二、一九七、九七二
總 計	—	五、六四四、一六〇	—	三、七七一、一三〇	—	四、六三三、三九一

**水産** 近海の漁類は豊富であるから、之を漁獲して、加工、製造して輸出すれば、實に有望の事業であるが、現在は土民の需要少く未だ利用の途多く開けてゐない。眞珠貝は専ら本邦漁夫に依りて採取され、ホロ島を主産地にする。尙本邦人の漁夫多く活躍しマニラ灣附近、ミンダナオ島のダバオ及びサムボアンガ等に集中してゐる。水産物の輸出状況は左の如くである。

年次	魚類	貝類	眞珠	眞珠貝類	海綿	合計
一九一三	二七、三六	七九、五〇	一〇、〇〇	七、三四		一、〇七、三三
一九一四	一三九、〇五	七四、四三	七、九〇	二二、三四		九三、七〇
一九一五	一四七、四六	六四、三五	三九、三六	一六、四一		一、〇八七、三六
一九一六	一三三、六二	五七、六九	一一、六七	二四、二二		一、〇七、一六〇
一九一七	一〇一、五五	二九六、四四	一六、六二	三四、六三		六六〇、八七

**工業** 本群島の製造工業は全く幼稚にして、殆んど全部輸入に仰ぐ状態である。島内の需要品を製作する家内工業を主とし、麥酒、燐寸、セメント等を製造する新式工場があるが、輸向としては手工に依る刺繍、帽子等の製出の外、規模稍大なる工業としては煙草工場、製糖工場、榨油工場、挽材工場等を擧げ得るのみである。

### 六、外國貿易

#### 最近五箇年實數

比律賓群島の輸出入貿易は、一九一〇年より一九一三年に亙る四

箇年間輸入超過を續けてゐるが、一九一四年以降は連年輸出超過を示し、一九一八年度は未曾有の好況を呈した。即ち最近五箇年の輸出入額は左の如くである。

年 度	輸 出	輸 入	合 計	(單位、ペソ) 輸出超過
一九一四年	九七、三九、二六八	九七、一七、三〇六	一九四、五六、五七四	一〇一、九六二
一九一五年	一〇七、六六、〇〇八	九六、六四、三六七	二〇六、一五〇、三七五	九、〇〇一、六四一
一九一六年	一三九、八七四、三六五	九〇、九九二、六七五	二三〇、八六七、〇四〇	四八、八八一、六九〇
一九一七年	一九一、〇〇八、六一三	一三二、五九四、〇六一	三二二、八〇二、六一四	五九、六二四、五五二
一九一八年	二七二、三五五、〇七二	一九七、一九、四三三	四六八、五三三、四九四	七四、一六六、六四八

#### 重要貿易品表

右表に示す如く、一九一八年度の貿易總額四億六千八百五十六萬餘ペソは前年度に比し一億四千五百萬ペソ即ち四割五分の増加である。是は固より物價の騰貴に基くものあるが主として貿易の隆盛に因るのである。即ち一九一八年に於て百萬ペソを超えたる重要貿易品に就き、一九一七、一九一八兩年度を對比し其輸出入額を表示すれ

ば左の如し。

輸出之部

品名	一九一八年度		一九一七年度	
	數量	價額	數量	價額
マニラ麻	一六九,二六〇,三七七	一六,三八三,一〇〇	一六九,四三五,二〇四	九三,六一五,五五九
椰子油	一五,二八〇,八四七	六三,三八,三七	四五,一九八,四五	三,八八,二九四
砂糖(粗糖及分密糖)	二七,二五八,三六	三,六〇八,七八〇	二〇五,九〇八,四九二	二四,五五五,三五七
煙草	—	二七,一五〇,六六	—	一四,三〇一,〇八一
葉卷煙草	三五九,六六四,八七本	一四,三三三,四三七	二八四,五二四,五〇〇本	九,五八八,一九二
紙卷煙草	一四,五三〇,九五	二,三二,九四一	五三,九七八,一五	一,一三,〇二四
其他の煙草	二五,七四七,八七五	一,二,六八五,二四八	六,八九四,五四七	四,五九九,八七五
コブラ	五五,〇六一,七三六	一〇,三七七,〇二九	九,一八〇,三六	一六,六五四,三〇一
刺繻	—	四,三六一,三五三	—	三,九九,三八
マゲ	一一,二七三,八九	三,七三六,一〇八	一四,六九三,四一八	四,六九六,四九三

品名	一九一八年度		一九一七年度	
	數量	價額	數量	價額
網索	二,二〇九,〇六四	一,七三三,九六八	一,三二一,一六九	七六八,九七四
材木	一六,五二九	一,六一五,〇九六	二七,三〇六	八三三,六六〇
馬尼刺麻屑	四三六,五八〇本	一,五七八,八六九	四九一,七四一本	一,八八〇,一五九
帽子	七〇一,九九七個	一,一八三,四四八	八八七,五七七個	一,三九〇,八三三
其他	—	八,三五三,三八〇	—	五,七七四,五八四
總輸出額	—	二七,一三六,〇七二	—	一九二,二〇八,六二二

輸入之部

品名	一九一八年度		一九一七年度	
	數量	價額	數量	價額
綿製品	—	五八,〇一六,八四四	—	三七,五七四,〇〇五
鐵、鋼及其製品	—	二四,五〇七,九七〇	—	二,八五五,二五
米	—	一六,四三三,五八五	—	一〇,七八一,四六三
自動車及其部分品	—	六,五五五,六六五	—	三,〇八〇,八〇一
小麦粉	—	六,〇三三,五二八	—	三,八三二,〇五〇
絹物	—	五,七七七,〇二四	—	三,九六一,一八七
六比律實概観	—	—	—	一七三